

名探偵コナン～新一の妹～

桂ヒナギク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの名探偵、工藤新一には、双子の妹がいた。

その妹、聡美の日常を描く殺人ストーリー。

兄が小さくなっても気にしない！ 迷宮なしの名探偵！ 真実はいつも一つ！

この作品はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

目次

1.	工藤聡美	1
2.	レストラン	3
3.	コナン	10
4.	自殺	13
5.	同時進行の事件	16
6.	通り魔の解決	19
7.	北海道	23
8.	コウノトリ	26
9.	船上の毒殺	28
10.	被害者であって被害者ではなかったのです	31
11.	帝丹高校爆破予告事件	34
12.	帝丹高校殺人事件	37
13.	モルモット	40
14.	食堂毒殺事件	43
15.	江古田高校	46
16.	犯人は帝丹	49
17.	キツドの正体	52
18.	誘拐	55
19.	教官殺し	59
20.	判決	62
21.	自殺か他殺か	65
22.	黒尽くめ	68
23.	江戸川 クリス登場	71
24.	クリス最初の事件	74

25.	公安の星川	77
26.	沖矢昴	80
27.	見られちゃった	83
28.	カラオケ店で遺体	87
29.	ブラックジャック	90
30.	芸能人殺人事件	94
31.	芸能人殺人事件2	97
32.	芸能人殺人事件3	101
33.	食堂での一時	105
34.	逃げる加村	108
35.	転落殺人	111
36.	結婚詐欺師	114
37.	動き出した物語	119
38.	ウオツカの最期	124
39.	爆発寿司	127
40.	ストーカー	130
41.	第二の爆破	134
42.	爆破事故	137
43.	米花中央病院殺人事件!	141
44.	復讐	146
45.	ポアロ	149
46.	ポアロに突っ込んだトラック	152
47.	殺人犯は沖野ヨーコ?	159
48.	京都八瀬昌撮影所殺人事件!	162
49.	霧天狗伝説殺人事件	166

50.	映画館殺人事件	185
51.	インターネット殺人事件	193
52.	女子プロレスラー死亡事件	197
53.	女子プロレスラー死亡事件	200

1. 工藤聡美

工藤邸。

キッチンで料理をしているのは、日本警察の救世主と言われた、名探偵の工藤 新一しんいちの一卵性双生児の妹、工藤 聡美さとみだ。推理力は兄と引けを取らないくらい長けている。

「はい、ご飯できたわよー」

と、聡美はテーブルに料理を並べる。

席には新一が座って運ばれてくるのを待っていた。

「ねえ、今日は蘭とデートだったよね？」

「ああ、そうだな。空手の都大会で優勝したからトロピカルランドへ連れて行く予定だ」

新一は聡美の料理に手をつける。

聡美も席に座って食べた。

食事を終えた頃、家のインターホンが鳴り、新一が出た。

そこには、とんがり頭の端正な顔立ちをした女の子、毛利 蘭らん。

「よう、蘭。今、食事終えたところだから、準備してくるから待ってろ」
新一はそう言って、支度をして蘭と共に出かけた。

一人になった聡美は、まだ眠気も残っていたので、自分の部屋に行き、ベッドに横たわった。

その時、どこからともなく爆音が聞こえてきた。

慌てて窓の外を見ると、隣の家から煙が上がっていた。

「なんだあ!？」

聡美は慌てて隣家の阿笠邸へ移動する。

中では、阿笠 博士ひろしと言う白髪とほっこりとしたお腹が特徴の老年の発明家が、煙に包まれていた。

「阿笠博士、大丈夫？」

聡美は阿笠を工藤邸の書斎で傷の手当をする。

「博士、今度はどんな発明をしてたんですか？ 朝っぱらからとんでもない爆音響かせて。せつかく、二度寝をしようと思ってたのに」

「君を起こそうと思ってな。目覚まし時計よりは確実に起きるじゃ

ろ」

博士はケラケラ笑いながら言った。

「全く……。で、どんな発明をしてたんですか？」

「よくぞ聞いた！ いいか、誰にも話してはならん。ワシとお前たちけいまい兄妹だけの秘密じゃぞ」

阿笠は胸を張って真剣な表情で聡美を見る。

「コイツはな、個人用移動ロケットだ。完成すれば交通渋滞は解消され、ワシは大金持ちになれる。ナツハツハツハツハ！」

「……そうは見えないけど」

陽気に高笑いをする博士とは対照的に、呆れた表情の聡美。

「ま……見とれ」

阿笠は自信満々に言つて、ベルト部分のコントローラーを操作したが、思うようにコントロールが利かず、博士は本棚に激突し、あつけなく地に焦れ落ちた。

「ダメだこりや……」

あー——と、聡美は思い出したように口を開く。「博士、行きたいところあるんで、車出してもらえますか？」

「それは構わんが、どこへ行くんじや？」

「ちよつと杯戸町はいどちやうのバイク屋に行こうと思つてね」

「バイクを買うのか？」

「うん。いつも博士に車に乗せてもらつてちや悪いからね」

「ほい、わかった」

聡美と阿笠は彼の愛車のビートルで、杯戸町のバイク屋へ足を運んだ。

2. レストラン

杯戸町のとあるバイク屋。

聡美が店に並んでるバイクを眺めている。

ホンダのVTR1000F・Fire stormを見つけ、目を止める聡美。

「すいません、これ買います」

聡美はクレジットカードでFire stormを購入した。

「さ、帰ろう」

聡美はビートルに乗り、阿笠と共に米花町に向かう。

ギョルルルル——お腹が鳴る聡美。

「お腹空いたのか？」

「うん」

「じゃ、レストランにでも寄るかのう」

阿笠がファミレスにビートルを止める。

二人は車を降り、中へと入った。

「いらつしやいませ。二名さまでよろしいですか？」

「はい」

「ご案内します」

ウェイトレスが二人を空席に案内した。

「お決まりましたらお呼び下さい」

ウェイトレスが去って行くとほぼ同時に、二人はテーブルに置かれたメニューを開いた。

「きゃあああああ！」

突如聞こえてくる女性の悲鳴に、駆けつけて確認したくなる聡美だが。

「なんじやろう?」

「どうせ店員がBB見たんじやないの?」

「BBって何じゃ?」

「Black beetle、つまりゴキブリ」

(見に行きたい)

「行きたいんじゃない。行ってこい」

「そう？　じゃ、失礼して」

聡美は悲鳴の元へ駆けつけた。

「どうしました？」

女性が男女共同トイレの前で腰を抜かしてわなわなと震えている。

「ひ、人が……！」

聡美は女性が指差す先を見た。そこには。

「……!？」

血だらけの男性が便器に座った状態で背中を壁にもたれさせて死んでいた。

「一体何の騒ぎ……って、うわー！」

ウェイターがやって来て、トイレの中を見て驚く。

「店員さん、申し訳ないんだけど、店内の出入りを封鎖して、警察を呼んでももらえますか？」

「あ、はいー！」

店員が店の出入りを封鎖し、警察を呼んでいる間、聡美は洗面器下部のダストボックスを開けた。そこには血だらけの包丁が捨ててあった。

(なるほど、これが凶器か)

次に遺体を調べ、死亡推定時刻を算出した。

体の温かさと硬直具合から亡くなって間もないことがわかる。

その時、パトカーのサイレンが聞こえてきた。

サイレンは段々と近付いてきて、店の前で止まった。

(何だ、この微かに甘い香りは?)

捜査員たちが店に入ってくる。

「遺体には誰も触れてないでしょうな？」

ウェイターにそう訊ねるのは、警視庁捜査一課の志村しむら 智明刑事ともあきだ。

「それが、先ほどから妙な女の子が」

「妙な？」

志村刑事は連れあかみねの赤峰よしお 良夫刑事と共に、現場へと向かう。

「これ！ 遺体に触れるんじゃない！」

聡美が振り返り、胸元のバッチを見て捜査一課の刑事だとわかると。

「あ、刑事さんですね」

「君は何だね？」

「工藤 聡美、探偵ですよ。ちなみに死亡推定時刻は二十分ほど前で
す」

「聞かない名だな」

そう言つて警察手帳を取り出す志村刑事。

「警視庁の志村だ。出て行ってくれ」

聡美が現場から出ると同時に、鑑識作業が始まる。

「あー、えつと、志村刑事と言いましたね。そのダストボックスに凶
器が入ってますよ」

「何？」

鑑識がダストボックスを開けると、確かに凶器の包丁が入つてい
た。

「そして、遺体の第一発見者はこちらの女性です」

聡美が未だにわなわなと体を震わせて、何とか立っている女性を示
す。

赤峰刑事が女性に手帳を見せた。

「警視庁の赤峰です。お名前を教えてくださいでもいいですよ
？」

「川村 かわむら 悦子 えつこです」

「では、川村さん、遺体を発見した時、何か見ませんでしたか？ 怪し
い人物とか、何でも結構です」

「いいえ、何も……」

「そうですか。では、被害者と面識は？」

「ありません」

「そうですか。ありがとうございます」

「赤峰くん、店内に被害者と面識のある人物が居ないか聞き込みだ
」
「はい」

赤峰刑事と志村刑事は聞き込みに向かった。その結果、二人の男性容疑者が浮上した。

「そんな、宮島が亡くなるなんて……」

「誠二、どうして死んじまったんだよー!」

二人の言葉から被害者の名が、宮島 誠二だと窺える。

「失礼ですが、あなた方のお名前は？」

「加山 洋次です」

「朝風 裕貴です」

「被害者とはどういうご関係で？」

「大学のクラスメイトです」

「ほう」

「俺たち、大学のレポートを書こうと思って、この店にやってきたんです」

「そうでしたか。因に、あなた方は三十分前、何をしましたか？」

「誠二がトイレに立って、残った二人だけでレポートを書きました」

「志村さん」

と、赤峰刑事が志村刑事に声をかける。

「どうした？」

「今、店員から話を聞いたんですが、厨房で使ってる包丁が一つ紛失されているそうです」

「何?」

「赤峰くん、凶器と同一のものか確認を取ってきてくれ」

「はいー!」

赤峰刑事が鑑識から凶器の包丁を借り、厨房へと入っていった。そして。

「志村さん、凶器の包丁はこの店で使われていた包丁だそうです」

「と言うことは、店員の中にも容疑者がいそうだな」

そう判断した志村刑事が、赤峰刑事と共に厨房へと入っていった。聡美もそれを追う。

赤峰刑事がコックに訊く。

「貴方、被害者と面識があるんですか？」

「高校の時のクラスメイトですよ」

「そうですか。因みに、今から四十分前、貴方は何を？」

「僕はこの厨房で一人で注文の品を作っていましたよ」

「そうですか」

「他のコックさんが見えませんが、どうして？」

「今、お昼休憩です。他の皆さんが戻ってきたら僕も休憩に入る予定
です」

「そうですか」

赤峰刑事たちは厨房を出ると、ウェイトレスに声をかけた。

「失礼ですがお名前を教えてください」

みじりかわ
「緑川 京子です」

「では緑川さん、被害者の宮島さんと面識は？」

「ええ、まあ……」

「どう言ったご関係で？」

「ストーカーだったんです。初めて会った時に一目惚れされて、以来
付け回されるようになって……。でも死んで清々します」

「警察には相談されなかったんですか？」

「相談しましたよ。でも、何もしてくれなくて……」

「それは申し訳ない。では、遺体が発見される二十分前、貴方はどこに
居ましたか？」

「ホールで注文を伺っていました」

「そうですか。では」

赤峰刑事たちは厨房に戻った。

「まだ何か？」

「前川さん、貴方、お付き合いしている女性は居ますか？」

まえかわ
コックの名は前川 茂しげるという。

「緑川さんと交際してますが、それが事件と何か関係が？」

「と言うことは、宮島さんが緑川さんに何をしていたかご存知ですか
？」

「ストーカー行為ですよね。え？　もしかして俺、疑われてる？」

「いえ、別にそう言うわけでは……」

「そうですか。よかったー」

「忙しいところ申し訳ありません。では」

赤峰刑事たちは厨房を出た。

(さて、それじゃあ事件の整理をするか)

聡美は事件の整理をする。

被害者の遺体が発見されたのは、聡美と阿笠が入店して直ぐの午後十二時二十分頃。

被害者の死亡推定時刻は、発見時の二十分前、つまり十二時だ。

殺害の凶器に使われたのは店の包丁。

事件について話を聞いた四人の中で殺害の動機があるのは、緑川さんと前川さんだ。

(取り敢えず、このくらいかな。容疑者が二人に絞り込めたな)

「刑事さん、凶器の指紋はどうなってるの?」

「それなら今、鑑識が分析中だよ」

その時、志村刑事の携帯が鳴った。

「はい、志村。……ああ。……ああ、分かった」

電話を切って仕舞う志村刑事。

「鑑識からの報告で指紋は全て拭き取られていたそうだ」

「そうなんだ」

聡美は考えた。

指紋が出なかったとなると、犯人が誰なのか分からない。例え分かったとしても、証拠不十分である

(くそ、一体誰が犯人なんだ? 前川さんが怪しいと思うが、しかしアリバイが無いってだけで犯人と断定してもいいのだろうか?)

聡美は思考に思考を巡らせた。

(確認してみるか)

聡美は厨房に入った。

「コックさん?」

前川は聡美を見る。

「何かな?」

「白衣を脱いでいただけますか?」

前川は顔を顰めた。

「もしかしてコックさんが事件の犯人ですか？」

「そ、そんなことないだろ。俺は忙しいんだ。出てっくれ」

聡美は厨房を出た。

「赤峰刑事」

「何だい？」

「犯人は前川コックです」

「それは本当かい？」

「うん。白衣の下に返り血を浴びた服を着てる可能性がありますね」

「そう。じゃあ確かめてくるよ」

赤峰刑事は厨房に入った。

「前川さん、白衣を脱いでいただけませんか？」

「なぜですか？」

「返り血を浴びてないか確認するためです。ご協力下さい」

前川は脱兎のごとく逃げ出した。

「待て！」

後を追う赤峰刑事。

「志村さん、前川さんが犯人です！」

「何!？」

志村刑事も赤峰刑事と共に前川を追う。

「待つんだ、前川さん！」

逃げる前川。だが、躓いて転んでしまった。

「確保——っ！」

赤峰刑事が前川を取り押さえ、手錠をかけた。

「赤峰くん、よくやった」

赤峰刑事は前川をパトカーに乗せた。

その後、前川は取り調べで犯行を自供したという。

3. コナン

新一が蘭と共に、トロピカルランドでジェットコースターの順番待ちをしている。

二人がコースターに搭乗し、次の二人が座ったとき、「どけどけど、俺たちが先だ!」と、黒づくめの二人組が、その後ろの順番を割り込んで席に着いた。

発車するコースター。

コースターの走行中、新一の後ろの男性の首が吹っ飛ぶという悍ましい事件が起こった。

犯人は、新一の前に座っていた体操部の女子大生で、トンネルの中で被害者の首にワイヤーを回し、ワイヤーの先端のフックをレールに引っ掛け、コースターの圧力で首を吹っ飛ばすという大胆な方法で殺害したのだった。

その帰り、新一は黒づくめの男の怪しい取引を目撃し、もう一人の男に襲撃され、目が覚めたら体が縮んでいた。

新一は何とか家に帰り、中に入ろうとするが、門を開けられない。そこへ阿笠が通りかかり、新一に声をかけた。

「僕、何をしているんじゃない? そこは工藤兄妹の家じゃぞ」

「博士! 俺だよ、俺! 新一だよ! 変な奴らに変な薬飲まされて小さくなっちゃったんだ!」

新一は阿笠にことの発端を説明した。

「怪しいやつめ。警察に突き出してやる!」
だが、信じてもらえず、引きずられる。

新一は阿笠のヒゲに付いたケチャップや、ズボンの裾のシミを見て、彼がコロンブスというレストランに行っていたことを推理した。

「ほ、本当に新一なのか?」

「だからそうだって言ってるんだろ」

「そんなことって……」

信じられないという顔をする阿笠。

「とりあえず、中へ入れ」

阿笠が門を開ける。

二人は工藤邸に入り、書斎へ向かった。

新一が幼い頃に着ていた服に着替える。

「新一兄ちゃん、帰ったの?」

そこへ、聡美がやってくる。

「おお、聡美か。大変なことになってしまったんじや」

と、阿笠が言う。

聡美は阿笠の隣にいるメガネをかけた小さな新一を見る。

「……誰?」

「こいつは新一じや。変な奴らに毒薬を飲まされて体が縮んでしまっ
てのう」

「はあ? 薬で体が縮んだ?」

聡美の問いに、「そうなんだ」と、新一が答える。

そこに、蘭が現れる。

「新一、帰ってるの?」

「あ、蘭!」

「聡美、新一は?」

「知らない」

「あら?」

蘭が新一に気付く。

「君は?」

新一は、名を聞かれて、とっさにこう答えた。

「コナン。僕の名前は江戸川 えどがわ コナンだ」

「変な名前ね」

「お父さんがコナン・ドイルの大ファンで」

と、新一改めコナンが言う。

「そうなんだ」

蘭はそう言ったあと、阿笠を見た。

「この子、どうしたんですか?」

「実は両親が交通事故で入院してのう。しばらくうちで暮らすことにな
ったんじやが……。そうじや! 蘭くんのところでのこの子を預

かってもらえんかのう!?! その方がコナンくんも喜ぶじやろう!」

「別にいいですけど……」

「そうか!・ そいじゃ決まりじやな!・ 蘭くん、コナンくんをよろしくな」

「はい」

コナンは蘭に連れられ、蘭の父親が探偵をやっている事務所に転がり込んで行った。

4. 自殺

帝丹高校。

聡美が登校する。

「ついに新一と会えなかった」

一緒に登校した蘭が学校に着くなり嘆いた。

「家にも帰ってないなんて、どこ行っちゃったんだろ？」

「連絡ないから、私もわからない」

「はーあ」

ため息を吐く蘭。

校舎に入り、靴を履き替える。

2ーBへ移動し、席に着く二人。

「どうしたの？ 蘭」

と、友達の鈴木すずき園子そのこが泣きそうな蘭に訊ねる。

「新一の行方が分からなくなったのよ」

「マジ？」

「うん」

寂しそうな表情をする蘭。

「どこに行っちゃったんだろう？ 新一」

「そ、その内ひよっこり帰ってくるわよ」

慰める聡美だが。

「もしかして、変なことに首を突っ込んで帰らぬ人に？」

「それはない」

はつきり否定する聡美。

「どうして？」

「実は蘭が来る前、家にいたのよ。でも電話があつて、地方の方へ事件の調査に行っちゃって」

「本当に？」

「うん」

明るくなる蘭。

「その内に連絡あると思うよ」

「そうかな」

チャイムが鳴り、教諭が入って来る。

一方、帝丹小学校では、編入生の紹介がされていた。

「江戸川 コナン……です。よ、よろしく」

「はい、じゃあ空いてる席に座ってね」

コナンは空席に座った。

授業が始まる。

……。

……。

……。

授業が終わり、コナンの周りに人だかりができる。

場所は戻って、帝丹高校。

時刻はお昼。

食堂でご飯を食べている聡美。

「ハイ、いい？」

向かい側に男子生徒が座る。

聡美は、無言で黙々と食べている。

「君、確か工藤 新一の妹だったね」

「ええ」

「君の推理力も彼に引けを取らないそうじゃん？ それで、折り入っ

て相談があるんだけど」

「相談？」

と、ちようどご飯を平らげた聡美は顔を上げた。

「お聞きしましょう」

「実は……」

男子生徒の母親が亡くなった。

部屋に荒らされた形跡があることから、警察は他殺と見て調べたが、捜査は難航を極めている。

母親は、背中を刺された状態で死んでいたという。

「なるほど」

「犯人を捕まえて欲しいんだ。俺の母さんを殺した」

「とりあえず、学校が終わったらお家にお伺いします」
聡美はそう約束した。

放課後、聡美は男子生徒の家に同行した。

現場はリビングで、遺体が倒れていた位置に白線が貼られている。フローリングの床を調べてみると、遺体が倒れていたところの近くに、何らかによる凹みができているのが見つかった。

「第一発見者は？」

「俺だ。昨日、学校から帰ってきたら死んでたんだ」

「その時、暖房ついてなかった？」

「そういえば暑かったな」

「なるほど。わかりましたよ、犯人が」

「え？」

「お母さんは自殺だったんです」

「自殺？ でもどうやって？」

「簡単ですよ。氷にナイフの柄を刺して、床に立てる。椅子を用意し、背中からナイフに向かってダイビングをすれば、自分の背中にナイフが突き刺さるんですよ」

床を見て下さい——と、聡美は床の凹みを指差す。「これは背中にナイフを刺した時にできた傷です」

「なるほど」

「そして、暖房がついていたのは、氷を速やかに溶かすため……これらのごことを踏まえると、お母さんが自殺した、という結論に至るわけですよ」

「でも、何でかあさんは自殺を？」

「動機ですか？ そこまではわかりませんね」

「そっか。でもすすきりしたよ。ありがとう。警察には俺から今の推理を伝えておくね」

5. 同時進行の事件

聡美と蘭にコナン、そして小五郎の四人は、死ぬほどうまいという寿司屋にやってきた。

「コナンはいいとして、なんで探偵娘まで付いてくるんだよ?」

と、開口一番に小五郎は言った。

「だってしようがないじゃない。コナンくんが聡美も一緒につて言うんだから」

蘭が言い終わると、店長が口を開いた。

「いらっしやい! 空いてる席にどうぞ!」

四人は空いてる席に座る。

「お久しぶりですね、毛利さん」

と、店長。

「仕事で一千万ほど入ったからよ。パーつとうまいもんでも娘たちにご馳走してやろうと思つてな」

聡美とコナンは店内を見渡す。

客は我々四人だけのようだ。

「今度は何を解決したんですか?」

「お金持ちが飼つてる猫を探して見つけただけだよ。依頼主の気前が良くてな。解決したら報酬を弾んでくれたんだ」

「そうでしたか。では、これなんか?」

特上のネタを四人に差し出す店長。

ガラガラ——扉が開き、男が入ってくる。

聡美とコナンは男を横目で見やる。

ヒゲの生えた見窄みすぼらしい男だ。

続いて、若い女が入ってくる。

そして、更に男。

彼らはそれぞれ空いている席に着いた。

「トイレどっ?」

最初に入ってきた見窄らしい男がトイレの場所を訊いて入った。その後、若い女が入る。

若い女が出てくると、最後にやってきた男が、トイレに入る。

男が出てくると同時に、志村刑事と赤峰刑事がやってきた。

「志村さんに赤嶺さんじゃないですか」

と、聡美が言う。

「工藤くん!? なんで?」

「名探偵の小五郎さんのご馳走で寿司を頬張りに。お二人こそ、どうして?」

「いや、実はな——」

志村刑事たちは、近くで通り魔による刺傷事件が起き、聞き込みで得られた目撃証言や防犯カメラの映像を元に犯人の足取りを追ったら、この寿司屋に辿り着いた、と言う。

「——と言うことなんだ」

「その防犯カメラに犯人の顔は?」

「それが、目出し帽を被っててわからなかったんだ」

「コナンくん、一緒に来て」

「うん」

聡美とコナンが店を出る。

「志村刑事、犯人はどっちから?」

「店を出て左の方からだ」

「行ってみよう」

聡美とコナンは左へ進んだ。

「ん?」

「どうしたんだ?」

「あの家……」

コナンが聡美の指差した家の窓を見る。

「ああ、確かにな」

真昼間なのにカーテンがかかっているのはおかしい。

聡美は家の駐車スペースに止まっている車を確認した。

(なるほどね)

聡美はスマホを出すと、104から住所でその家の電話番号を調べた。

入手した電話番号へ自分のスマホからかける。

「も、もしもし?」

震えた声で応答する住人。

「立てこもり犯に変わっていただけですか?」

住人とは違う別の声で相手が応答する。

「なんだてめえ? 警察か?」

「探偵ですよ」

「探偵がなんで?」

「刺傷事件起こしたのは、あなたですよね? 馬鹿な真似はやめて出て来てもらえませんか?」

「こつちには人質がいるんだ! 要求を飲めば考えてやる」

「わかりました。要求を飲みましょう」

「もしできなかつたら人質は殺す」

「それで? 私は何をすれば?」

「そうだな……」

聡美はコナンに目配せをした。

コナンが気配を殺して家に潜入した。

「望美のぞみを連れてこい」

電話が切れる。

聡美は寿司屋に戻った。

「志村刑事! 刺傷事件の犯人見つけました!」

「今それどころじゃないよ。ここで女性の方が亡くなってしまったね」

と、赤峰刑事。

「え?」

思考が停止する聡美だった。

6. 通り魔の解決

「それで、事件なんですか？」

「検視官の報告によると、死因は毒物によるものだということだよ」

と、赤峰。

「亡くなつた女性の名は？」

「磯貝いそがい望美のぞみさん、二十代後半だよ」

(望美?)

聡美は立てこもり犯の言っていた人物の名を思い出した。

「あれ？ コナンくんは？」

と、コナンがいないことに気付く蘭。

「コナンくんなら用事あるからつて言つていなくなつたけど……」

「なんだよ。寿司ご馳走してやるつて言つたのに」

「赤峰刑事、我々以外の男性二人と女性に接点はあるんですか？」

「それはなかつたよ」

「となると、怪しいのは、店長さん……あなたということになつてしま
うのですが？」

「待つて下さい！ 私はやってませんよ！」

「ご同行願えますか？」

と、志村刑事。

「だから、俺が殺したんなら証拠を持ってこい、証拠を！」

「志村刑事、待つて下さい」

と、聡美。

「あ……ああ」

聡美はトイレを確認する。

「赤峰刑事、このトイレットペーパーを鑑識に回して下さい」

「わかりました」

赤峰刑事がトイレットペーパーを回収した。

鑑識からの報告で、トイレットペーパーから毒が検出された。

「女性の前にトイレに入ったヒゲの方、あなたはトイレットペーパーに触れましたか？」

ヒゲの見窄らしい男性は首を横に振るった。

「志村刑事！」

他の捜査員がやってきて、志村刑事に報告した。

「何!？」

「どうしたんですか？」

「トイレの窓の外で目出し帽が発見されたそうだ」

「そういうえば、毛利さんたちが来る前に男が来たな」

「どんな顔ですか？」

と、どこからか用意した画用紙とペンでモニタージユを作成する聡美。

「こんな感じ？」

「そうそう、その男だ！」

「名前、わかりますか？」

「みねぎし峯岸さんですよ。うちの常連客の」

「峯岸……殺人までやらかすとはね」

「工藤くん、その峯岸が犯人なのか？」

「否定はできませんね。刺傷事件の犯人は峯岸で確定ですが」

「その峯岸はどこに？」

「近所の方に立て籠もってますよ」

「よし！ その峯岸のところへ行こうではないか！」

聡美たちは峯岸が立て籠もっている家へ向かった。

現場に着き、電話をかける聡美。

応答する男。

「峯岸さん」

「な、なぜ俺の名を」

「あなた、先ほど寿司屋に行きましたね？ トイレの窓の外に目出し帽があったそうですよ」

「そんな事より、望美は連れて来れたのかよ？」

「亡くなりました」

「はあ？」

「あなたが殺したんです」

「どういう事だ？」

「寿司屋のトイレで毒物が検出されています。あなたが用意したものではないんですか？」

「知らねえよ！ 俺じゃねえ！」

「そもそも、あなたが立て籠もってる理由は通り魔をやらかしたから、ですよ？！」

「は？ 通り魔なんてやってねえよ」

「え？」

思考が一瞬停止する聡美。

(はっ!?)

「志村刑事、寿司屋にいたヒゲの男性を！ 速く！」

志村刑事が他の捜査員に寿司屋のヒゲの男性を確保させた。

「工藤くん、部下にヒゲの男性を確保させたが、何の容疑で立件するんだ？」

「通り魔の刺傷事件と口封じに磯貝さんを殺害した容疑です」

「何？」

疑問符を浮かべる志村刑事。

「峯岸さん、あなたはなぜ立て籠もっているのですか？」

「望美に会いたいからだよ」

「峯岸さん、磯貝さんとはどういうご関係で？」

「恋人だよ！ 運命の！ だけど、別れたんだ。もう会わないって。だから、事件起こして、警察に連れて来てもらおうと思ってな」

投降しよう——と、峯岸が家から出て来る。

制服警官が峯岸を警視庁へ連行する。

さりげなく出て来るコナン。

「あら、コナンくん」

と、蘭。

「忘れ物しちやって、戻ってきたらこの騒ぎだけど……」

「小さな探偵さんの出番はなかったかな」

嫌味を言う聡美。

「ほっとけ」

一方、寿司屋で捜査員に確保された男は、警視庁の取調室で犯行の全てを自供したと言う。

7. 北海道

聡美はコナン、蘭、小五郎の四人で、夏休みを利用して北海道に来ていた。

北海道が目前と迫ったフェリーが、船着き場に到着する。

船着き場に着いたフェリーのハッチが開き、車が一斉に出て行く。その車両の一台が、聡美たちの乗った自動車である。

四人を乗せた車は、ヒノキ荘という古びた旅館へと辿り着いた。

「ねえ、小五郎さん」

と、聡美。

「なんだ？」

「そろそろ本題を話してくれないかしら？」

「本題？」

「私たちが北海道に来たワケを。ただ単に遊びに来た、というわけじゃないでしょ？」

「ああ、実はな……」

小五郎は説明した。

北海道に住む小五郎の友人から、妻の自殺を調査してほしいという依頼状が届いた。

小五郎は依頼の内容を確認すべく、三人を連れて北海道にやって来たのだ。

「……というわけだ」

「なるほど」

車から降りた四人が、旅館内へと入り、受付へ足を運ぶ。

「これはこれは毛利くん」

と、口を開いたのは、受付担当の稲垣いながき洋一よういち。彼は小五郎の高校時代の同級生である。

「久しぶりだなあ、稲垣！」

「お連れの三人は？」

「ああ、こいつらは娘とその幼馴染みと居候のコナンだ」

「娘の蘭です」

蘭が言う。

「工藤です」

と、聡美。

「コナンです」

続いてコナン。

「それで？ 依頼状のことなんだが……」

「ああ。そうだったな。まずは現場を見てくれ」

稲垣が受付から出て来て、小五郎たちを現場の部屋へと案内する。

現場は遺体発見時とほぼそのままの状態だった。

「妻はあそこで首を吊っていたんだ」

と、稲垣が指を差す。

聡美がコナンを肩車してロープが垂れ下がっていたと思しき場所を確認させる。

「うわー！」

埃だらけだった。一部を除いて。

「ロープを擦り付けた痕だね」

聡美はコナンを下ろす。

「これが妻の残した遺書だ」

と、稲垣が小五郎に渡す。

「私にも見せて」

と、聡美が遺書を覗き込む。

「生きることには疲れた。あなたを置いて先に逝く私を許して」

「妻はどうして自殺してしまったんだ……」

稲垣は今にも泣きそうだった。

「ねえ、稲垣さん」

と、聡美。

「なんだい？」

「この旅館にパソコンはありますか？」

「ノートパソコンなら」

「それってプリンターと繋がってる？」

「いや、プリンターは置いてないよ」

「なんでそんなこと聞くんだけ？」

と、小五郎は疑問符を浮かべる。

「遺書は印刷された文章じゃん。なのにプリンターがない。これが意味することは？」

「そうか！ 奥さんはパソコンで書いた遺書のデータをコンビニのプリンターで印刷したんだ！」

(アホ……)

「毛利くん、君は本当に名探偵なのか？」

(名探偵の毛利小五郎は新一お兄ちゃんだよ)

「小五郎さん、これから自殺するって人がわざわざコンビニまで行って、遺書印刷して戻ってくると思う？ 私だったら遺書なんて書かないで死ぬけどね」

「どう言うことだ？」

「奥さんは誰かに殺されたってことよ」

「こ、殺された!?!」

驚き戸惑う稲垣。

8. コウノトリ

聡美たちは北海道警察苫小牧警察署に足を運んだ。

捜査一課で、首吊り自殺の概要を聞いている。

ちようど、その警察署に、赤峰刑事が出張で来ており、それもあつてか、簡単に捜査情報を引き出せた。

捜査によると、稲垣の妻は生きる気力を失った、と言うのが動機で、警察は自殺と処理した。

事件の捜査で、警察は薬物を押収していた。所有者は自殺した稲垣の妻だった。

「(お兄ちゃん)』

と、小声で言う聡美。

「なに?」

「なんで奥さんは薬物を?」

「それは俺も疑問に思ってたところだ」

「他殺の線が正しいとすると、奥さんは薬関係の取引とかをやったのかしら?」

「関係がこじれて殺された?」

「うん」

(ということとは……)

「麻薬取締官」

聡美とコナンが同時に言った。

「赤峰刑事、ちよつと」

と、聡美が赤峰刑事を呼んだ。

「なんだい、聡美さん?」

「北海道厚生局で、稲垣さんの奥さんの籍がないか調べてくれない?」

「なんで厚生局なんか?」

「亡くなった奥さんが厚生局に勤めていたんじゃないかなって」

「どうして?」

「だって、亡くなった奥さん、薬物を持ってたっていうじゃないですか。薬物を所持できるのは、厚生局に務める麻薬捜査官か、医療関係

者くらいに限られてくるじゃん」

「なるほど。わかった、聞いてみるよ」

赤峰刑事はスマートフォンを出して、北海道厚生局に繋いだ。

「あ、もしもし？ 僕、警視庁捜査一課の赤峰と申しますが、こちらに稲垣さんという名前の女性はお勤めになってますか？ ……ええ。 ……ええ。 ……お勤めになってる!? ……実は、その方がお亡くなりになりましたね。薬物がらみの事件で殺されたんじゃないかと考えてるんですが…。 ……はい、ではこちらで捜査させていただきます」

赤峰刑事が、「失礼します」と、スマートフォンをしまった。

「聡美さん、ビンゴだったよ」

「相手は何て？」

「山崎 美江やまざき よしえ名義で犯罪組織に潜入してたそうだよ」

「その組織の名前は？」

「コウノトリ」

「コウノトリだって!？」

コウノトリは世間を賑わせてる犯罪組織だった。

事件を起こしても、証拠が掴めず、なかなか逮捕ができず、警察も手を焼いていた。

稲垣の妻は、薬物側から解体しようと、コウノトリに潜入したのである。

だが、妻は正体が発覚し、ついには殺されてしまった、と聡美は推理した。

北海道警察は全勢力をあげて、コウノトリを殺人の疑いで逮捕し、一網打尽にしたのである。

聡美たちは旅館に戻り、稲垣に事件の解決を報告した。

「ありがとうございます！ みなさん、お疲れだと思うので、今夜は是非ゆつくりしていただいて下さい！ 調査料ってことでお金はいりませんので！」

「それは助かる」

と、小五郎。

聡美、コナン、蘭は先に部屋へ向かって行った。

9. 船上の毒殺

苦小牧港を離れ、本州を目指すフェリー。

聡美たち四人は個室を取っていた。

「ねえ、蘭姉ちゃん」

「なーに？ コナンくん」

「船内探索してきていい？」

「じゃ、私が付き添うわ」

聡美とコナンが個室を出る。

「お兄ちゃん、なんか飲む？」

「さつきからコーヒーが飲みたい気分なんだよな」

「じゃカフェへ行こう」

聡美とコナンがカフェへと移動した。

カフェの前には人だかりが出来ている。

「なんだ？」

聡美が人混みをかき分けて中に入った。

驚き戸惑う聡美。

視線の先には、人が倒れていた。

人だかりの中から不安の声が上がる。

「一体なんだってんだ？」

と、コナンがやってきて驚く。

コナンは倒れている人物に触れた。

「気絶してるの？」

「いや、もう亡くなってるよ」

コナンは遺体の口元で臭いを嗅ぐ。

「アーモンド臭だ」

辺りを見渡すコナン。

「恐らく毒殺だろうな」

「みなさん、殺人事件です！ ここから離れて下さい！」

聡美が叫ぶ。

人だかりが騒ぎ出す。

「店員さん、船長さんをお呼びできてもらえますか？」

聡美が店員に言った。

「はいー！」

店員が駆け足で船長をお呼びに行き、連れて戻ってきた。

「一体何が……っ!?!」

驚いて震え出す船長。

「船長さん、捜査の指揮をお願いします」

「捜査の指揮？」

「はい。大型船の船長には司法警察権がありますので」

「と言われましても、こういうことは初めてなので……」

「マニュアル通りでいいですよ」

「それより、あなた方は？」

「探偵……ですよ？」

「探偵？」

「そんなことより、指揮を。あと、医師に診断してもらいたいので、乗船していたら手配をお願いします」

「わかりました」

トランシーバーで医師をお呼びする船長。

やってきた医師が遺体を確認した。

「亡くなってますね。死因は毒物によるものでしょう」

医師の診断をよそに、聡美は被害者の所持品を調べている。

運転免許証などによると、被害者の名は、小御門こみかど 健介けんすけという。

「なあ、聡美」

と、コナン。

「うん？」

「赤峰刑事、この船じゃなかったっけ？」

「そういえば……」

聡美と一緒に船に乗った赤峰刑事を思い出す。

「私、赤峰刑事捜してくる」

聡美は客室に駆け出した。

「赤峰刑事、いませんかー!?!」

「おい、一体なんの騒ぎだ?」

小五郎が個室から出てくる。

「ああ、小五郎さん」

「どうした?」

「カフェで人が毒殺されたんだ」

「何!？」

小五郎はカフェへと駆けて行った。

各個室を開けて回る聡美。

個室の客からは変人と思われるが、致し方ない。

「あれ? 聡美さん、何やってるの?」

赤峰刑事が声をかける。

その手には船内で買ったと思しきお土産が。

10. 被害者であって被害者ではなかったのです

「聡美さん、何やってるの?」

その声に振り返ると赤峰刑事がお土産を手に立っていた。

「カフェで人が殺されたんです」

「何だって!」

お土産を個室にしまった赤峰刑事は聡美と共にカフェへ向かう。

赤峰刑事が警察手帳を船長に提示する。

「ああ、警察の方……」

ホツとした空気になる船長。

「毛利さん、容疑者は?」

「容疑者は被害者と面識のあるこちらの男女三人だ」

小五郎が三人の男女を差し示す。

名前はそれぞれ、小宮山^{こみやま} 志帆^{しほ}、浅見^{あさみ} 満彦^{みつひこ}、左門字^{さもんじ} 進^{すすむ}だ。

小宮山は青森県警本部の警察官。

浅見はルポライター。

左門字は探偵だ。

彼らは被害者と四人での北海道旅行からの帰りである。

「警視庁の赤峰です」

赤峰刑事が小宮山に言った。

「小宮山です」

小宮山が青森県の警察手帳を提示する。

「被害者の小御門さんの職業は?」

と、聡美。

「弁護士よ」

「弁護士……ですか。お住いはどちらなんですしょう?」

「東京に住んでるって聞いたことがあるわ」

「あいつ、世間では悪徳弁護士などと呼ばれて、相当恨まれてるみたいだった」

そういうのは、浅見だ。

聡美は携帯で警視庁にかけた。

電話口で事情を説明し、志村刑事に繋ぐ。

「おお、工藤くんか！ 何の用だ？」

聡美は事の経緯を説明する。

「なるほど。帰りのフェリーでそんなことが。で、何を調べればいいのかな？」

「弁護士の小御門 健介について調べて欲しいのですが」

「小御門 健介？ 悪徳弁護士って言われてる、あの？」

「ご存知でしたか」

「世間ではそう言われてるが。私も仕事で何度かお会いしたが、悪徳だなんて嘘だったよ」

「そうですか。とりあえず、過去を洗ってもらえますか？ 恐らく、怨

恨なので」

「わかった！ 任せといてくれ」

電話をしまう聡美。

それからしばらくして、聡美の携帯が鳴る。

「はい」

応答する聡美。

「工藤くん、志村だ」

「ああ、志村刑事」

「小御門を超特急で調べたが、何もなかったよ」

「小御門の家は調べました？」

「今、部下に調べてもらってるが……お、きたきた」

ちよつと待っててくれ——と、受話器の向こうで携帯を確認する志村刑事。

「今、部下からメールが来たんだが、小御門のパソコンに毒物を購入した痕跡が残っていたようだ」

「痕跡ですか。他には？」

「あとは遺書だね。小御門は仕事が嫌になっての自殺だろうな」

「遺書は後ほど確認させてもらおうとして……、どうもありがとう」

聡美は電話をしまった。

「みなさん、犯人がわかりましたよ」

聡美が口を開いた。

「なんだって？」

と、赤峰刑事。

「親友を殺した犯人は誰なんですか？」

と、浅見。

「小御門さんは被害者であって、被害者ではなかったのです」

「どういう意味だ？」

「小御門さんは自殺なんですよ」

「自殺？」

「小御門さんの家から遺書と毒物を購入した痕跡が見つかっています。遺書には仕事に疲れを生じ、自殺する旨の文章が書かれていたそうです」

「そ、そんな……」

その場に崩れる小宮山。

「小宮山、小御門のこと好きだったもんな」

「そりゃさぞショックだろうさ……」

三人は一堂に涙を流した。

1-1. 帝丹高校爆破予告事件

米花町、工藤邸。

聡美は自分の部屋で推理小説を読んでいた。

「はーあ」

机を離れ、ベッドに横たわる。

時刻は既に三時を過ぎていた。

「寝よう」

聡美が眠りに就くのもつかの間、朝を迎えた。

「眠い……」

時刻は九時前。

「しまったー！」

遅刻である。

聡美は慌てて制服に着替えると、ダツシユで帝丹高校へ向かう。

帝丹高校の校門の前に、パトカーが止まっていて、蘭や園子が中に入れず立ち往生していた。

「どうしたの?」

「ああ、聡美。実は学校に爆破予告が届いたみたいで、生徒たち全員外に避難してるのよ」

ていうか——と、続ける園子。「あんた、遅刻?」

「三時まで推理小説読んでた」

「新一くんもそうだったわね」

聡美は現場にいた目暮警部に声をかけた。

「警部!」

「うん?」

振り返る目暮警部。

「おお! 聡美くん」

「爆弾は見つかったんですか?」

「今、爆発物処理班が搜索してるところだよ」

「爆破予告が届いたそうですね」

「これだよ」

目暮警部が聡美に爆破予告を見せる。

「これが、今朝、ポストに入っていたそうだ」

目暮警部に無線連絡が入る。

爆弾は発見されなかったようだ。

ふう、とため息をつく聡美。

「爆弾が出なくてよかったわ」

「刑事さん」

と、校長が目暮警部に声をかけた。

「なんですか？」

「学校の運営は再開しても？」

「ああ、もう構いませんよ」

校長含め学校関係者は全員校内へ入っていく。

聡美は教室で爆破予告のことを考えていた。

犯人は割れたのだろうか。

「工藤 聡美！」

という教師の声も届かない。

「おい、工藤 聡美！」

「ほえ？」

「これを訳してみろ」

英語の時間だった。

聡美は黒板に書かれた日本語を英文に訳した。

「せ、正解だ」

聡美は自分の世界に戻る。

考えていても埒が明かない。

聡美は教室を出ていく。

「おい、工藤！」

教師が叫ぶ。

聡美は無視して事務室へ向かう。

事務室には目暮警部がいた。

「聡美くんか。今は授業中じゃないのかね？」

「いいんです。それより、事件の犯人は割れたんですか?」

「いや、まだだ。猫の手も借りたいぐらいだ」

「予告状から指紋は?」

「一切検出されなかつたよ」

「そうですか。聞き取りの方は?」

「特に犯人と思しき人物はいなかつたよ」

聡美は思い出す。

(そういえば、この前、学校を辞めた先生が二人いたな……。どちらかが犯人か、あるいは……)

「目暮警部、以前、ここで教師をしていた、きしべ岸辺先生とまゆずみ黛先生を呼んでもらえますか?」

目暮警部は高木刑事を通して二人の元教師を呼んだ。

「お久しぶりですね、岸辺先生に黛先生」

「お、お前は!」

岸辺が聡美を見て驚く。

岸辺は万引きしたところを、聡美に目撃された挙句、警察に通報され、それが学校にも知れ渡り、クビになっていた。

「……………」

黛は無言だった。

黛は校長の奥方と不倫しているのが発覚、辞職に追いやられている。

「お二人がなぜ呼ばれたのか、わかっておりますな?」

目暮警部が二人に訊ねる。

12. 帝丹高校殺人事件

「ああ、爆破予告事件だろ？ ニュースでやってたよ。だけど、犯人は俺じゃねえ」

「恨みがあるなら、私一人を狙えばいいですからね。となると、黛先生、あなたということになる」

「……………」

黛は無言だ。

「黛先生？」

高木刑事がいう。

「黛さんは声帯を全摘出したんです」

「どうしてですか？」

「ガンに侵されていたんです」

黛が手話で伝えてくる。

僕はやってない。僕は無実だ

「目暮警部、彼はやってないと言ってます」

「聡美くん、君は手話もできるのかね？」

「はい」

「黛さん」

と、目暮警部が黛を見る。

「あなたは校長の奥さんと不倫をしていたそうですね？」

「あれは僕の意味じゃないんです。向こうが言い寄ってきて、だそう

です」

「そうですか」

「僕は校長に申し訳ないことをしました。謝罪の気持ちで一杯です」

「岸边さん、あなたは万引きを咎められたそうですが？」

「出来心だよ」

「いけませんな。出来心でも、ものを盗んでは」

聡美は考える。

「この二人のどちらかが犯人なのだ、と。」

「なあ、もう帰っていいか？」

と、その時だ。

「目暮警部！」

部下の刑事がやってくる。

「ば、爆弾が！ 爆弾が発見されました！」

「なんだって!?!」

「今、処理班が処理してますが」

「どこでだね？」

「車です。校舎内を探してもなかったものですから、安心してたのですが、まさか校長の車に仕掛けられているとはつゆ知らず」

ドカーン！——爆音が響いてくる。

爆発物処理班の解体作業も虚しく、爆弾は爆発し、車が炎上して処理班の一人が殉職した。

炎はすぐさま消防隊によって消し止められた。

遺体は粉微塵になっており、原形を保っていない。

その様子を見ていた犯人は、ニヤリとほくそ笑む。

（警察を一人殺した。次はあの女だ）

視線を感じた聡美は振り返るが、そこには誰もいない。

「ん？」

聡美が焦げたワイシャツのボタンを見つけて拾った。

（そういえば、あの人……）

聡美はワイシャツのボタンが取れていた、ある教師の手首を思い出す。

（これは証拠になるな）

聡美は焦げたワイシャツのボタンをポケットにしまった。

「目暮警部、爆弾なんですけど、携帯電話と連動して爆発する仕掛けになっていたそうです」

そういうのは、高木刑事だ。

「うむ……」

「高木刑事！」

と、聡美。

「どうしたんだい？」

「あの、……………なんだけど、調べてもらえますか？」

「すぐに調べるよー」

高木刑事は駆けていった。

それから暫くして、高木刑事が戻ってくる。

「聡美さん、調べてきたよ。君の睨んだ通り、爆発のあった時刻にあの人の発信履歴があったよ」

「ありがとうございます」

聡美は目暮警部に歩み寄った。

「目暮警部！」

その時、部下の刑事が慌てた様子でやってきた。

「なんだね？」

「校長先生が、殺害されました」

「何!？」

(なんだって!?)

聡美たちは遺体が発見された校長室へ向かった。

そこには、ナイフで胸を一突きされ、絶命している校長の姿が。

遺体が運び出され、鑑識作業が行われた。

鑑識の報告で、ナイフからは指紋が検出されなかった。

鑑識作業の終わった現場を、聡美が隈無く調べる。

13. モルモツト

「犯人がわかりました。容疑者を事務室に集めて下さい」
(殺人の方は証拠がないけど、自白に持ち込んでやるわ)
「わかった」

目暮警部が容疑者の二人を事務室に呼んだ。

「犯人がわかったって本当かよ、刑事さん」

「……………」

「みなさん、お揃いで。では、これから警察官爆殺事件と、予告状の送り主を暴いてみせましょう」

「面白い。やってみろ」

「……………」

「事件の発端は、学校に爆破予告が届いたことから始まります」

「ほう?」

「犯人は爆弾に詳しい人物だと思われます。岸边先生、確かあなたは物理の教師でしたね?」

「それがどうした? 俺を疑ってるのか?」

「続けましょう。予告状を送りつけた犯人は、予め校長先生の車に携帯電話で作動する爆弾を仕掛けておき、何食わぬ顔でこの場に現れました」

「それで?」

「……………」

「そして、我々が容疑者と話している最中に、携帯電話を使って処理班の警察官を一名、爆殺しました。これについては携帯会社を調べたところ、犯人の携帯から爆破時刻に発信履歴が残っているのがわかっています」

「む……………」

「犯行の動機は恐らく、以前に自分を逮捕した警察への恨み。そして、自分をクビにした校長への恨みでしょう」

「それで、犯人は誰なんだ?」

「犯人は、岸边先生、あなたです!」

聡美はかつこよく人差し指を岸边に向ける。

「な、何を言うかと思えば。馬鹿馬鹿しい。俺を犯人に仕立てたいなら、証拠を見せろ」

聡美はポケットから焦げたワイシャツのボタンを取り出した。

「これがその証拠です！」

「それが何だって言うんだ？」

「これは、あなたが校長先生の車に爆弾を仕掛ける際に取れてしまったもの。爆発の影響で焦げて車外へ放り出されたのを私が拾いました。ここからあなたの指紋が出れば、決定的な証拠になります！」

その場に崩れる岸边。

「あーあ、ばれちゃったか。俺がやった。俺が犯人だよ」

「連れて行け！」

警察官が岸边を連行する。

「校長先生を殺害したのも彼なのかね？」

「いえ、校長先生を殺害したのは……」

聡美は黛を見る。

「黛先生、あなたです」

「……!？」

驚き戸惑う黛。

「動機は恐らく、校長先生の奥さんのため、ではないでしょうか。不倫が発覚し、夫婦喧嘩が勃発。夫が邪魔になった奥さんは、黛先生に校長先生を殺害するよう依頼をしたんです」

と、そこに現れたのは、言わずと知れた名探偵、工藤 新一だった。

「お、お兄ちゃん!? 何で？」

（お兄ちゃんは縮んでしまったはず。この人は？）

「新一くんではないか！ 今までどうしてたんだね？」

「そんなことはどうでもいいでしょう？」

「そうだったな。黛も連れて行け！」

警察官に連行される黛。

「お兄ちゃん、ちよつと」

聡美は新一を校舎裏に連れ出した。

「あんた誰？」

「誰って、オメエの兄貴じゃねえか」

「嘘。お兄ちゃんは……」

「縮んじまったって言いたいんだろ？ この姿でいられるのも一時的なんだ」

「どう言うこと？」

「風邪の症状と白乾児バイカルの成分を合わせた薬を灰原が作っているな。それを飲んで、一時的だが戻れたんだ」

「灰原って、あのウエーブの子？」

「ああ」

「ゴホッ！——咳き込む新一。」

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

「でも何でまたそんな得体の知れないものを飲んだの？」

「実験段階なんだよ」

「つまり、モルモットにされたわけ？」

「そう言うことさ」

「どのぐらいなの？」

「何が？」

「時間よ。今の姿でいられる時間」

「半日らしい。本当は蘭に会いに来ただけど、校門のところにはパトカーが止まってるじゃねえか。事件かと思って来てみたら案の定だ」

「それにしても——と、続ける新一。「証拠もないのに黛先生を挙げるなんて無謀すぎやしねえか？」

「うるさいわね！」

「ま……落ちたからいいけどよ」

「蘭には会って行くの？」

「そのつもりさ」

「じゃな——と、去って行く新一。」

14. 食堂毒殺事件

蘭は嬉しそうな顔をしていた。

「どうしたの？」

「昨日、新一に会ったの」

「え？ 新一くんには？」

蘭と園子が話をしている。

「うん。でも、すぐに事件があるからっていなくなっちゃったけど」

「そうなんだ？」

蘭が聡美を見る。

「聡美の方は？」

「え？」

「新一に会った？」

「うん。昨日の事件の推理中にね」

（いつも会ってるよ。小さいけど）

聡美は内心そう思った。

チャイムが鳴り、朝礼が始まる。

……。

……。

……。

お昼休み、聡美は一人、教室で考え込んでいた。

頭の中は同級生の男子生徒、清水しみず 洋一よういちのことではいっぱいだった。

洋一は聡美たちのクラスに転校して来た、精悍せいかんな顔立ちをした男子生徒で、聡美は彼に一目惚れをしてしまったのだ。

精悍な顔立ちゆえに、学年中の女子が洋一を取り囲んでいる。

どうしたものか……。

と、洋一を見てみると、彼と目が合う。

ドキドキと心臓の鼓動が高鳴る。

「聡美、顔赤いよ？」

と、心配そうに聡美を見る蘭。

「熱あるんじゃない？」

「洋一くんにお熱だよ」

「聡美、転校生の洋一くんのこと？」

「うん、惚れた」

洋一がこちらへやって来る。

「顔、赤いけど大丈夫かい？ 熱があるんじゃない？」

聡美の額に、洋一がおでこをあてがう。

「大変だ！ すぐに保健室行こう！」

洋一が聡美を保健室へ連れて行く。

「すみません、この子熱が……」

と、保健室に入るが、保健医は留守だった。

「（熱があるのはあなたのせいだ……）」

「え、なんか言った？」

「う、ううん、何も？」

「とりあえず、横になってれば？」

「いや、大丈夫だから」

「でも……」

「本当、大丈夫だから。ありがとう」

「そういえば、名前、まだだったね。なんて言うの？」

「聡美、工藤 聡美」

「へえ。君があのも有名な？」

「うん」

顎に拳を当てて考え込む洋一。

「連絡先教えて」

「うん」

聡美と洋一が連絡先を交換した。

「それじゃ、僕は」

洋一は去って行った。

一人残された聡美は、どうしたらいいか、わからなかった。

（いきなり連絡先を交換なんて）

保健医が入って来る。

「どうしたの？」

「あ、いえ……」

「聡美は保健室を出た。」

保健室を出たはいいが、しかし、行くあてがなかった。

グー——腹の虫が鳴く。

空腹に苛まれた聡美は、食堂へ向かった。

食堂内は騒がしかった。

「おい、工藤！」

上級生が聡美を呼んだ。

「何でしょう？……っ!?!」

聡美は床に倒れている洋一に気づいた。

「洋一くん!?!」

その体を確認する聡美。

洋一は絶命していた。

口元からはアーモンド臭がする。

「青酸カリ……」

と、その時、聡美の携帯がメールの着信を知らせる。

「こんな時に何よ?」

メールを確認すると、洋一からのだった。

僕は命を狙われている。僕にもしものことがあったら、その時は犯人を見つけてくれ。

15. 江古田高校

「全員動かないで！ これは殺人事件よ！」
周囲が騒ぎ出す。

「この中に犯人が？ いやだ、怖い！」
食堂の容疑者が一堂に逃げて行った。
「あ……」

聡美は携帯で警察に通報する。

警察が到着し、捜査が始まった。

「毎回毎回、君は死神かね？」

と、目暮警部が言う。

「殺人事件なんて日常茶飯事でしょ」

「で？ 被害者は？」

「清水 洋一、クラスメイトです」

遺体の前で合掌する目暮警部。

「あれ？ 高木刑事は？」

「休暇を取って佐藤さんとデートだよ」

それより——と、続ける目暮警部。「容疑者は上がってるのかね？」

「私が安否を確認した時、大勢いたんですけど、全員逃げました」

「なんだと？」

「みんな怖いとかなんとか言ってる」

「まあ、無理もなからう。自分の学校で殺人事件が起きたんだからな」

「あと、亡くなる間に洋一くんからこんなメールが」

聡美は目暮警部にメールを見せた。

「ふむ……」

「洋一くんは青酸カリで亡くなったようですよ」

「青酸カリか。だが毒の瓶は発見されておらんぞ」

「とりあえず、司法解剖の結果を待ちましょう」

遺体が回収され、監察医と部下から目暮警部に連絡が入る。

「胃の内容物から青酸カリと共に溶けかかったカプセルが見つかった
そうだ」

それから——と、続ける目暮警部。「部下の話によると、被害者は心臓病で薬を飲んでいたそう。その薬が毒とすり替わっていたのだろうな。しかし、被害者はなぜ命を狙われていたんだ？」

「前の高校で何か会ったんじゃないですかね？」

「前の高校？」

「洋一くん、転校生なんです。警察ならわかってると思ったのに」

「調査不足で悪かったな」

「さて、私は授業に戻るから、前の学校調べといて下さいよ」

聡美は食堂を出て教室に戻った。

「聡美」

と、蘭。

「清水くん、亡くなったんだって？」

「毒殺だよ」

「犯人はわかってるの？」

「外部犯かもしれないわ」

「帝丹の生徒じゃないの？」

「違うよ。今日、転校してきたばかりの生徒を誰が殺すの？」

「それもそうね」

チャイムが鳴り、教師が入ってくる。

教師は、洋一の件で、生徒たちを帰らせることにした。

学校を出た聡美は、その足で洋一の前の学校である江古田高校へ向かった。

江古田高校には、目暮警部がいた。

「目暮警部」

「おお、聡美くんか。学校はどうしたんだね？」

「洋一くんが亡くなったってことで、午後は休校になったんです」

「そうだったか」

「で？ 捜査に進展は？」

「一応、容疑者が二人浮上したんだが、どっちが犯人なのかわからなくてな」

「容疑者について教えてもらえますか？」

目暮警部は答える。

一人は上妻あがつまという男子生徒。

上妻はイジメで自殺した彼女のこと、その原因である洋一を恨んでいたという。十分、殺害の動機になり得る。

もう一人は、吉沢よしざわという洋一の彼女で、別れ話を切り出されていた。二人とも、洋一が持病を抱えていることを知っている。

16. 犯人は帝丹

聡美は目暮警部に聞いた。

「洋一さんの薬のケースの指紋は調べたんですか？」

「ああ、鑑識が調べて、清水とそこご家族以外の指紋が出とるよ」

「江古田の生徒からは指紋を採取したんですか？」

「採取はしたが一致しなかったそうだよ」

その時、新一そっくりの男子生徒が二人の前を横切る。

「え？」

「新一くん？」

振り返る男子生徒。

「何か？」

「いや、なんでもありません」

「あ、そ」

男子生徒は去っていった。

「似てましたね」

「似てたな」

「念のため、帝丹高校の指紋も取りませんか？」

「そうだな」

目暮警部は捜査本部に帝丹高校関係者の指紋を採取させた。

その結果、一人の女子生徒が容疑者に浮上した。

その名は、三年の四方田^{よもた} 明美^{あけみ}だ。

四方田を調べると、米花警察署でストーカー被害の相談を受けてることがわかった。

ストーカーの加害者はわかっていない。

そして、面白いことに、四方田は毛利 小五郎にストーカーの犯人探しを依頼していた。

小五郎の話によると、洋一が犯人だったという。

聡美は四方田が洋一を殺害したのだろうと睨み、目暮警部と共に毒物の入手ルートを洗った。

その結果、闇市場で四方田が青酸カリを購入したことが判明した。

聡美と目暮警部は四方田の家を訪ねた。

「四方田さん、清水 洋一を殺害したのは、あなたですね？」

「何をいうのかな、工藤さん」

「これ、毒物の購入リスト。ここにあなたの名前が記載されています」

目暮警部が闇市場のとある店の顧客リストを取り出した。

「これは私じゃないですよ」

「洋一くんの薬のケースからあなたの指紋も出てます。それでも言い逃れをしますか？」

その場に崩れる四方田。

「私がやりました。あのストーカーに殺されると思って、先手を打ちました」

「青酸カリはどうやって薬のケースに？」

「スリの技術でケースを盗んで、青酸カリを入れて、落としたよって言って返したんです」

「スリ？」

「実は駅とかでスリもやってたんです。本当に、すみませんでした」

「……呆れた」

「署までご同行を」

目暮警部が四方田を警視庁に連行した。

聡美は四方田家を離れ、帰路に就く。

家までの道を歩いていると、背後から気配を感じた。

(つけられてる?)

聡美は走り出し、角を曲がった。

何者かは慌てて追いかけて曲がるが、行き止まりなのに聡美の姿がない。

(どこ行った?)

何者かの背後に、聡美が姿を現わす。

「あんた誰？」

何者かは振り返る。

手元にはスタンガンが見えた。

(スタンガン……?)

ビリビリリリ——スタンガンが電気を放つ。

(こいつ、最近話題の通り魔?)

「お前には死んでもらう」

何者かが聡美に襲いかかる。

聡美は何者かを、カンフーでねじ伏せると、殺人未遂の現行犯で呼んだ警察に引き渡した。

「ご協力感謝します!」

警察官はお礼を言うと、通り魔を警察署に連行した。

17. キツドの正体

教室。

「はあ……」

ため息を吐く聡美。

「どうしたの？」

と、蘭。

「洋一くん、死んじやうし。その洋一くんがストーカーの加害者だったなんて、複雑な気持ちだよ」

「でも、犯人は捕まえたんじゃ？」

「まあね」

「あ！」

聡美は江古田の生徒を思い出す。

「あの人、誰だったんだろう？」

「あの人？」

「うん。江古田高校にね、新一にいちやんそつくりの男子生徒がいてね」

「へえ」

と、その時。

「蘭！」

園子がやってきた。

「どうしたの？ 園子？」

「次郎吉おじさまが、怪盗キツドの予告状を受け取ったのよ！」

次郎吉と言えば、鈴木財閥の相談役である。

その相談役が受け取った予告状の内容によると、次郎吉が大切にしている宝石展に出している宝石をいただき参上することだった。

聡美、コナン、蘭、園子の四人は、宝石展の会場に足を運んだ。

会場には捜査二課の刑事が集まっている。

(ん?)

聡美は不審な人影に気付く。

不審な人影は聡美に気付くと逃げてしまった。

(何だったの?)

その時、停電が起きた。

「停電!？」

と、コナン。

聡美は電力室に向かった。

電力室から白服の何者かが出て来る。

(おっと……)

物陰に隠れる聡美。

白服の何者かは、次郎吉の宝石を目指して走る。

その後を追う聡美。

電気が点くと、宝石がなくなっていた。

そして先ほどの白服が、部屋の中央に立っている。

「キッドー！」

と、コナン。

(あいつがキッド……)

逃げ出すキッド。

聡美とコナンは追った。

キッドは窓ガラスを貫通し、空へ飛び立った。

彼が貫通した窓ガラスには、傷一つなかった。

(逃がすかよー！)

聡美はすぐさまバイクでキッドを追った。

キッドは黒羽という家へと入っていく。付けられてるとも知らず

に。

(黒羽?)

家を見る聡美。

(ここって確か、亡くなったマジシャン黒羽 盗一の家……)

なるほど、聡美はキッドの正体に気付いたようだ。

(これは面白いことになったわね)

聡美はインターホンを押した。

「はーん」

江古田で見た男子生徒が出て来る。

「あ……」

江古田の生徒、黒羽くろぼ 快斗かいとは聡美を見て戸惑う。

「あ、えつと……」

「こんばんは、怪盗キッドさん？」

「え!？」

驚く快斗。

「黒羽 快斗くん。怪盗キッドは、あなたですね？」

「な、なんのことかなあ？ 俺は怪盗キッドじゃないですよ」

「嘘！ この家に怪盗キッドが入ってくの見たわ！」

「そ、それ誰にも言うな！」

「いや、言わないけどさ。私の言うこと、何でも聞くってんなら」

「……聞きます」

「とりあえず、連絡先」

聡美と快斗は連絡先を交換した。

18. 誘拐

聡美が工藤邸の自室で寝ている。

ドカーン！——隣家の阿笠邸が爆発する。

びつくりして起きた聡美はすぐさま阿笠邸に移動した。

「博士、また？」

「目覚ましがわりになったじやろ？」

「休日なんだから寝かせてよ」

「どうしても君に頼みたいことがあつてな」

普通に起こせよ、と内心思う聡美。

「頼み？」

「実はな、君たちの両親なんだが、日本に戻ってくるんじや」

「父さんと母さんが？」

「ああ。それで、新一のことを少し話したんだ」

「で？」

「それで、本当に新一か試すようだから、協力して欲しいんじや」

「何をすればいいの？」

「変装するんじや。君のお母さんは江戸川えどがわ 文代ふみよという名で新一に接

触する。お前さんも誰かに変装してついてってくれ」

「面白そうね。わかった。でも、誰に変装すれば？」

「そうじゃのう……」

阿笠は考える。

「この子なんてどうじや？」

阿笠が写真を持ってくる。

「これは？」

「有希子ゆきこさんの高校の時の写真じや」

「へえ、これが母さん」

「そうだ！——と、閃く聡美。「高校時代の母さんに変装しよう」

聡美は大急ぎで変装道具を集め、高校時代の有希子に変装してポア

口の前に向かった。

聡美はそこで小太りの女性と出会う。

「あら？」

小太りの女性が口を開いた。

「あなた、私の若い頃にそっくりじゃない」

「母さん……なの？」

「え？」

「いや、江戸川 文代さんですね？」

「あなたは？」

「娘の聡美だよ」

「あ、さっちゃん」

文代、もとい有希子は聡美をさっちゃんと呼ぶ。

「私、江戸川 香純^{かすみ}って名乗るから。行きましょ？」

聡美と有希子が階段を登る。

コンコン——有希子が扉をノックした。

「はい」

扉が開き、蘭が出てくる。

「お客様ですか？」

「私たち、江戸川 コナンの家族のもので、コナンを引き取りに来たんです」

「ちよつと待って下さいね」

蘭がコナンに言う。

「コナンくん、家族の人が迎えに来たわよ」

「え？」

コナンがやって来る。

「それじゃ、今までもうごうございました」

聡美たちはコナンを連れて車に乗り込んだ。

「お婆さんたち、僕の家族じゃないですよね？」

「お前の正体は分かっている。工藤 新一」

「……!？」

コナンが驚いた表情をする。

(面白い)

と、聡美。

車が渋滞にはまる。

コナンがドアを開けて逃げ出した。

二人はコナンの行動パターンを読み、阿笠邸に先回りした。

「逃げてても無駄よ」

コナンはクロロフォルムを嗅がされ、眠らされて誘拐されてしまった。

「あ、私抜ける」

聡美は携帯のメールをチェックしていた。

「あら、どうして?」

「目暮警部からお呼びが」

「そう。それは残念ね」

聡美は車から降りると、変装を解いて警視庁へ向かった。

「聡美くん、大変じゃ。少年探偵団の連中が、コナンくんが誘拐されたと言っておる。何か知らないか?」

「少年探偵団?」

「コナンくんが入団している小学生の探偵チームだよ。何度か事件の解決に協力してもらっていてな。そんなことより、その探偵団の連中が、コナンくんが誘拐されるとを、阿笠さんの家の前で見たと言ってるんだ」

(やば。クロロフォルムはやり過ぎだったか?)

「あー、大丈夫ですよ。コナンくん、賢いし」

「いや、しかし、万が一ってことも」

「大丈夫ですって」

「そうかね。だが、目撃証言があるから、警察としては動かねばならん」

「いや、ですから、私もあの場において、子どもたちが見た誘拐犯はコナンくんのお母さんなんですよ」

「お母さん?」

「今日、毛利さんのところに迎えに来たらしいですよ」

「そうか。ならば大事おおいとにしなくてもいいか」

「それじゃ、私は帰りますよ」

その時、捜査一課の室内に電話が鳴り響く。

高木刑事が電話に応答した。

「目暮警部！ 警察学校で殺人事件発生です！」

「何!? 警察学校でか！」

捜査員たちは慌てた様子で現場へと向かって行った。

19. 教官殺し

聡美はバイクで警視庁の警察学校の前までやって来た。校門の前には複数のパトカーが赤色灯を回転させながら止まっている。

中への立ち入りは制服警官によって封鎖されている。

「すみません」

「はい？」

聡美の声に警官が反応した。

「殺人事件が起きたそうですね」

「え？ どうしてそれを？」

「警視庁本部の目暮警部が事件の通報を受けたみたいだから」

「君は目暮警部とお知り合いなの？」

「はい。よく事件の捜査を手伝ってます」

「君は？」

「工藤 聡美。探偵です」

「そう。でも、ここに探偵は必要ないよ」

「そうですか」

そこへ志村刑事が現れる。

「あ、志村刑事！」

「おお、聡美くんか。こんなところで何を？」

「ちよつと、事件の臭いに誘われて」

「中には入れられないぞ」

「ですよねえ……」

「それじゃ、捜査があるんなら」

志村刑事は校内へ入っていった。

それから暫くして、高木刑事が出て来る。

「高木刑事！」

「ああ、聡美さん！」

「どんな事件なんですか？」

「猪俣教官が校舎の屋上から転落して亡くなったんだよ」

「猪俣教官？」

「警察学校時代の僕の恩師だよ」

「他殺、なんですか？」

「うん。かもしれないね。少なくとも目暮警部はそう思ってる」

「猪俣教官のフルネームは？」

「猪俣 陽介」

「猪俣 陽介？もしかして、猪俣 勝男かつおの息子？」

「そうだけど、どうして知ってるの？」

「前に父親が殺害され、警察官を目指したって、ドキュメンタリー番組でやってましたよ。確か、父親を殺した犯人、まだ捕まってないんでしょ？」

「うん、そうだね」

「容疑者は浮上してるんですか？」

「教官の方はまだだよ。父親の方は容疑者は浮上してるんだけど、証拠不足で逮捕できてないんだ」

「父親を殺害した容疑者は？」

「小学校の教師だよ」

「どこの？」

「コナンくんたちが通ってる帝丹小学校だったはずだよ」

「その容疑者の名前は？」

「荻田 鉄平てつぺい。被害者に借金の返済を迫られて殺したんじゃないかと警察は見てるよ」

「聡美はバイクへ跨った。」

「どこへ？」

「帝丹小」

「君一人じゃ危険だ。僕も行くよ」

「でも、捜査があるんじゃない？」

「実は荻田に話を聞きに行くところだったんだ」

「聡美と高木刑事は帝丹小へ向かう。」

「事務室で事情を説明し、荻田との接触を図るが、荻田は退職していて、いないとのことだ。」

事前に調べた住所に行っても、萩田はいない。それどころか、部屋そのものもぬけの殻と化していた。

「どうしようか」

「萩田を捜すしかないでしょ」

(ん?)

聡美が血の臭いに気付く。

「これは……」

お風呂場へ行く。

「どうしたんだい?」

高木刑事の問いを無視してバスタブの蓋を開けた。

「……!?!」

そこには、血まみれの女性の遺体があった。

20. 判決

「高木刑事、目暮警部たちを」

「うん」

高木刑事が目暮警部たちを呼んだ。

「それで、君たちが第一発見者なのかね？」

「はい」

「まいどまいど事件に遭遇するとは、どう言う体質なんだ、聡美くんは」

で——と、続ける目暮警部。「怪しい人物とかは？」

「いいえ」

と、聡美。

「高木、お前は確か、荻田 鉄平に話を聞きに来たのではないか？」

「荻田はいませんでした」

「そうか……」

「警部！」

千葉刑事がやって来る。

「どうした？」

「被害者の身元が判明しました。荻田の奥さんだそうです。名前はあきこ晶子です。」

「旦那はどこ行ったんだ？」

「それが、一週間前からいないようですよ。近所で聴き込んだら、引越したと。それと、監察医からの報告で、遺体は死後一週間ほど経っているようです」

「どこへ引越したんだ？」

「さあ？」

目暮警部は考え込んだ。

「とりあえず、都内の引越し業社を当たってみます」

千葉刑事が去ってゆく。

(被害者の晶子さん、どこかで……)

聡美は俯いて考え込む。

「聡美さん、何を考えてるんだい？」

高木刑事が訊ねる。

「あー！」

聡美はスマホを取り出し、荻田 晶子と検索した。

検察庁のホームページが出て来る。

「やはりな」

「何が、やはり、なの？」

「高木刑事、被害者の晶子さん、検察官のようですよ」

「検察官？」

「あらゆる事件も被告が必ず有罪になることで有名です」

「その話なら私も知ってるよ」

と、目暮警部。

「それどころか、一緒に捜査したこともある」

「事件の被告人から恨みを抱かれて殺されたのかもしれないね」

「よし、交友関係を洗うぞ」

捜査員たちは晶子の交友関係を洗いに向かう。だが――。

「容疑者が浮上しない!？」

目暮警部が驚く。

「どういうことなんだ、それは？」

「容疑者より、旦那を捜す方が近道では？」

と、聡美。

「旦那についても、都外の道府県警に搜索してもらいましたが、いずれ

も発見されず」

「渡航してるんじゃない？」

「それに関しては照会をかけています。そろそろ連絡が来る頃かと」

捜査員の電話が鳴った。

「はい」

捜査員が応答している。

電話を終えた捜査員が、「アメリカに渡航しているようです」と、発言した。

その後、鉄平は犯罪人引き渡し条約により、アメリカから日本に引

き渡され、逮捕された。

取り調べで、鉄平は警察学校の教官と検事の晶子を殺害したことを認めた。

鉄平は送検され、後日、刑事裁判所で裁判が行われたという。

参審とも判決は有罪で、鉄平は小菅刑務所に入れられた。

鉄平は二人の人間を殺したため、死刑が確定した。

21. 自殺か他殺か

帝丹高校。

いつものように蘭と登校する聡美。

教室に入ると、園子が声をかけて来た。

「二人とも、聞いて！ 今日、うちのクラスに転校生が来るそうよ！」

「転校生？」

「イケメンかしら？」

「園子……」

苦笑いをする蘭。

チャイムが鳴り、教師が入って来る。

「みんな、ホームルームの前に転校生の紹介だ」

教師がその人物へ入るように促すと、女子が入って来た。

「ボクは世良 真純。みんな、よろしくな」

「あいつ男のくせにスカート穿いてるぜ」

男子が笑い出す。

「ボクは女だよ！」

「男の娘だってよ」

「ちよつと男子！」

「なんだよ、工藤？」

「彼女は本物の女子よ。膝が内側に向いてるでしょ？」

「言われてみれば」

「男子だったら外側を向いてるから」

「すまん、ボクっ娘」

（やれやれ……）

転校生の紹介を終え、ホームルームが始まる。

「あー、イケメン男子じゃなかった……」

聡美の横で園子が机に伏している。どうやら女子だったことにショックを受けているようだ。

（ん？）

聡美は過去の記憶がフラッシュバックした。

幼い頃、海辺で、世良に似た女の子と遊んでいた記憶。

その時、ある事件が起きて、新一がピエロと呼んだ男がその事件を解決したこと。

(世良って言ったか。あの子、どこかで……)

「それじゃ、世良は……あそこだ」

空席を指す教師。そこは新一の席だった。

「とりあえず、そこに座れ。席は後で用意する」

世良は指定された席に座った。

「君、名は？」

「工藤」

「へえ、君が女子高生探偵の工藤さんか」

「成り行きだけどね」

「へ？」

「いや、死体発見能力が備わってるから、そのついでに事件の解決を、とね」

やがて、ホームルームが終わり、教師が出ていった。

……。

……。

……。

放課後、聡美たちは世良と共に帰路に就いた。

「世良さん」

と、聡美。

「何かな？」

その時、背後でドスツと物音が聞こえた。

四人が恐る恐る振り返ると、そこには男性の遺体。

「きゃあああああ！」

蘭と園子が悲鳴を上げる。

「蘭、救急車と警察！」

「う、うん！」

蘭はスマホで消防と警察に通報した。

やがて、救急車とパトカーがやってくる。

遺体は救急車で病院へ搬送され、間もなく死亡が確認される。

「また君かね、聡美くん」

と、目暮警部。

聡美は無言を回答に落下したと思われる建物の屋上を見やる。

「目暮警部！」

と、高木刑事が建物から駆け下りてきた。

「屋上にこんなものが」

高木刑事が目暮警部に渡したのは、男性が残したと思われる遺書だった。

「なるほど。自殺か」

「いや、他殺だと思うよ」

そう言うのは世良だ。

「なんで……ていうか、君は？」

「世良 真純。探偵さ」

(また面倒なのが現れたか)

内心突っ込む目暮警部。

「聡美くん、彼の言った通り他殺なのかね？」

「ボクは女だよ！」

(何回やるんだこのくんだり)

と、聡美も内心で突っ込む。

「さつき、遺体を見たんですけど、抵抗した痕跡があったから、私も自殺ではないと思います」

「そうか……」

目暮警部は一瞬考えると再び口を開いた。

「高木、千葉、他殺の線も入れて捜査だ」

高木たち捜査員が聞き込みや現場をくまなく調査する。

22. 黒尽くめ

高木刑事が現場付近をうろろろしていた怪しい二人を連れてきた。

「俺らはなんもしてねえって」

「そうだそうだ！」

風貌は黒くろ尽くめ。兄の新一も黒くろ尽くめの二人に小さくされたと言っていたが。

「あなたたち、組織の人間？」

「組織？」

黒尽くめと目暮警部が疑問符を浮かべた。

「なんだね、その組織とは？」

と、目暮警部。

「いや、なんでもないです」

で——と、聡美は二人組を見た。

「先ほど、この屋上から人が落下して亡くなったのですが、あなたたちは付近で何を？」

「も、もしかして俺ら疑われてる？」

聡美たちは頷いた。

「あなた方には指紋を提出していただきましたのですが……」

「指紋？」

「この建物の屋上からあるものが見つかりましたね。それについての指紋と照合したいのですよ」

「別にいいぜ」

なあ？——と、もう一人を見る黒尽くめの男。

二人は指紋を提出するが、しかし、それは一致しなかった。

「どうやら俺らは容疑者から外れたようだが」

「帰らせてもらうからな」

二人は去っていった。

「あれ？」

蘭が何かに気付く。

「そういえば、今の人たち、新一がいなくなっただけにも遊園地にいた

わ

「え？」

聡美は思い出した。以前、コナンが言っていた、黒尽くめの二人の容姿を。その風貌が今の二人に酷似しているのだ。

「目暮警部！」

千葉刑事が建物から出てきた。

「このアパートの屋上から飛び降りるところを見た、と証言する人物が現れました。面倒なことに巻き込まれるのがいやだから黙っていたそうですが」

「なんだと？ それじゃあ、投身自殺なのか」

「恐らくは」

「しかし、遺書の指紋は……」

「恐らく、袋詰めの際に作業員の指紋が付着したのかと。念のため、亡くなった方の部屋にあった他の用紙の指紋も調べたところ、同様のものが」

「そうか。それじゃあ、自殺だな」

捜査員は後片付けをして去っていった。

「帰ろっか」

聡美たちは帰路に就く。

交差点に差し掛かり、聡美は三人と別れて一人で工藤邸へ向かう。

その途中、何者かに追跡されているのに気付いた。

聡美が駆け出すと、何者かも走った。

角を曲がる。

何者かが角を曲がると、聡美の姿がない。

「どこへ行った！」

何者かの後ろに聡美が現れる。

「何かご用ですか？ ジンさんにウオツカさん」

振り返る二人の黒尽くめの男ことジンとウオツカ。

「ほう。俺たちを知ってるとはな」

「兄貴、こいつどこまで知ってるんでやんすかね」

ジンが懐から拳銃を取り出した。

「まだ警察がいるからそれはないんじゃない？ 私を殺すなら例の薬を使いなよ」

「即死ではなく苦しんで死にたいか。いいだろう」

ジンは拳銃を構えたまま、懐からケースを取り出してウオツカに渡した。

ウオツカはカプセルを取り出し、聡美の口に放り込んだ。

「飲め」

聡美は唾を飲み込む。

「うっ！」

苦しそうにしながらその場に倒れる聡美。

「ずらかるぞ」

ジンとウオツカは逃げ出した。

聡美は口からカプセルを取り出す。

「これで解毒剤が作れるわね」

聡美はカプセルをしまい、阿笠邸に向かった。

ガチャリ、と阿笠邸のドアを開けた。

「博士、黒尽くめの奴らから薬かっぱらってきたけど」

「何!?!」

灰原が地下室から出てくる。

「それ本当!?!」

聡美はカプセルを灰原に渡した。

「これがあれば……」

灰原は地下の研究室に戻って行った。

23. 江戸川 クリス登場

聡美は研究室で灰原と話していた。

「え、小さくなる薬を作れですって？」

「うん。奴らには顔が割れてるから、暫く幼児化しといたほうがいかなって」

「だけど、死ぬかもしれないのよ？」

「お兄ちゃんが小さくなったのよ。同じDNAなら小さくなると思うわ」

「どうなっても知らないから」

灰原はアポトキシシン4869を精製した。

「できたわよ」

聡美は受け取ったアポトキシシンを飲んだ。

やがて体が熱くなり、聡美は縮んだ。

「おーい、灰原ー！」

コナンがやってくる。

「って!？」

コナンは聡美を見るなり慌てて後ろを向いた。

聡美が裸だったからだ。

「あ、お兄ちゃん」

「え?」

コナンは振り返る。

「誰だ、お前?」

「聡美よ。私も小さくなったのよ」

「何? ていうか服を着てくれ」

聡美は灰原から借りた服を着た。

「で、組織の連中と接触したから、アポトキシシンを手に入れたと?」

「うん」

「バーロー! 一歩間違ったら死ぬかもしれないなかったんだぞ!」

「大丈夫よ。DNAが同じで確信があったから」

「ま……無事ならいいけどよ」

「さて、私も小五郎さんのところに厄介になるわ」
「ちよつと待てよ。何勝手に決めてんだ？」

「いいじゃない、別に。あ、私のこと、みんなの前ではクリスって呼んでね。江戸川 クリスよ。コナンの双子の妹なんだから」

聡美もといクリスはそう言つて、コナンを引き摺ずつて蘭の家に向かった。

「へえ、クリスちゃんっていうの？ よろしくね」

「よろしくね、蘭お姉さん」

ガチャ、と扉が開いて小五郎がやってきた。

「お父さん、今日からまた居候が増えるから」

「何？」

「この子よ。コナンくんの双子の妹でクリスちゃんっていうのよ」

「そうか。ちゃんと面倒見てやれよ」

「ちよつとお父さん！ その言い方はなに？ クリスちゃんはペットじゃないのよ、ペットじゃ」

「いいよ、蘭お姉さん」

「クリスちゃんがいいなら……」

不満そうな顔をする蘭。

「ところでお兄ちゃん」

「なんだ？」

「少年探偵団紹介してよ」

「いいよ」

「じゃあ、早速」

「今？」

「うん」

コナンは少年探偵団の連中を集め、クリスを紹介した。

「お兄ちゃんがお世話になってます」

「別に世話なんかしてねえぞ」

と、小嶋こじま 元太げんた。

「コナンくんにごんな可愛い妹さんがいたなんて驚きです！」

と、円谷つぶひち 光彦みつひこ。

「クリスちゃんもコナンくんみたいにサッカー得意だったり、推理力抜群だったりするの?」

そう訊ねるのは、吉田^{よしだ} 歩美^{あゆみ}だ。

「推理力には長けてるけど、サッカーは得意じゃないな」

「そうなんだ。これからよろしくね」

24. クリス最初の事件

クリスは帝丹小学校の教室の黒板前に立っていた。

黒板には江戸川 クリスと名前が書かれている。

クリスはコナンと同じクラスを希望していたが、学校の都合で隣のクラスに編入することになってしまった。

「江戸川 クリスです。よろしく」

頭を下げるクリス。

「それじゃ、クリスさんはあそこね」

クリスは教諭が示した席に着く。

隣は醜い顔をした大柄な少年だった。

（こういうの無理めかも……）

クリスはその思ったが、口にはしなかった。

「オデ、加村かむら 義男よしお。よろしくな？」

「よ……よろしく」

（臭いわね、この子。一体、何日風呂に？）

「それじゃあ、十分後に授業始めるからな」

教諭はそう言って、教室を出て行った。

放課後。

クリスは帰路に就いていた。

「あ」

キッドがハンングライダーで上空を飛行していることに気がつく。

「あの人またやってるよ」

「どうでもいいけど——と呟くクリス。

バキュン！——と、どこからか銃声が聞こえてきた。

クリスは音がした方へ駆けつけた。

僅わずかだが、火薬の臭いと血の臭いがした。

辺りを調べてみると、頭部から血を流して倒れている男性を見つけた。

「おじさん！」

クリスは男性に声をかけるが、既に事切れていた。そして、死体のそばには拳銃が置かれていた。

スマホで百十番通報をするクリス。しばらくして、警察がやってきた。

所轄署の刑事がクリスに確認する。

「それじゃあ、銃声が聞こえたから、駆けつけて確認したら、死体を発見したわけだね？」

「はい」

「そのとき、何か怪しいものとか見なかったかい？」

「いいえ、特に。それより刑事さん——」

「凶器もあることだし、自殺でいいよな？」

「あの、刑事さん」

クリスは刑事に声をかけるが、聞く耳を持ってくれなかった。

(クソ。お兄ちゃんの気持ちがあわかったわ)

クリスは刑事の目を盗んでこっそり遺体を調べた。

「ここから」

鑑識がクリスに気づき、その体を抱き上げた。

「あー！」

「お嬢ちゃん、死体に触っちゃいかん。死体には死亡推定時刻や死後硬直があつてな、みだりに触るとそれらが崩れちゃう」

(聡美じゃなきや触らせてもくれないのか)

「山川刑事、この子を送ってやってくれないですか？」

鑑識が刑事に訊ねた。

「お嬢ちゃん、我々警察が家まで送るよ。犯人が近くにいたら危ないからね」

クリスは刑事が乗ってきた覆面パトカーに押し込まれた。

刑事は運転席に座り、車を発進させようとする。

「いけないー！」

「どうしたの？」

「コンタクトレンズを片方落としたみたい。死体の近くで。探させてくれますか？」

「死体には触らないでね」

クリスはパトカーから出ると、遺体の近くまでやってきた。

コンタクトレンズは遺体を調べるための口実であった。

(遺体に触れなきやいいんでしょ?)

クリスは遺体をよく観察した。

後頭部に火傷の痕。

(これは!?)

「ねえ、おまわりさん!」

クリスが制服警官に声をかけた。

「どうしたの?」

「あの人の傷、おかしいよ」

「おかしいって?」

「うん。後頭部の傷の周りに火傷があるもん」

「それって、まさか!」

警察官が遺体を確認する。

「山川さん!」

刑事がやってくる。

「なんだ?」

「この遺体の傷、見て下さい」

「これは!」

刑事は気づいた。後ろから撃たれたものだということに。

「お手柄だよ、君! 危うく自殺で処理するところだった」

「気づいてくれたのはこの子です」

クリスを示す警察官。

「そういえば、君の名前を聞いてなかったね」

「くど……じゃなくて、江戸川 クリス、探偵よ」

25. 公安の星川

「おい、遺体の身元は？」

「免許証では星川ほしかわ 弥わたる、三十五歳となっておりましたが、職業不詳です」

警察が殺人の線で動き始めた。

「山川刑事！」

「なんだい？」

クリスに顔を向ける刑事。

「他殺だって気づいてたよね？」

「なんでそう思うんだい？」

「だって、さっき言ったでしょ？ 犯人が……って」

「そうだったね。その通り、気づいてたさ」

「じゃあなんでその場で他殺で動こうって進言しなかったの？」

「それは……Need not to know、知る必要のないことだよ」

「おーい、何があったんだね？」

クリスが聞き覚えのある声に振り返ると、目暮警部が駆けてきた。

「あ、あなたは本庁の目暮警部！」

「おう、山川くんか！」

ん？——目暮警部がクリスに気づく。

「君は？」

「くど……じゃなくて、江戸川 クリス。コナンの妹だよ」

「ほお！ コナンくんにはこんな可愛い妹くんがいたのか。で、ここで何があったんだね？」

「発砲事件ですよ、目暮警部」

「クリスくん、危険だから帰りなさい」

目暮警部はそう言うと、遺体を見やった。

「自殺……いや、他殺か」

どうやら目暮警部も気づいたようである。

「そういえば、クリスくん」

「なんですか?」

「君の声、どこかで聞いたことがあるようだけど……」

「き、気のせいですよ!」

クリスは両手を顔の前で左右に振った。

目暮警部は拳銃を見た。

「これは!」

「どうしたんですか?」

「うちの組対課が押収した拳銃の一つだよ。紛失してたんだ」

(警察内部?)

クリスはコナンにメールを送った。

数分で返事が返って来た。

(やはりね。だけど、どうやって推理を披露するか……)

クリスは目暮警部を見た。

(声真似ができるからって、流石に目暮警部を眠らせられないよね。仕方ない)

クリスは刑事を誰もいない場所へ連れ出した。

「どうしたんだい、クリスちゃん?」

「被害者殺したの、あんたでしょ?」

「え?」

「被害者、公安の刑事。あなたと星川さんの間には何らかのトラブルがあった。それで殺害した。違う?」

「面白い。証拠は?」

「あんたは自分で犯人だって認めてるのよ。さっき私に犯人が……って。あれ、別に真相に気づいたわけではなく、自分が犯人で、まだ近くにいるってことを示していたんだ。私をパトカーに乗せたのは、一刻でも早く現場から離れるための口実。それといざという時に人質として捕らえるつもりだったんでしょ?」

「まるで見て来たような言い方だね。その通りだけど。でも、ちよつと行動が軽率じゃない?」

刑事が拳銃を取り出す。

クリスは腕時計型麻酔銃を構えた。

「山川さん」

そこに現れたのは、ポアロでバイトする安室 透だった。

「お、お前は降谷！」

「コナンくんから星川が殺されたって聞いてね。それで来てみたら、君がこの子に拳銃を向けている。どう言うこと？」

「くっ！」

逃げ出す刑事。

安室は先回りして刑事を捕まえると、柔道技で投げ飛ばした。
気を失う刑事。

「何だ何だ？ 何の騒ぎだ？」

目暮警部がやって来た。

「安室くんじゃないかね。これは一体？」

「彼が星川さんを消し去ったみたいですよ」

「なんだって!？」

「それじゃあ、あとは任せますね」

安室はそう言って立ち去った。

クリスも目暮警部に一言伝えると、帰路に就いたのだった。

26. 沖矢昴

クリスは学校に登校する。

「おはよう、江戸川さん」

と、加村。

「お、おはよう……」

(臭いんだよ！)

クリスは内心で突っ込んだ。

「おはよう、クリスちゃん」

歩美がやってくる。

「おはよう、歩美ちゃん」

「おっす」

と、元太。

「おはようございます、クリスさん」

と、光彦。

「おはよう、小さな名探偵さん」

と、灰原。

「あー、眠い」

と、夜中の三時ごろまで推理小説を読んでいた推理オタクが言った。

「おい、今、誰か何か言ったか？」

「気のせいだよ、お兄ちゃん」

「じゃあ、放課後ね」

と歩美が言うと、少年探偵団のメンバーが教室に入っ

クリスは加村と共に自分の教室に入った。

放課後、クリスは帰り道を加村と歩いていた。

(臭いわね。はつきり言ってやるか)

「加村くん、風呂入ってる？」

「オデん家、風呂がないんだ」

「はあ!？」

論外だった。

「待つて。風呂がないなら、銭湯とか行かないの？」

「お金がないって、親が行かせてくれないんだ」

「じゃあついて来て」

クリスは加村を連れて工藤邸へやって来た。

「ここって？」

「親戚の家。今は留守だけど、とりあえず風呂に入りましょう？」

クリスがドアに鍵を差し込んだ。

「あれ？」

解錠方向に回らない。

クリスはドアノブに手をかけ、開けた。

「誰かいるの？」

中に入るクリス。

「加村くん、そこで待つてて」

そう言つて奥へと進んで行く。

すると、茶髪のメガネをかけた男性、おきや沖矢 すばる昂が書齋で本を読んでいた。

「お兄さん、誰？　ここは工藤さん宅だよ」

「君は……？」

「江戸川　クリス、探偵よ」

「あ……じゃあ、君がコナンくんの言つていた妹さんだね？　僕は沖矢　昂」

「昂？　赤井　秀一さんなの？」

「そうだよ」

（あいつも一言話してくればいいのに……）

「友達を風呂に入れるから」

クリスは玄関に行き、加村を招き入れた。

加村はお風呂に案内され、入浴をした。

やがて、お風呂から上がった加村からは、異臭が消えていた。

「ありがとう、江戸川さん」

加村はそう言つて帰つていった。

「クリスさん？」

「何、赤井さん？」

「昴と呼んでくれるかな？」

「何、昴さん？」

「君も組織の連中と接触したんだよね？」

「うん。で、例の薬を手に入れてね」

「例の薬？」

「聞いてないの？ お兄ちゃんや灰原さんを小さくした毒薬。アポトキシン4869……」

「薬で小さく？ コナンくんは小学生じゃないのかい？」

「高校生探偵の工藤 新一。私は双子の妹で聡美」

「なるほど。彼はあの時の魔法使いだっただけか」

昴は一人納得していた。

27. 見られちゃった

帝丹小学校からの帰り道。クリスと加村が歩いている。

「今日も行っていいの？」

「ええ、もちろんよ」

「でも、お家の人に迷惑じゃない？」

「大丈夫よ」

工藤邸に着く。

二人は家に上がり、加村が脱衣所へ入っていった。

「さて」

ドカーン！

隣の阿笠邸から大爆発。

「なんだあ!」

クリスは阿笠邸に駆けつけた。

「おー、聡美か。すまんすまん。今、新一のために新しいメカを作ろうとして失敗してのう」

「あ……そう……」

「それより、なぜ工藤邸に？ 毛利くんのところへ帰るんじゃないのか？」

「ああ、加村って子をお風呂に入れにね。彼、家に風呂ないし、貧乏で銭湯にも行けないっていうから」

「そうか」

「じゃ、実家戻るね」

そこへマスクをつけた灰原がやってくる。

「灰原さん？ 風邪？」

「ええ、そうよ。ゴホッ、ゴホッ」

「そういえば、今日見かけなかったわね。寝てなくて大丈夫？」

「優しいのね。大丈夫よ。それより……」

灰原が聡美にカプセルを渡す。

「あなたが手に入れたアポトキシン4869の成分を解析して試しに作った解毒剤。うまく行けば、永久的に元の体に戻れるはずだから、

「試してみてもちようだい」

「ありがとう」

クリスはカプセルをしまった。

「ちよつと、今すぐ試してほしいんだけど」

「ああ、今は無理」

クリスはそう言うと、阿笠邸を出て工藤邸に戻った。

工藤邸では、お風呂から出た加村がリビングで待っていた。

「どこ行ってたの?」

「うん、ちよつとね」

「じゃあ、オデは行くね。ありがとう」

加村はそう言って、工藤邸を出て行く。

クリスはカプセルを取り出し、水で飲んだ。

そこへ加村が戻ってくる。

「か、加村くん!」

クリスが驚き戸惑っていると、その体がみるみる大きくなり、服がつんつるてんとなり、聡美の姿へと変貌した。

「え……?」

口をポカーンと開けて呆然となる加村。

「あれ? 江戸川さんが大きく? あれ?」

脳の理解が現象に追いついていなかった。

「あ……いや……」

どうしよう? 聡美は思った。

「あ、あの、これには深い訳があつて! 江戸川 クリスは存在しなくて、私は本当は高校生の工藤 聡美で……」

「江戸川さんが高校生?」

「そうなのよ。とある薬で小さくなつて」

「そんな薬があるんだ?」

「黙つててごめん」

「いいよ、別に」

「とりあえず、着替えて、それから加村くんのこと送るから」

聡美はそう言うと、自室へ行って普段着に着替えた。

「じゃ、行きましょう」

聡美は加村と家を出るで、彼の家へと向かって歩き出す。

「ねえ、お姉ちゃんのことなんて呼んだらいい？」

「聡美でいいわ」

「わかった、聡美お姉ちゃん」

（加村くんを見下ろすことになっちゃった）

「聡美お姉ちゃんは高校生活に戻るの？」

「うん、たぶんね」

「これからも、お風呂入りに行ってもいい？」

「それは構わないわ」

「お姉ちゃん、彼氏いるの？」

「は？」

「オデ、聡美お姉ちゃんに一目惚れしちゃって」

「あら、正直な子。でも、小学生じゃ恋愛の対象にならないわ」

「じゃあ、オデが大人になったら付き合ってくれる？」

（醜いから無理……だなんて言えないわね）

「そうねえ……、大人になったらね」

「あれ？」

「うん？」

「江戸川 クリスには兄が、コナンって男の子いたよね？」

「Need not to know. 知る必要のないことよ」

「コナンも高校生なの？」

「それ以上詮索しないで」

「……………」

その時、サイレンを鳴らしたパトカーが、二人を追い越していった。

その車は、米花公園の前で止まった。

「事件かな？」

と、加村。

「あ……………」

目暮 十三警部が、パトカーから降りてくるのが見えた。

「目暮警部！」

聡美は目暮に駆け寄った。

「ん？」

振り返る目暮。

「おー！ 聡美くんじゃないか！ 暫くだね」

うん、と加村を見る目暮。

「誰だね？」

「コナンくんの学校の子。子守り頼まれちゃって」

「そうか」

「で、殺人ですか？」

「うん？ まあな。だが今回は探偵の手は要らんよ」

「どういうことですか？」

「犯人自ら電話で通報してきたんだ。人を殺したから米花公園に来てくれってな」

聡美は公園内の様子を確認する。

「ああ、あの高木刑事と話している男性ですか？」

「そうだ」

「自首したんなら、確かに探偵は要らないね。それじゃあ」

聡美は加村と合流して歩き出した。

28. カラオケ店で遺体

「聡美姉ちゃん」

「うん？」

「あの刑事さんと知り合いなの？」

「うん、まあ」

「どう言う知り合いなの？」

「探偵と警察の関係かな」

「お姉ちゃん、探偵なの？ 格好いい」

「間違っても加村くんは探偵にならないでね。探偵には危険がつきものだから」

「うん」

話しているうちに、二人は加村家に着く。

「じゃあね」

加村は家へと入っていった。それを見送った聡美は、来た道に戻った。

「聡美？」

「え？」

振り返ると、帰宅途中の蘭と世良せら 真純ますみ、鈴木すずき 園子そのこ、コナンの姿があった。

「あ、蘭お姉さん」

「蘭お姉さん？」

「クリスマスちゃんの真似だよ。気にしないで」

「あれ？ 聡美ってクリスマスちゃんと会ったことあるの？」

「あるって、あるに決まってるわよ。血縁者だから」

本人だ、とは言わないが。

「ていうか、今までどこにいたのよ？ あなたまでいなくなったと思っただけ心配したんだから」

涙目になる蘭。

「ごめん。成り行き上話せなくて」

「で、どこ行ってたの？」

「それは……」

「まさか、言えないことなの？」

「お兄ちゃんのお手伝いに行ってたんだよ」

「新一の？」

「うん」

「なんで連れて帰ってこないの？」

「事件が彼を捕まえててね」

二人の傍で苦笑するコナン。

「え？ まさか向こうで逮捕されちゃったの？」

「それはない」

「そう……？」

「それより、久しぶりにカラオケどうお？」

「いいわね。行きましようよ！」

と、園子。

「ボクも賛成だな」

「ガキンチョも行く？」

と、園子がコナンを見る。

「いや、僕はいいよ」

「そう」

「じゃ、先に帰ってるね」

「気をつけるのよ。知らない人についてっちゃダメだからね」

(大きなお世話だっつーの)

コナンはそう思いながら、毛利探偵事務所まで一人先に向かっていった。

四人は近くのカラオケ店へ入って行く。

すると、志村が姿を現した。

「志村刑事!?!」

「おお、聡美くんじゃないか。カラオケか。私もヒトカラをしててな。

四人とも一緒にどうだ？」

四人は相談し合った。

「一緒にしましょう」

御一行は志村が取った部屋に入った。

「ん？」

入りぎわに不審な行動を取る女性を見かける聡美。

「志村刑事」

「なんだ？」

「あの人、職質かけてくれる？」

「うん？」

怪しげな行動をする女性を見る志村。

「ちよつと、君」

志村が女性に声をかけた。

「え？」

女性が振り返る。

志村は警察手帳を見せる。だが女性は微動だにしない。

(あの人……)

聡美は女性が目を瞑っていることに気づく。

「もしかして、あの人、今話題の盲目歌手じゃない？」

と、園子が言う。

「盲目歌手？」

「うん。確か、平手ひらて歌子うたこっていう名前よ」

志村と女性の会話に耳をすませると、確かに女性は平手 歌子と名

乗っていた。

「きゃああああー！」

その時、女性の悲鳴がどこからか聞こえてきた。

聡美と世良は駆け出す。

悲鳴の元は女子トイレ。そこに、腰を抜かした女性と、個室に撲殺

された遺体の姿があった。

29. ブラックジャック

聡美と世良は駆け出す。

悲鳴の元は女子トイレ。そこに、腰を抜かした女性と、個室に撲殺された遺体の姿があった。

「何があっただんだね？」

志村が遅れてやってきた。

「志村刑事、殺人事件です」

「何だっって!？」

驚いた志村が遺体を確認する。

「撲殺か」

「なんですか、今の悲鳴は？」

店員が騒ぎを聞きつけてやってくる。

「あ……店員さん、実は……」

志村が店員に遺体を見せた。

「……!？」

驚く店員。

「な、何かの冗談ですよね!! ああ、ひよつとしてドッキリとか？」

志村は首を横に振るう。

「残念ながら、本物の殺人事件です」

志村は店員に警察手帳を提示した。

「私は警視庁の者です。すぐに店の出入りを封鎖して下さい」

「わ、わかりました!」

「ご協力感謝します」

店員は駆け足で去っていった。

「さて、あなたのお名前を教えてくださいいただけますか？」

志村は座り込んでいる女性に訊ねながら、立たせようと手を差し出した。

女性は志村の手を取って立ち上がる。

「米沢 恵子よねざわ けいこです」

「遺体を発見した時の状況を話してもらえますか？」

「そ、その前におしつこの方を……」

米沢は顔を赤らめながら言った。

「それでしたら、男性トイレをお使い下さい」

米沢は男子トイレへと入っていった。

志村は遺体を調べる。

被害者は、小島 百合子という名で、年齢は二十五歳。フリーのルポライターである。

聡美は現場を調べ始めたが、特に気になるものはない。

「あれ？」

聡美が現場を調べている間に、志村がいなくなっていることに彼女は気づく。

「蘭、志村刑事は？」

「志村刑事は平手さんに話を聞きに行ったよ」

「あ、そう……」

聡美はスマホを取り出した。

スマホで平手 歌子について調べる。

平手 歌子は音楽活動をする際の芸名で、本名は公表していない。

また、歌子には二卵性の双子の妹がいるようだ。双子の妹は、地方公務員らしいこともわかった。

聡美はネットを閉じると、目暮に電話をかけた。

「なに？ 平手 歌子を調べろだど？……うん、うん、わかった！」

目暮が高木刑事に平手 歌子を調べさせると、双子の妹が米花駅前交番に勤務していることがわかった。その名は、伊上 恵子だ。

「ねえ、園子」

「なによ、聡美？」

「平手 歌子が盲目になったのって、誰かの仕業なの？」

「高校生の時にいじめが原因で失明したらしいわよ」

「それじゃあ、平手 歌子は今二十五歳……」

聡美は考え込んだ。

「聡美、まさか平手 歌子を疑って？」

「……ん？ いや、違うよ。犯人の目星はついてるし」

「嘘でしょ?」

「本当よ」

聡美が答えると、世良が問う。

「聡美は誰を疑ってるんだ?」

「伊上さんだよ」

「伊上? 誰だい?」

そこへ、志村が戻ってくる。

「志村刑事、米沢さんが戻ってこないみたいだけど……」

「ああ、彼女なら体調を崩したんで、スタッフルームで休ませてるよ」

「連れてきてもらえますか? 事件の真相がわかったんで」

「なに? もうわかったのか?」

「はい」

「よし、それじゃあ連れてこよう」

志村が米沢を呼びに行った。そして――。

「犯人がわかったそうですね」

「ええ。今回の殺害事件の動機は、平手 歌子が関係しています」

「平手 歌子?」

「盲目の歌手ですよ。お名前だけ伺っているとありますが……、彼女が高校生の時にまで遡ります。彼女は当時、同級生にいじめを受けていた……」

「いじめ?」

「ええ。そして、そのいじめが原因で失明をしてしまった」

「それなら私も本人から聞いたよ」

と、志村が言う。

「それを知った妹さんは、当時から調査していたのでしようね」

「待って、聡美」

と、園子。

「この場に平手 歌子の妹さんなんて」

「いるのよ。この場に。そして、その妹さんが、被害者を撲殺した。ブラックジャックでね」

「ブラックジャック？」

「袋状のものに硬いものをつめて作った即席の凶器のことよ。そうですよね、米沢……いや、伊上 恵子巡査！」

「……!? 私が殺人犯？ ふん！ バカも休み休み言っただけいいわ」

「あなたのことは全て調査済みです。あなた、平手 歌子の双子の妹さんなんですってね。今日は、被害者と歌子さんとあなたの三人でカラオケですか？」

「待って。私と平手 歌子？ その人とは似ても似つかないじゃないかい」

「二卵性だから当たり前ですよ」

「……………」

「あなたは被害者に対して強い恨み……歌子さんの失明の原因を作ったことへの復讐の念を持っていた。違いますか？」

「それが動機ってわけ？」

「ええ」

「ブラックジャックは？ 凶器は何よ？」

「あなたが履いている黒い靴下では？」

「……!？」

米沢、もとい伊上は膝をついた。

「彼女がいけないのよ？ お姉ちゃんの視力を奪うから。それに、あいつ言っただけよ？ 本当はお姉ちゃんを殺すつもりだったって。酒を飲ませてベロンベロンに酔わせたら全部吐いたわよ。だから殺してやったわけ」

ピシッ！

聡美は伊上の頬に平手打ちをした。

「あなた、曲がりなりにも警察官でしょ？ もっと他に方法がなかったの？ 傷害でパクるとかさ」

「伊上巡査、あなたを殺人の現行犯で連行します」

志村は伊上を警視庁へ連れていった。その時の彼女の目には、涙が浮かんでいたという。

30. 芸能人殺人事件

聡美とコナンが歩道を歩いている。

「おめえ、小さくならないのかよ?」

「現物から解毒剤作ったみたいだからね。でもお兄ちゃんは有名で顔割れてるやめた方がいいよ」

その時。

「ひったくりよ! 誰か、そいつを捕まえて!」

その声に振り返ると、目出し帽を被った人物が、女性の持ち物を奪ってこちらに向かって駆けていた。

聡美は迫り来るひったくり犯の側頭部に後ろ回し蹴りをお見舞い。

「ぐわ!」

一撃でひったくり犯を気絶させた。

聡美はひったくり犯の目出し帽を外した。

そこへ被害者の女性が駆け寄ってくる。

「ありがとうございます!」

女性はひったくり犯からカバンを奪還する。

「あれ?」

聡美は女性の顔に見覚えがあった。

「あのー、失礼ですが、女優の沖野 おきの ヨーコさん?」

「はい、そうです」

ヨーコがコナンに気づく。

「あ、コナンくんじゃない!」

「知ってるんですか?」

「ええ、前に巻き込まれた殺人事件で、あの眠りの小五郎と一緒に」

「そうなんですか」

「あなたは?」

「工藤 聡美と申します。高校生探偵として有名な新一の妹です」

「へえ。あ、それじゃあ、妹さんに頼んじやおうかしら」

「頼み?」

「はい。実は——」

ヨーコは語り出した。

先日、ヨーコの知り合いで、SARDという音楽ユニットのボーカルが、入院中の病院の非常階段の踊り場から転落して亡くなるという事件があった。その事件は、警察の捜査は入ったものの、足を滑らせて転落したという事故ということで処理されていた。亡くなったボーカルは、ガンを患っており、治療のために入院していたのだ。一部ではガンに苦しんでの自殺なのではないかと噂されている。

「——ということなの」

「それって、坂宮 泉さんのことですよね？」

「ええ。私、泉さんは何者かに殺されたんじゃないかって考えているんです」

「どうしてそう思うんです？」

「え？ だって、亡くなった日より先の日にも、本人は予定を詰めていましたから。スケジュール帳にも、予定が書き込まれていたから、自殺とは考えにくいんですよ」

「でも、警察は事故死だと言ってるんですよ？」

「ええ。でも、納得いかなくて」

「そうですか」

「調べてくれるわよね？」

「それは構いませんけど」

「よかった。じゃあ、病院の場所、教えてくださいね」

聡美は病院名を教わった。

「じゃ、いい結果を待ってますね」

ヨーコはそう言って去っていった。

「お兄ちゃん、私は病院に行くけど、ついてくる？」

「ああ」

聡美とコナンは、坂宮 泉が亡くなった病院へと足を運んだ。

転落した非常階段の踊り場を確認する。

病院へ来る途中、所轄署の刑事課で聞いた話によると、転落時は雨が降った後で泥濘ぬかるんでいたために足を滑らして転落したということだ。

「ここから落ちたのか」

「そうみたい」

「だけど、彼女の身長じゃ柵を乗り越えない限り落下しないだろ。それに事故なら咄嗟に柵に掴まって転落を防ぐこともできるはずだ。自殺の可能性もあるな」

「自殺……」

(本当に自殺かしら?)

聡美はコナンの出した自殺説を不審に思った。

プルルルル——コナンの持っている新一の携帯が鳴り響く。

コナンは携帯を取ると、蝶ネクタイ型変声機を出そうとするが。

「あー！ やべえ！ 変声機忘れたー！」

聡美はコナンの新一用携帯を取り上げた。

「なにすんだよ?」

「いいからいいから」

聡美は応答した。

「おう、蘭じゃねえか。どうしたんだ?」

聡美は怪盗キッド直伝の声真似を利用して新一の声で話し出した。

コナンは傍らで驚いている。

3 1. 芸能人殺人事件2

「実は——」

蘭は語り出す。

今、蘭は園子と一緒に、帝丹高校を卒業した先輩の二宮にのみや 一香いちかに会うため、彼女の家を訪れている。その二宮の家で、蘭と園子は、殺害された一香を発見したという。

「——ということなの。ねえ、新一？ 今、どこにいるの？」

一香といえは、かつて新一が入部していた帝丹高校サッカー部のマネージャーだった人物である。新一とも仲が良かった。

「蘭、一香先輩はどういう風に亡くなってたんだ？」

聡美はコナンにも聞こえるようにスピーカーフォンにした。

「私たちが発見したとき、一香先輩は首を吊って亡くなったの。一香先輩、亡くなる前に言ってたわ。相談したいことがあるって。もしかしたら、それが原因で自殺しちゃったんじゃないかって思ってた」

「現場の状況を克明に教えてくれ。遺体のそばに椅子とか、何か台になるものはあったか？」

「台？ そんなのなかったけど、それがどうしたの？」

「いいか？ 普通、首吊り自殺をするとき、その人物は椅子とか台になるものを用意する。なぜなら縄を首に引っ掛けて、椅子を倒して自らの首を吊るためだからだ。だが、それがなかったと言うことは、一香先輩は他殺としか考えられない。警察には電話したのか？」

「これからするわ。でも、その前に新一に推理してもらいたくて」

「そうか。それより、今忙しいから、切るな」

「忙しいって、何してるのよ？」

「SARDの坂宮の亡くなった原因を調べててな」

「坂宮 泉の？ なんでまた？」

「実は沖野 ヨーコに頼まれて」

「へえ、そうなんだ？」

「忙しいから、もう切るぞ」

聡美は電話を切ってコナンに渡した。

「お前今、俺の声を出したよな？」

「怪盗キッドに教えてもらったのよ」

「キッドに？」

「うん。捜査二課の中森警部に正体暴露するって脅してね」

「正体知ってるのか？」

「うん。黒羽くろばっていう亡くなったマジシャンいたでしょ？」

「ああ、そういえばそんなニュースあったな」

「その黒羽の息子が怪盗キッドなのよ。名前は快斗かいと。誰にも言わないでね」

「ああ。次にキッドと対峙したときのためにとつとくよ」

「で、坂宮に戻るけど……」

聡美とコナンは、地上に降りると院内に入った。

受付で坂宮のことについて訊ねる。

坂宮が亡くなった日、彼女の見舞いに来た男性が入館していることがわかった。

男性の名は、宮木みやぎ 義晴よしはる。坂宮の幼馴染らしい。

「住所は教えては……くれないですよね？」

「ええ、個人情報なので。警察なら例外ですけど」

聡美は懐から警察手帳のレプリカを取り出した。

「警察の方？」

聡美のズボンの裾を引っ張るコナン。

「何？」

「お前、それ公記号偽造だぞ」

「犯罪には利用してないから、不起訴になるわ」

「あそ」

聡美はレプリカをしまう。

「宮木さんの住所を」

スタッフが入館記録を持ってきた。

「これが宮木さんの住所になります」

聡美は住所をメモした。

「ありがとうございます」

「聡美とコナンは宮木家を訪ねた。」

ピンポン、とチャイムを鳴らすと、男性が出てきた。

「誰だ？」

「探偵の工藤と申します。あなた、坂宮さんが亡くなった日、彼女に会われてますよね？」

「会ってないよ。というか、会えなかったんだ」

「え？」

「病室に入ったらいなくて、どこを捜してもいなかったからね」

「それ、本当ですか？」

「ああ。だけど、まさか亡くなるなんて……。俺たち、婚約してたのに……」

「婚約者だったんですか？」

「ああ。あんた、俺が殺したと思って来たわけ？ 婚約者相手にそんなことするわけないだろう」

「それもそうですよね」

「俺、眠いんだ。用がないなら帰ってくれ」

「最後にいいですか？ 宮木さんのお仕事はなんでしょう？」

「芸能人だよ」

「お笑いですか？」

「いや、マジシャンだよ。今日は明けでマジックバーから帰ってきて、寝るところだったんだ」

「それはすみませんでした」

「なんかわかったら教えてくれよな」

扉を閉める宮木。

「とりあえず、一香先輩のところ行こうか？」

「ああ、そうだな」

聡美とコナンはバイクで一香の家を訪問した。

「あ、聡美にコナンくん」

と、蘭が二人に気づいた。

「お兄ちゃんから聞いたよ。一香先輩、亡くなったんだって？」

「うん。今、所轄の刑事さんたちが捜査中」

聡美は現場に入った。

「刑事さん」

「なんだい、君？ 勝手に入って来ちやいかんだろ。見張りの警官は何してるんだ？」

「私のことを知らない？」

「知らないね」

「探偵の工藤ですよ」

「工藤？ 工藤は確か男じゃなかったか？」

「の、妹」

「そうか。しかし、だからと言って、現場に勝手に入るのはいただけないな」

32. 芸能人殺人事件3

「で、遺体の状況から見て事件性は？」

「皆無だろ」

「おかしいですね」

「何が？」

「首を吊る時に使った台になるようなものはありませんよ？」

「た、確かに……。それじゃあなにか？ 君は殺人だど？」

「ええ。ところで、一香先輩の職業は？」

「マジシャンをやっていたみたいだよ」

「マジシャン……」

聡美は宮木を思い出した。

刑事は別の刑事に被害者の交友関係を洗い出すように指示した。

やがて、眠そうな顔の宮木がやってくる。

刑事の話によると、宮木と一香は同じマジックバーで働く同僚だという。

「一香が殺された？」

宮木が現場へ入ってくる。

変わり果てた一香の姿に、気が動転する宮木。

「いつたい、誰がこんなことを……？」

「警部！」

刑事が警部にヒソヒソと何かを話す。

「なんだって!？」

「どうしたんですか？」

聡美の問いに刑事が答える。

「実は、被害者の友人関係を調べていたところ、二日前に事故で亡くなった坂宮 泉がいることが浮上したんだ」

「坂宮 泉ですって？ さっき現場を見て来たばかりですよ」

「ほう」

「坂宮さんと一香先輩の関係は？」

「ご姉妹だよ。坂宮の本名は二宮だ。一香は泉の姉だ」

「何ですって!？」

聡美は驚き戸惑う。その傍らで宮木が冷や汗を垂らしているが、彼女はそれに気づいていなかった。

(二つの事件、何か関連があるのだろうか……)

聡美は考えた。

「あーれれー!」

コナンが大声を出した。

「どうしたの、お……コナンくん？」

コナンが聡美に衣服から千切れたボタンを渡した。

「これは？」

「あそこにあっただ」

コナンが棚の下を指差す。

「あの下に？」

「うん。これ、一香さんが犯人ともみ合いになったときに千切れたんじゃないかな？ ひよつとしたら犯人のかも」

聡美は警部にボタンを渡した。

「鑑識に回そう」

警部が鑑識にボタンを渡した。

「ん？」

聡美は棚の上の、倒れた写真立てに気づき、起こした。

宮木と一香のツーショットが写っている。

「宮木さん、これは？」

「あ？ ああ、それは一香と付き合ってたときの写真だよ」

「へえ……」

(うん?)

「宮木さん、あなたは坂宮さんと婚約している傍ら、一香先輩と付き合っていたんですか？」

「うん、まあね。と言っても、泉と婚約する前だけだね」

(まさか、そういうことなのか？ だけど肝心の証拠が……。ええい！ 出たところ勝負だ！)

「刑事さん、一香先輩を殺害した犯人がわかりましたよ」

「何だつて?」

「一香を殺した犯人?」

宮木が聡美を見つめる。

「誰が一香を殺したんだ?」

「順を追って説明しましょう。宮木さん、あなたは最初、一香先輩と交際していた。しかし、坂宮さんの熱烈なアタックとプロポーズで、一香先輩と別れることにした。合ってますか?」

「ああ……」

「それを、宮木さんを奪われたと思った一香先輩は、坂宮さんを現場である病院の非常階段の踊り場へ誘い出し、婚約を解消させようとした。しかし、坂宮さんはそれには応じなかった。やがて二人はもみ合いになり、結果、一香先輩は坂宮さんを踊り場から突き飛ばし、転落させて殺してしまった」

「……………」

「それに気づいた犯人は、一香先輩の部屋を訪れ、問い質し、激昂してもみ合いの末、一香先輩を首を絞めて殺してしまった。焦った犯人は、なんとか疑いをそらそうと思い、自殺を偽装するが、致命的なミスを犯しました。それは、自殺に使う台のようなものを用意することを忘れたことです。しかし、犯人はそれに気づかず、安心して自宅に帰りました」

「待ってくれ。坂宮は事故死だ」

と、所轄署の警部が言う。

聡美は首を横に振るつた。

「いいえ、他殺なんです。そうですね? 一香先輩を殺害した犯人の宮木さん!」

「なっ!? 証拠はあるのか?」

「まだあなたの家にあるんじゃないですか? ボタンの千切れた仕事着が」

宮木はその場に崩れた。

「その通りだよ、女子高生探偵。全てあんたの言う通りだ……。悪いことはするものじゃないね」

「連行しろ」

宮木は警察官によってパトカーで署まで連行されたという。

33. 食堂での一時

帝丹高校。

蘭が幸せそうな顔で登校してきた。

「どうしたの?」

園子が訊くと、蘭は新一と電話で話をしたという。

(それ私なんだよね)

内心で暴露する聡美。

「新一くん、いまどこにいるの?」

「昨日、坂宮 泉が亡くなった現場にいたみたい。殺人事件だったらしいよ」

「坂宮 泉って、病院の非常階段から落ちて亡くなったあの!?!」

「うん」

「そうなんだ」

チャイムが鳴り、教師が入ってきてホームルームが始まる。

……。

……。

……。

お昼休み、聡美は食堂に来ていた。

「すみません、焼きそばパン一個」

「ごめんねー。焼きそばパンは今売り切れちゃったよ。焼うどんパンで我慢して」

「焼うどん……?」

「今月から出してる新商品よ。美味しいんだから」

食堂スタッフが焼うどんパンを出す。

本当にうまいのか、と訊こうと思った聡美だが、面倒なためやめた。

お金を払い、焼うどんパンをもらう。

「まいどありー!」

聡美は席に座り、焼うどんパンを食べてみる。

「あ、美味しい」

向かい側に、見覚えのない男子生徒が座る。

(えつと……誰?)

「うん? 俺の顔になんかついてる?」

「いや、別に」

「あそ。ああ、俺は柴山しばやま 裕一ゆういちって言うんだけど、君は?」

「工藤 聡美」

「工藤? 工藤 新一の親戚か?」

「うん」

「そうか」

……………。

無言が続いたが、柴山が口を開いた。

「君さ、彼氏いる?」

「え?」

(なんだこいつ?)

「いや、いませんが……」

「フリでいいから、俺の彼女になつて?」

「……は?」

「だから、ウソカノになつてよ」

「ウソカノって、あなた……」

「ダメ……?」

「ダメに決まってるでしょ。私には加村って……」

言いかけて止まる。

(あれ? なんで今、加村くんの名前?)

「加村? 加村って、あの加村?」

「え?」

「だから、三年A組の加村だよ。精悍な顔立ちはしてるけど、中身はヤバヤバの不良だつて噂さ。稀まれに学校に来るけど、ほとんど来てないって聞くよ」

その時だ。

「なんで焼きそばパンねえんだよ!」

精悍な顔立ちをした男子生徒が叫んだ。

「あいつだよ、加村って」

「ああ？ 何見てんだてめえ？」

加村が柴山に歩み寄ってくる。

聡美が加村を遮る。

「か、加村くんってあなた？」

「そうだけど、あんたは？」

「工藤 聡美」

「ほう」

品定めをするようにまじまじと見つめてくる加村。

「あんたが工藤 聡美か。可愛いじゃねえか」

「あ、ありがとうございます」

「うん、決めた。お前、俺と付き合え」

「いや、それは……」

「なんだお前？ 俺が嫌なのか？」

「そう言うわけでは。精悍な顔立ちなのは評価します。ただ、お互いのことよく知らないし。だから、まずはお友達からってことでお願ひします」

「そうかよ」

加村は聡美に手にある焼うどんパンを見た。

「あ、お前それ焼きそばパン」

「え？」

聡美は焼うどんパンを加村に奪われ、食われた。

「つて、うどんかよー！」

「あ、私の……」

「ああ、すまん」

加村は100円を渡して去って行った。

「いや、あの、足りない……」

だが、加村には聞こえていなかった。

34. 逃げる加村

放課後。

聡美が蘭と園子と一緒に帰路に就いている。

そこへ、背後から加村が走ってくる。

「どけー！」

加村が聡美たちを押しつけて抜けていく。

「待てー！」

その後を、赤峰刑事が追う。

「赤峰刑事！」

「ああ、聡美くんたち！」

赤峰刑事が慌てながら加村を追って行った。

聡美は携帯で目暮に連絡を取った。

目暮によると、加村が殺人の容疑者として浮上したらしい。

その電話のあと、加村 義男から電話が。

「どうしたの？」

「兄ちゃんが！ 兄ちゃんが警察に追わでてるんだ！ 助けて！」

(あの人、義男くんのお兄さんだったんだ)

「聡美姐ちゃん、お願いだよ！」

「わかった。お兄さんは私が必ず助ける」

聡美は電話を切るとポケットにしまった。

「とは言うものの、見失ったわね」

聡美は二人が走り去って行った先を見る。

「聡美、事件現場へ行ってみたら？ 聞いてるんでしょ？」

「そうね」

三人は現場である近くの廃屋に足を運んだ。

「おや？ 聡美くんたちじゃないか」

三人は志村刑事に遭遇した。

「こんなところへどうしたんだ？」

「ちようどよかった。志村刑事、現場をちらつとでいいんです」

「ああ、構わんよ。君たちには世話になってるからね」

三人は現場に足を踏み入れた。

「被害者はホームレスの権藤 美喜男。遺体があるとの通報を受けてやってきた我々が、近くをウロウロしていた加村という少年に職質をしたところ、逃げ出したので赤峰くんが追いかけてる」

「被害者の所持品等は？」

「数枚の千円札と小銭だけだったよ」

「名前は どうして？」

「ホームレス仲間聞いて回ったんだ」

「殺害方法は？」

「絞殺だ。発見したとき、ロープで首を吊られていた」

聡美は現場の状況を観察する。

垂れ下がっているロープの下に崩された黄色い箱。犯人はそれを積み上げ、登って首を吊ったか。

「志村刑事、犯人は権藤さん自身ですよ」

「なに？ どういうことだ？」

「黄色い箱、崩されてますよね？」

「これは争った後なんじゃ？」

聡美は降ろされた遺体の首元を示す。

「争って絞殺されたんなら、遺体の首には吉川線があるはずですよ」

「吉川線？」

と、蘭が疑問符を浮かべた。

「吉川線ってのは、絞殺された被害者が抵抗したときに首元でできる引っかき傷のようなものだよ」

「ああ、本当だ」

志村刑事が遺体を再確認して納得する。

「権藤さんはなんらかの動機があって自殺したのでしょね」

あー！——聡美は思い出したように言う。「赤峰刑事を止めないと」
「そうだった！」

志村刑事は赤峰刑事に連絡を入れた。

「赤峰くん、逃走した加村はもういい。権藤は本当は自殺だったんだ」
「なんですって!？」

電話越しに赤峰刑事の驚いた声が聞こえた。

「わかりました。追尾はやめます」

電話をしまう志村刑事。

「聡美くん、どうもありがとう。あとは我々で」

「いえいえ」

三人は現場を後にした。

35. 転落殺人

聡美は帝丹高校から出て帰路に就いた。

一緒に帰るのは蘭と園子、それから世良だ。

「ねえ、三人とも」

と、蘭。

「どうしたんだ、蘭くん？」

世良が訊く。

「帰り道に小学校通るから、コナンくん迎えに行こうよ！」

「そうだね」

と、聡美。

四人は帝丹小学校にやってくる。

校門の前に立っていると、警備員がやってきた。

「君たち、何か用かな？」

「コナンくんを待つてるんですよ」

「ここで待つより、中へ入ったらどうかね？」

「そうですね」

四人は校内に入った。

一年の教室へ行く。

「コナンくん」

元太たちと話していたコナンがこちらを見る。

「あ、蘭姉ちゃんたち、どうしたの？」

「帰るついでだから迎えに来たのよ」

「そうなんだ。でもごめん。みんなと博士の家に寄ることになってるから」

「そう。遅くならないうちに帰ってくるのよ？」

「うん」

四人は帝丹小学校を後にした。

「どっか寄っていかない？」

と、園子が言う。

「どっかへってどこへ？」

その時だ。

「きゃああああ！」

女性の悲鳴が聞こえてきた。

聡美は悲鳴の元へ駆けつける。三人も追ってきた。

「何かあったんですか？」

聡美の問いに女性が指を差した。

その先にはマンションがあり、その前に男性が血だまりの上に横たわっている。

聡美は男性の生死を確認した。

「どうなんだ？」

と、世良。

聡美は首を横に振るった。

「何があったんですか？」

「私、そのマンションなんだけど、いきなり上から落ちてきたのよ」

聡美と世良が屋上を見上げた。

特に怪しいものはない。

「上、行ってみるか？」

「蘭、警察に通報しといて」

聡美と世良が屋上へと向かうが、しかし、そこへ繋がるところに柵状のドアがあり、錠前で閉ざされていた。

ここへ登ってくる間、誰ともすれ違っただけでいなかった。屋上の前までエレベーターで上がった時に、もし犯人が存在するとしたら、非常階段で逃げた可能性がある。

二人は地上に降り、警察の到着を待った。

やがて、サイレンが聞こえ始め、それが近づいてきて、覆面パトカーが姿を見せる。

覆面パトカーから、目暮警部たちが降りてきた。

「聡美くんか。何かあったんだね？」

聡美は目撃者のことを示した。

「彼女が事件の目撃者です」

「事件？ 殺人なのかね？」

「恐らくは」

聡美に次いで、世良が口を開いた。

「たぶんあそこから落ちたんじゃないかな」

世良はそう言って、屋上を指差した。

……。

……………。

……………。

「えー、亡くなったのは、このマンションの管理人で、ひさぎ 檜佐木 しゅういち 秀一さん、五十八歳の独身。屋上の前の扉に鍵がかけられていたところから見て、誰かに突き落とされた可能性があります」

そう高木が事件の説明をする。

「警部、現場付近で不審な行動をしていた二人を連れてきました」

と、佐藤刑事が二人の男性を示した。

「あなた方は？」

左の男が言う。

「俺は山崎 あきお 昭雄」

「付近で怪しい動きをしていたというが？」

「ああ、コンタクトレンズを落としてしまいましたね。それで探し回ってたんですよ」

(新しいの買った方が速いんじゃないの?)

と、聡美は思った。

「あなたは？」

「僕は吉原 けいぞう 敬三」

「付近でなにをしていたんですか？」

「すみません！ 空き巣に入る家を物色してました！ でも、今日は入ってません！ 本当です！」

「空き巣はしないように！ けど、今回は空き巣じゃなくて、殺人事件なんですよ」

二人の顔が驚きの表情に変わった。

36. 結婚詐欺師

聡美は開放された屋上に上がった。
転落現場をくまなく調べる。

「なんか見つかったか？」

と、声をかけてくる世良。

「いや。そっちは？」

「こつちもだよ」

「コンタクトと落ちてないか見たけど全然だね」

鑑識のトメが訊ねる。

「君たち、コンタクトを探しているのかい？」

「いや、別にそう言うわけじゃ……」

「コンタクトなら遺体の服のポケットから見つかったって報告があったよ」

疑問符を浮かべる聡美と世良。

「コンタクトから指紋は？」

「微量だが採取できたらしい」

「犯人は決まり、だな」

世良はそう言いながら、聡美を見る。

「行こう」

二人は地上に降りた。

「目暮警部、山崎さんはどちらに？」

聡美と世良は山崎がいないことに気づく。

「アリバイがあつたんで帰ったよ」

「吉原さんは？」

「空き巣の常習犯ってことで捜査三課に預けたよ。近隣で起きた空き巣事件に関与がないか調べてもらってる」

そこへ高木刑事がやってくる。

「警部！」

「うん？」

「屋上への扉なんですけど、マンションの住人に伺ったら、普段から錠

前はされていなかったそうです」

「なに？　ということとは、犯人がかけたのか？」

「そういうことになるでしょうか」

　聡美が二人の話を割って入る。

「犯人ですけど、山崎さんじゃないでしょうか」

「どういうことだね、聡美くん？」

「遺体の所持品の中にコンタクトレンズがあったそうです。山崎さんはコンタクトを無くされています。彼の持ち物だったのではないのでしょうか」

「高木、大至急山崎を連れ戻せ！」

「はいー！」

　高木が駆けていく。そして……。

「なんだよ、疑いは晴れたんじゃないのか？」

と、山崎。

「遺体のポケットからコンタクトレンズが発見されました」

「それが俺のだっていう証拠は？」

「指紋が出たそうです。あなたの指紋が出れば、れっきとした証拠になります」

「出ないと思うけどね。俺は屋上には上がってないんだから」

　鑑識が報告する、

「警部、遺体から発見されたコンタクトですが、被害者のものだということが判明しました」

「なに!?!」

　感嘆符を浮かべる目暮。

「そらみろ。俺のじゃなかっただろ？」

「疑って申し訳ありません」

　そこへ聡美が割って入る。

「山崎さん、逃がしはしませんよ」

「え？」

「犯人はあなたです」

「ちよつ、俺じゃねえって」

「被害者を落としたのは、です。あなたが行ったのは、殺人事件への偽装工作です」

「どういうことだ？」

「被害者……いえ、檜佐木さんは自殺だったんじゃないやありませんか？」

「なに？」

「ですが、自殺だと保険金が下りない。そこで山崎さん、あなたは殺人事件に偽装したんです。檜佐木さんのご家族に保険金を受け取らせるために」

目暮は問う。

「実はさつき、遺体を確認したときに見てしまったんですよ。檜佐木さんの自殺の手順が書かれたメモ帳を」

「それならチラッとだけど、ボクも見たよ」

と、世良。

「なんだと？」

「これがそのメモ帳です」

聡美は目暮にメモ帳を渡した。

「君、遺留品を勝手に抜いたのかね？ ダメじゃないか」

まあまあ、と世良が宥める。

「そのメモ帳によると、保険金の受取人は山崎さん、あなたになっています。ということつまり、あなたは檜佐木さんと親しいものとみられる」

「……………」

「では、なぜ檜佐木さんは自殺をしなくてはならなかったか。それは、あなたを助けるためです」

「俺を？」

「はい。先ほど、マネージャールームで日誌を見つけました。あなたが詐欺に遭い、貯金していたお金を全て詐取されたことが書かれています」

「お、俺が詐欺？ 俺はそんなのに遭ってないぞ？」

「いえ、遭ってるんですよ。結婚詐欺に」

そうですね、と聡美は目撃者の女性に伺う。

「え？」

落下してきた檜佐木を目撃した女性が疑問符を浮かべる。

「日誌の他にもありましたよ。マネージャールームにあなたの写真が。それだけでなく、私立探偵の調査報告書もありました。四方田^{よもた}真理子^{まりこ}さん、あなたが結婚詐欺師であることは調べがついています！

認めたらどうですか!？」

「ど、どういうことよ?」

「ちよつと待って。この女性が四方田さん?」

「ええ」

疑問符を浮かべる山崎。

「山崎さんと四方田さんの関係ですが、ネット上でのご関係で、お互いの顔も知らなかったんじゃないんですか?」

「ああ、そうだ」

と、山崎。

四方田は無言になる。

「四方田さん、あなたはネット上で山崎さんに近づき、結婚を申し込み、金品を要求した」

聡美はそう言って、山崎を見る。

「山崎さん、四方田さんに金品を要求されましたよね?」

「ええ。だけど、あれは四方田さんが俺と結婚するために必要なお金だと」

「いいえ。四方田さんはあなたを騙していたんです。そのことを檜佐木さんから聞かされたあなたは、檜佐木さんの申し出に乗った」

「申し出?」

「檜佐木さんはガンを患っていました。部屋に薬がありましたよ。余命いくばくもない檜佐木さんは、自らの命を絶とうとしていました。相談を受けたあなたは、四方田さんを罠にはめることにしました。ちよつと四方田さんがこのマンションの住人だったので、落下を目撃させ、後に四方田さんの部屋に殺人の証拠となるようなものを、偽装するつもりだったんでしよう?」 山崎……いや、檜佐木 昭雄さん
「ちよつと待ってくれ。俺が檜佐木?」

「ええ。日誌にありましたよ、息子だと」

「な……！」

「山崎さん、あなたは檜佐木さんと母親が離婚し、母親の姓になり、母親の元で育ったのでしよう？」

「……そうだよ。俺は檜佐木だった」

山崎は膝をついた。

「親父に全て聞かされ、俺は四方田を殺人犯に仕立てようと思ったんだ。親父のコンタクトも、四方田の家にくっそり置いてくる予定だった。けどなんでだろうな。受け取ったはずの片方だけのコンタクトが、なぜか見つからず、もしかしたらしまおうとしたときに屋上から落としたかと思って、探して回ってたけど、結局見つからなくて」

「四方田さん？」

聡美が四方田を見る。

「何よ？」

目暮が四方田に近づいた。

「四方田さん、結婚詐欺について話がしたいので、ご同行願えますかな？」

それから、と目暮は山崎に言う。「あなたにも現場偽装の件でお話がありますので」

四方田と山崎はパトカーに乗り、警視庁まで運ばれていった。

37. 動き出した物語

聡美は黒羽家にいた。

「なんだよ、用事って?」

快斗が聡美に訊く。

「変装用のマスクが欲しいの」

「誰に変装するんだ?」

「この人」

聡美は快斗に男の写真を見せた。

「こいつは?」

「エルキュール・ポワロ役な俳優よ」

「なんでまた?」

「知らなくていい。あなたは私に協力するだけでいいわ」

「へいへい」

快斗が変装マスクを用意した。

「ありがとう」

聡美は快斗からマスクを受け取った。

「それじゃ」

聡美は黒羽の家を出た。

「さて」

聡美はバイクを駆り、イギリス料理店に行き、マスクを被って入店する。

聡美は面会相手であるジンとウオツカに接触した。

「お前がクリストファー・チャールズか」

「私を組織の仲間にして欲しい」

「我々のことをどこで知った?」

「その調査力は企業秘密だ」

「フツ。我々に近づけるんだ。相当の手練れだろうからな。諜報員にしてやってもいいが。銃の撃ち方は大丈夫か?」

「うん、まあ」

「貴様の目的は何だ?」

ジンが訊く。

「金」

「得意分野はなんだ？」

「プログラミングだ」

「いいだろう。プログラマーになれ」

「兄貴、いいんですかい？」

「使えれば使う。ダメなら消えてもらうまでだ」

ジンはそう言うと、今度は聡美に向かって開口する。

「クリストファー、今後はコードネームで呼ぶことにする。そうだな

……」

ジンは考え込む。

「……サワーだ」

センスねえな。

「私はなにを？」

「国が管理する個人情報操作できるシステムを開発してほしい」

「ハッカーになれ、と？」

「できるか？ できなければ……」

ジンが懐からピストルのグリップを出す。

（銃刀法じゃん）

「任せてくれ。開発しよう」

取引は成立した。

「じゃ」

聡美は席を立つ。

（組織はデータ改竄システムなんか作って何をしようとしてるのかしら？）

「待て、クリストファー」

ジンが紙袋を渡す。

「お前のだ。持っとけ」

中を見ると本物の拳銃が入っている。

（後で警察に渡しておこう）

聡美は紙袋を手に店を出る。

「さて」

マスクを外し、バイクを警視庁まで駆る。

「すみません」

受付。聡美は職員に訊ねる。

「組対にこれを見つけたから持ってきたって渡してほしいんですが」

「確認させてもらっていいですか？」

「ええ」

職員は中を確認して驚いた。

「え!?! 本物、ですか?」

「ちゃんと見たわけではないけど、だと思えますよ」

「わかりました」

職員は内戦で組織犯罪対策課の刑事を呼んだ。

「拳銃拾ったのは君?」

「はい」

「これか?」

刑事が拳銃を確認する。

「M85か」

「麻取の拳銃?」

「確かにそうだが……麻取の落とし物か? まあ、なんにせよ、届けてく

れてありがとう。調べとくよ」

刑事はそう言うと、聡美の連絡先を聞いて去っていった。

聡美は警視庁を出ると、バイクに跨る。

(さて、どうしたものか)

聡美は思考を巡らせながらバイクを駆る。

気がつくと、家に着いていた。

敷地に内にバイクを止め、家に入る。

「聡美さん、お帰りなさい」

「昴さん、ただいま。組織の情報ありがとうございます」

「お願いだから、無茶だけはするなよ」

「うん。わかってる」

聡美は自室へと移動する。

携帯が鳴った。

「もしもし?」

応答する聡美。

「警視庁組織犯罪対策課の本田と申しますが、工藤さんの携帯ですか?」

「そうです」

「先ほど受け取った拳銃の件なんですが、各道府県警察に協力してもらって麻取を調べても落とし主が判明しなかったんですよ。それです。詳しく話を聞きたいので、任意で聴取できませんか?」

「そしたら、公安通してもらっていいですか?」

「公安?」

「実は公安警察が関わってる事件の関係なので」

「どういうことですか?」

「公安に止められてて詳しいことは言えないです」

「わかりました。では公安に確認してみますので、どのような事件か差し支えないところだけ教えてもらえますか?」

「とある犯罪組織が壮大なスケールの事件を起こそうとしてるみたいなんですよ」

「なるほど。それで?」

「それで、公安とFBI連邦捜査局が動いてるんですよ。詳しい話が聞きたければ、毛利探偵事務所とこのポアロで安室さんって人に訊けばいいですよ。訊くときは、古谷さんって言ってね」

「古谷? 古谷って零のことですか? 実は私、学校の同期なんですよね」

「そうなんです」

「零とは今もたまに会ってるから聞いてみるよ。しかし、あいつが公安になってたとは。それじゃ」

電話が切れる。

「聡美さん、お昼ご飯食べますか?」

ドアが開け放たれ、昴が訊く。

「昴さん、ドアはロックしてから開けてね。お昼は食べる」

「それじゃ支度しますね」
昂はキッチンへ向かっていった。

38. ウオツカの最期

朝。

聡美の携帯がけたたましく鳴る。

「はい？」

聡美は応答した。

「本田です。拳銃のルート辿ったんですが、アメリカで購入されてることがわかりました」

「そうですか。誰が買ったかわかります？」

「えっと……魚塚 うおつか 三郎 さぶろう っていう方ですね。ですが、この魚塚さん、アメリカに永住権ありまして、出国されていないみたいです。出国されていないわけですから、当然、日本に拳銃は持ち込めませんよ」

「魚塚さん、ですか……。現住所わかります？」

「アメリカ合衆国テキサス州……になってますね」

「ありがとうございます」

それを聞いた聡美は電話をしまい、国際免許を取得し、バイクごと渡米した。

アメリカに辿り着いた聡美は、魚塚の家へバイクを駆る。

魚塚の家に着き、インターホンを押す、が、しかし、誰も出てこない。

ドアを開けようと、ドアノブに手をかけた。

すんなりと開く扉。

聡美は家の中に入る。

一通り中を見ていると、ウオツカが写った写真を見つけた。

(……?)

玄関から物音。

(誰か戻ってきた?)

聡美はクローゼットに隠れた。

サングラスをかけたウオツカが部屋に入ってくる。

(やばいやばいやばいやばい、見つかったら何されっかわかったもんじゃない)

ウオツカはサングラスを外して机に置き、クローゼットの前までやってくる。

「あー！」

ウオツカは机のサングラスを取る。

「兄貴のところへ携帯置いてきてしまった」

ウオツカが部屋を出て行く。

聡美はクローゼットを出て、魚塚の家を後にした。

魚塚の家から持ち帰ったものは、魚塚名義の拳銃の領収書、他に大量にあつた偽造パスポートの一部。

聡美は宿泊先のホテルで考えを巡らせた。

魚塚の家にあつたウオツカの写真。このことから、ウオツカの名前は魚塚であることが窺える。そして、拳銃の明細書と偽造されたパスポート。恐らく、ウオツカは拳銃を買い、その拳銃をX線を遮断するケースに詰め、偽造パスポートで日本に入国し、拳銃を持ち込んだのだろう。それが、聡美の手に渡り、桜田門警視庁に届けられたのだ。

聡美は一晩泊まって疲れを癒し、日本に帰国した。

帰国後、聡美は警視庁に立ち寄った。

組織犯罪対策課の本田に会う。

「工藤さん、何かご用ですか？」

聡美は魚塚がウオツカのコードネームで、組織の幹部として活動していること。偽造パスポートで不法入国していること。拳銃を密輸したことを説明した。

「魚塚が日本に来てる？ 偽造パスポートで？」

「はい」

「これが偽造パスポートです」

聡美はウオツカのパスポートを提出した。

「これは……アメリカのものだな……。しかし、これが偽造なら精巧な技術だぞ」

「すぐに入国管理局に確認を」

「ああ、そうだな」

本田は入管に照会をかけた。

入管からすぐに回答が来る。

ウオツカの写真で入国の記録が残っていたようだ。

聡美が船で帰国する直前、国際線の航空機で入国していた。もちろん、名義は魚塚ではない。

「とりあえず、魚塚を確保しましょう。そうすれば組織全体を根絶やしにすることもできるかもしれません」

「ああ、そうだな」

本田は部署に戻り、大勢の捜査員を動員した。

警察の全力な捜査で、ウオツカの居場所を特定し、確保に成功した。ウオツカは警視庁に連行され、連日連夜の事情聴取の末、検察に送検された。

聡美は確保時のウオツカの所持品を警察から預かり、ウオツカに変装してジンと接触した。

「ジンの兄貴」

「なんだ？」

「ジンの兄貴、名前なんでやしたつけ？」

「そう言えば教えてなかったな。黒澤くろさわ 陣じんだ」
なるほど。

「しかし、なぜそんなことを訊く？」

「相棒のことはよく知っておこうと思いやして」
「相棒か」

ジンは照れ臭そうに笑みを浮かべた。

39. 爆発寿司

聡美は高校に登校した。

校長宛に休学届けを出す。

「休学？」

「はい、ちよつと、家庭の事情で」

「そうか……。わかった。受け取ろう」

休学が認められた聡美は、世良の元へ向かった。

「世良さん、ちよつと」

「どうしたんだ？」

「君のお母さんのことなんだけど」

「ママがどうかしたのか？」

「とある組織のリストに、君のお母さんの名前があつたわ」

「……」

「そのリストには行方不明って書いてあつて……。君のお母さんは無事だよな？」

「ああ、生きてるさ。でも、それがどうかしたのか？」

「単調直入に聞くよ。お母さん、小さくなってるんじゃない？ 薬を

飲んだか、飲まされてかして」

「よくわかつたな」

「うん、お兄ちゃんも小さいから」

「ああ、君のお兄さん、新一くんだったね。でも、蘭くんの話から察す

ると、新一くとコナンくんは全くの別人って感じなんだよね」

「それ、実はトリックなんだ。お兄ちゃんは元の姿の時、灰原がコナン

に変装して、阿笠博士のマスク型変声器で喋ってたんだ」

「なるほど。そうだったのか。それで、ママを戻す薬ってのは、その灰原って人が持つてるのか？」

「完全には戻せないよ。一時的であつて、時間が経つとまた小さくなってしまう」

「そうか……」

「私はこれから組織に潜入し、内側から奴らの企み暴いて潰してみよ

うと思う」

「そんな、危ないよ」

「もちろん、一人ではないよ。安室さんもついてるし。それに、赤井さんだって」

「秀兄が？」

「うん。沖矢 昴って名前で私の家にいるよ」

「そうなんだ。うん？ ちよつと待って？」

「うん？」

「君も一回、小さくなっただよな？」

「うん」

「なんで小さくならないんだ？」

「完全な解毒剤は偶発的にできたものだったらしいんだ。再現が難しいって言ってたよ」

「そっか。……秀兄に会いたいんだけど」

「全て終わってからにして。今は極力誰も巻き込まないよにしたいから」

「ママが巻き込まれてる」

「あ、いや……」

そこへ蘭がやってくる。

「二人とも、なんの話をしてるの？」

「君には関係ないよ」

「そんな。教えてくれたっていいじゃない」

「いや、聞かない方がいいわね」

「そうなの？」

「うん。事件の話だから、聞いたってつまんないよ」

「そっか。じゃあいいや」

キンコンカンコン、チャイムが鳴る。

「あ、次グラママーのテストじゃん！」

三人は教室へ急いだ。

……。

……………。

.....。

放課後。

聡美と世良が帰路に就いている。

「聡美くん、回転寿司にでも行かないか？」

「そうだね。今日は半日だったし、昼食まだだったから行ってもいいかな」

「よし、行こう」

二人は飲食店街の回転寿司に移動した。

店に入り、案内された席に着く。

客はあまり入っていなかった。それでも、隣にカップルと後ろに三大家族。何人かは確認できた。

「さて、マグロでも……」

聡美が流れてきたマグロに手を伸ばそうとした刹那、厨房で爆発が起こった。

「……!?!」

「爆発か？」

辺りがパニック状態になる。

40. ストーカー

回転寿司店の厨房が爆発した。

世良の機転ですぐに警察がやってきた。

「聡美くんに世良くんか」

と、警視庁捜査一課強行犯係の目暮警部。

その横には高木刑事と佐藤刑事がいる。

「毛利くんという君といい、なんでこうも毎回事件に巻き込まれるんだね？」

「はは……」

「で？ 爆発は厨房からか？」

目暮や聡美たちは厨房に入る。

厨房は完全に吹き飛んでおり、天井や壁が倒壊していた。幸い、ホールは無事だった。

爆発に巻き込まれたのは、厨房で寿司を握っていた御影^{みかげ} 健一^{けんいち}という若い板前職人。届いた荷物を開けた瞬間に爆発し、両手が吹き飛び、なくなった。命に別状はなく、近くの米花総合病院で治療中だ。

「刑事さん！」

と、御影の同僚のホール担当のスタッフが声をかける。

「なんですか？」

「御影は、なんでこんなことに？」

「それはわかりません。ところで、あなたは？」

「あ……僕は工藤^{くどう} 信一^{のぶかず}です」

（工藤？ 私と同じ……）

聡美は内心想ったようだ。

「工藤さん、お気持ち察します。御影さんが恨まれるようなそういったことはありませんか？」

「うーん……、恨みね……。人に好かれるタイプでしたから、そのようなことはないと思います」

「そうですか……」

「あ！」

「何かあるんですか？」

「実は御影、ストーカーに悩まされてたみたいで。御影、女の子にモテる、いわゆるイケメンだから、そういうの多くて」

「ストーカー、ですか……。警察には相談は？」

「警察っていうか、私立探偵に犯人を調べてもらったみたいですよ」

「ほう。その探偵の名前とかは聞いてますかね？」

「えっと、確か、こうり もごろう……」

「毛利 小五郎？」

「そうそう、それでした！」

「よりによって毛利くんが関係してくるとは」

「聡美が口を開く。」

「警部、これに爆弾が入ってたんじゃないですか？」

「現場を調査して見つけた金属の箱を示した。」

「煤はついてますが、これだけ歪んではいますが壊れていません」

「鑑識が箱を受け取った。」

「工藤さん、店が加入している警備会社は？」

「えっと……確か、OLSオルソックOKです。店長が全部やってるんで」

「店長さんは今日は？」

「今日はお休みですね」

「そうですか」

「高木——と、目暮が高木を見る。「店長さんに事件を伝えてくれ」

「わかりました」

「店長を調べ、事件を報せに行く高木刑事。」

「聡美くん、犯人はわからないのかね？」

「いくらなんでも手がかりが少なすぎます。そりやまあ、箱から指紋出ればあれでしょうけど。とりあえずは蘭のお父さんに話聞いてみませんか？」

「そうだな」

「佐藤くん——と、目暮。「私は毛利くんのところへ行く。ここは君に任せる」

「わかりました」

目暮と聡美、世良は毛利探偵事務所へ。

「毛利くん、邪魔するぞ」

「警部どの、どうされました？」

「御影 健一、知ってるな？」

「いや、なんのことでしょう？」

「とぼけるな。御影の同僚から聞いたぞ」

「いや、私は本当になにも」

「守秘義務で依頼人を守りたい気持ちはわかる。だがな、その依頼人が事件に巻き込まれてな」

「事件？ またスト……」

「爆破事件だ」

「……爆破事件!?!」

「ああ。寿司屋の厨房で荷物を開けたところ、爆発して両手を吹っ飛ばされてな」

「そ、それじゃ、御影さんはもう寿司を？」

「そうなるな。運良く移植できればまた握れるかもしれないがな」

「そんな、御影さんが。犯人はわかってるんですか？」

「それを知るために来ておるんだろうが。依頼の調査でわかったことを教えてくれ」

「朝倉 桃子あさくら ももこという女がストーカーでした。英理と合同で本人に警告は出しました」

「その朝倉とはどういう？」

「ゴリラーマンですよ」

「ゴリラーマン？」

「漫画のキャラクターでして、それに似てました」

（それ随分醜い女性ね）

「その女の連絡先を教えてください」

小五郎は調査資料を探す。

「これです」

目暮が住所をメモる。

「それじゃあな。あ、今回は聡美くんがいるんでな。お前は来なくて

いいぞ」

「よし」
目暮、聡美、世良は事務所を出た。

車で朝倉の家へ向かった一行。

ピンポン、インターホンを押す。

4 1. 第二の爆破

中からゴリラーマンみたいな女が出てくる。

「誰？」

目暮が警察手帳を見せた。

「警視庁捜査一課の目暮だ。御影の件で話が聞きたい」

「御影？ 誰ですか？ そんな男、知りませんよ」

「ほう。なぜ男だと？ 私は御影と言っただけですよ？」

「いや、それは……」

「あなたが御影 健一に思いを馳せていたというのは明白です。ストーカーをしていたというのも、毛利探偵から聞いている」

目暮の言葉の後、聡美が言った。

「朝倉さん、あなたが御影さんに危害を加えたのでは？」

「私、何もやってませんよ。ストーカー以外は。何かあったんですか？」

「寿司屋が爆発してな」

「ば、爆発!？」

「どうやら金属の箱にセットされて送られてきたらしいことがわかってる」

「そんな恐ろしいこと……」

「署まで来てもらえますか？」

朝倉は三人を突き飛ばし、逃走した。

「待て！」

三人は追う。

朝倉は二・三百メートル先ですっ転び、その隙に取り押さえられ、目暮に対する公務執行妨害でしょっぴかれた。

「御影くんのは確かには好きでした。告白してフラれたけど、それでも諦められず、アタックを続けてました」

「それがエスカレートしてストーカー行為に発展した、と？」

「はい。すみませんでした」

「ふーん……」

目暮は考え込んだ。

隣の部屋からガラス越しに聡美と世良が見ている。

「朝倉が犯人なのかな？」

「え？」

「私にはクロだと思えないんだよね」

「第三者が犯人だというのか？　でも、朝倉は実際、犯罪に走ってるわけだし」

「いや、ストーカーだからといって爆発なんて過激なこととはしないと思う。それに、御影さんを狙うんだったら、別の方法があったはずよ。爆弾犯には別の目的があったんじゃない？」

「そうか。じゃあ、寿司店そのものを破壊するつもりだったとか？」

その時、取調室に捜査員が駆け込んできて、目暮に耳打ちする。

「何!?　杯戸町の寿司屋で爆発!?　被害状況は？」

「かなり深刻で。全体吹っ飛んで、中にいた客も重傷です。中には亡くなった方も」

「わしは現場に行く。朝倉を拘留しといてくれ。公妨だ」

「わかりました」

目暮は取調室を出て、聡美と世良に合流する。

「行くこう」

目暮の運転で第二の現場へ。

爆発したのは、杯戸町のチェーン店の回転寿司店だ。

やはり、厨房で爆発し、完全に倒壊し、今度は客からも死傷者が出ている。

「聡美くん、世良くん、手分けして調べるぞ。何か手がかりが掴めるかもしれない」

三人は手分けして鑑識に混じって現場を搜索した。

「目暮警部！」

と、世良。

「さっきの箱のような金属片を見つけたんだが」

「確かにさっきの箱と同じ柄だな。しかし、威力がでかすぎる」「ん？」

聡美は現場の前でそわそわしている男性に気づく。

「すみません、どうかされました？」

訊ねる。

「え？ いや……」

「お名前、聞いても？」

「は、犯沢はんざわ……」

「犯沢さん？」

「いや、何もしてないですからー！」

犯沢は逃げいていった。

(あれは関係ないね、たぶん)

4.2. 爆破事故

「ん？」

誰かの視線に気づき、振り返る聡美。

「誰だ!？」

視線の主は去っていった。

「聡美くん、進展があった!」

目暮が叫ぶ。

聡美は目暮に駆け寄る。

「御影さんなんだが、危険物取り扱いの資格を持っていたことがわかってな。昔は映像会社で特撮ドラマの撮影に携わっていたらしい。事故だとはいえ、その時に仲間が爆発に巻き込まれて亡くなっていたそうだ」

(なんだと?)

「それでな、爆発スイッチをうっかり触って押してしまった沖山おきやま恵子けいこも辞めて、二軒目の現場のここで働いていたことがわかった」

「なんですって!？」

驚く聡美。

「それじゃ、その仲間の死を恨んでる誰かが爆弾を?」

と、世良が言う。

「いずれにせよ、爆発はこれで最後だろう」

そう断言する目暮。

「とりあえず、その爆発事故で亡くなったスタッフについてボクは知りたい」

「私も知りたいです」

二人の言葉に、目暮は申し訳なきような顔をして言った。

「その映像会社は潰れててな。残念ながら、当時のスタッフを捜すのは骨が折れるよ」

「当時の関係者を御影さんから聞きましょう」

「そうだな」

三人は東都総合病院に足を運んだ。

病棟の個室に、御影はいた。

「御影さん、警察です」

目暮が御影に警察手帳を見せた。

「あなた、寿司を握る前は映像会社で働いてましたよね？」

「はい。」

「その時に起きた爆発事故についてお話を聞かせてくれませんか？」

「いや、今はなにも……」

「しかし、爆破事件の犯人を捕まえないとまた襲われる可能性がだね」

「刑事さん、あなたは当時の関係者が犯人だと？」

「その可能性は十分にあります」

「輝ひかりですよ」

「え？」

「天沢あまさわ 輝ひかりが爆発あまさわに巻き込まれて亡くなったんです」

「天沢？」

目暮は埼玉県警に天沢という警察官がいることを思い出した。

その天沢の妹が、輝という名で、他界しているらしい。

「目暮警部、天沢 輝あまさわって確か、当時ニュースになったけど、兄が記者会見してませんでした？」

「その兄、私の知り合いの警察官かもしれん」

「警察官？」

「埼玉県警のな」

「それじゃ、その警官が？」

「いや、まだ決まったわけじゃないよ」

「警部、容疑を固めるためにも、埼玉県警へ飛びましょう」

「そうだな」

三人は埼玉県警本部に向かった。

「警視庁の刑事さんが何の用で？」

「天沢について調べてる。知ってることを教えてくれ。東京で起きた爆破事件の重要参考人なんだ」

「天沢？」

「輝の兄だ」

「ああ、あの映像会社の事故の?」

「ああ」

「天沢は今、爆発物処理班に配属されておるよ。まさか、爆弾の知識を取り入れて?」

「処理班だな? よし」

目暮は二人を連れて爆発物処理班の部屋へ向かった。

「なんですか?」

目暮は警察手帳を見せる。

「警視庁?」

「天沢はどこだ?」

「今週は有給で休みです」

「どこにいるか聞いてるか?」

「さあ、それは」

「連絡先教えてくれないか? 重要参考人なんだ」

「なんの?」

「東京で二件起こった爆破事件のな」

「え? まさか、天沢が?」

これが携帯番号ですけど——と、職員が番号を見せる。

「どうもありがとう」

「あと、これも」

目暮は天沢の住所が書かれたメモを受け取った。

「行くぞ」

三人は天沢の家に向かった。

ピンポン、とチャイムを鳴らす。

男性が出てきた。

「あれ! 目暮警部じゃないですか」

「天沢、今日なにしてた?」

「なになって、家にいましたか?」

「実はな、お前の妹が務めていた映像会社の関係者の店で事件が起きてな」

「事件? 相当の威力だったんでしょうか?」

「ああ、両手が吹っ飛ぶくらいのな。二件目は客が死んでおる」
「そうなんですネ」

聡美は口を開いた。

「今の、秘密の暴露ですよネ？」

「え？」

「目暮警部は爆破事件だなんて一言も言ってます。なんで、爆破だとわかったんですか？」

「ああ、それはニュースを見て……」

「まだニュースにはなってますよ」

「……………」

「一件目、二件目の料理屋を爆破したのは、あなたですよネ？」

「俺は寿司屋なんて爆破してねえ！」

聡美は勝ち誇った笑みを浮かべた。

「なんだよ？」

「寿司屋、と言いましたね？」

「ああ、それがどうした？」

「私は料理屋と言っただけで、寿司屋だなんて、一言も言ってますよ」

「……………!？」

焦る天沢。

「天沢、署まで来い」

天沢を署まで連行する目暮。

その後、天沢は取調室で全面自供した。

43. 米花中央病院殺人事件！

帝丹高校。

体育の授業。

聡美ら生徒たちはマラソンをしている。

チャイムが鳴り、授業が終わった。

「はあ……はあ……」

息切れ中の聡美。

「もうラメ……」

「聡美、あんた飛ばしすぎよ」

と、親友の鈴木 園子が言う。

「だって……」

と、聡美は世良 真純を見る。

「ニヒヒ」

世良がニヤニヤと笑ってる。

「ライバル心燃やしたいのはわかるけど、そんなことしてるといまに大変な目に遭うよ？」

というのは毛利 蘭だ。

「そうね」

聡美はそう答えた。

「あ、そうだ！」

蘭が思い出したように言う。

「今晚、部活の練習で遅くなるから、コナンくんお願い、聡美」

「小五郎さんは？」

「お父さん、仕事で遅いのよ」

「わかった」

四人は話しながら校舎へ入っていく。

放課後、聡美は一人帰路に就いている。

「よう」

校門の前で、コナンが扉に寄りかかっている。

「蘭にお兄ちゃんの子守頼まれたんだけど」

「いらねえよ」

「だよね。でも形だけ」

「そうだな」

二人は歩き出す。

「ねえ、お兄ちゃん」

「あん？」

「寄り道してもいいかな？」

「いいけど、どこ行くんだ？」

「ついてくればわかる」

聡美はコナンを連れて古いアパートの一室の前にやってきた。

「ここって、加村の家じゃ？」

「そうだよ」

「そういえば、おめえ小学校で加村とクラスメイトだったな。でもな
んで？」

「義男くんは私のこと知ってるわ。戻るとこ見られちゃって」

「なに？ 余計なことは言っていないよな？」

「お兄ちゃんのこと知ってるよ」

「なんだって？」

ガチャ。

扉が開き、義男が出てくる。

「あ、聡美お姉さん！……と、高校生探偵の新一お兄さん？」

(マジかよ)

と、コナンは思った。

「それで、お兄さんの行方はまだ？」

「うん」

コナンが話に割って入る。

「お兄さんに何があったんだ？」

義男は無言で封筒を見せた。

果たし状と書かれている。

「これが兄ちゃんの机の上にあったんだ」

「ちよつといいい?」

聡美は封筒から手紙を取り出した。

そこには、義男の兄、康之やすゆきを呼び出すようなことが書かれている。
「手紙の相手は?」

「わからないよ。でも、兄ちゃんはきつとそこに行ったんだ」

「じゃ、三人で行こっか」

「うん」

三人は手紙に書かれた待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所のある河川敷。

康之がボロボロの姿で倒れていた。

「兄ちゃん!」

義男が駆け寄る。

意識がない。

聡美は救急車を呼んだ。

ピーポーピーポー、と康之と聡美たち三人を乗せた救急車は米花中央病院へとやってきた。

康之は怪我の具合がひどく、治療が終わってもなかなか目を覚まさない。

「兄ちゃん……」

泣きそうになる義男。

そこへ米花中央署の刑事がやってくる。

「通報をしたのは君かい?」

「はい」

「名前は?」

「工藤 聡美です」

「く、工藤 聡美!?!」

驚き戸惑う刑事。

「工藤 聡美って帝丹高校の女子高生探偵!?!」

「そうですけど、それが?」

「と言うことは、加村 康之は何らかの事件の被害者なのか?」

「いや、ただの喧嘩でしょう」

「なんだ。工藤さんの推理が見れると期待しちゃったよ」

刑事はベッドで静かに眠る康之を見た。

「加村の家にこれがあったそうよ」

聡美は先ほどの封筒を刑事に渡した。

「果たし状……決闘罪が成立しそうだな」

「決闘罪ってなに？」

義男が訊く。

「正式には決闘罪に関する件と言って、決闘および決闘への関与を禁止する日本の法律なんだ」

と、コナンが説明する。

「決闘罪は全6条からなり、決闘を申し込んだ人、申し込まれた人、決闘立会人、証人、付添人、決闘場所提供者など決闘に関わった者に適用されるんだ。もつとも、構成要件及び法定刑は主体ごとに定めるとしているよ」

と、付け加えるコナン。

「僕、よく知ってるね？」

と、刑事がコナンを見下ろす。

「って、テレビでやってたよ！」

(なんちゅう番組だ)

と、突っ込む聡美。

その時、どこからか、悲鳴が聞こえてきた。

「きゃああああー！」

聡美とコナンは駆け出した。

悲鳴の元は女子トイレである。

「どうしたんですか!？」

個室の前で腰を抜かしている女性。

ワナワナと震える手で指差した先には、血だらけになった女性の遺体。

「……!？」

「一体なんの騒ぎだい?」

駆けつけた刑事がトイレの入り口の前で訊ねる。

聡美は外に出て、事件が起こった、と伝えた。

44. 復讐

米花中央署の捜査員が米花中央病院の女子トイレを調べている。一通り調べ終わったところで、聡美が中に入る。

個室は血の海。

被害者の名は、伊丹 貴美子。

死因は鋭利な刃物で滅多刺しにされたことによるショック死。

遺体には争った形跡がなく、病院の医師によると、事前にクロロフォルムで眠らされてから、殺されたのではないかとのことだった。

また、死亡推定時刻は悲鳴の聞こえたのとほぼ同時刻であると判明している。

「吉崎警部！」

刑事がやってきて報告する。

「死亡推定時刻に病院を出入りした人物はいませんでした」

「そうか」

「吉崎警部」

と、聡美。

「なにかね？」

「あれは？」

女子トイレの外についている防犯カメラを指差す聡美。

「あれに誰か映ってないですかね」

カメラは女子トイレの入り口を映していた。

「なんで女子トイレを映しているんだろうな」

吉崎警部は疑問符を浮かべた。

後で病院関係者に聞いてみると、以前、男性が侵入し、隠しカメラを使って女性が用を足すところを盗撮する騒ぎがあり、設置したとのことだ。

盗撮犯は病院の職員で、事件が発覚してからは依願退職という形で解雇されていた。その犯人を内部調査で突き止めたのが、どうやら今回の被害者であるようだ。

警察は盗撮犯を調べた。

男は病院を解雇されたあと、いくつか再就職先を当たったが、退職の理由によりどこも受け入れてもらえず、自殺をしていることがわかった。

一方、防犯カメラの映像には、第一発見者の女性が入り、騒ぎを聞きつけてみんながやってくるのが映っていた。

第一発見者の他、被害者以外は映っていない。

「状況的にはあの人だな」

と、コナン。

聡美は遺体が発見された個室に入る。

（私の推理通りなら、ここに……）

聡美は天井の蓋を開けた。

（やっぱりね）

聡美は天井裏から血だらけのレインコートを取り出した。

「なんかあったか?」

「うん、こんなのが」

聡美はコナンにレインコートを示すと、それを警察に渡した。

「あ、警部さん」

「なんだね?」

「お願いがあるんですけど、天井裏を塞ぐ蓋の指紋を採取してもらえますか?」

「構わんが、どうして?」

「犯人の指紋が採取できるはずですよ」

その時、犯人は焦った。

何か、何か危機的状況を打開する策はないか、と。

聡美の指示で、鑑識が再度現場を調べる。

天井裏の蓋から聡美とそれ以外の人物の指紋が採取された。その中から、レインコートについている指紋が検出された。

聡美は第一発見者の女性に声をかけた。

「犯人は、あなたですね?」

「な、なに言ってるんですか?」

「あなたの指紋、採取させてもらえませんか?」

「そ、それは……」

女性は両手を後ろに回す。

「さつき刑事さんがクロロロなんとかって薬品を使ったって言ってたけど、その薬品の入手経路は？」

「あなた、看護師ですよね？」

「え？」

「佐伯……いえ、伊丹 佳代子さん」

驚き戸惑う女性、もとい佳代子。

「すみません、佳代子さん。先ほど刑事さんをお願いして、防犯カメラの映像を病院に確認してもらったんです。そしたら、あなたがこの病院の看護師だということがわかりましてね。あ、レインコート、あなたの指紋が検出されてるはずですよ？」

「くっ……！」

苦虫を噛み潰したような表情になる佳代子。

「連れて行け！」

吉崎警部の指示で警察官が佳代子を米花中央署に連行した。

その後、佳代子は殺人の罪を認め、事件の全容を語った。

45. ポアロ

米花中央病院。

康之の病室に、聡美はいた。

(よくよく見てみると康之くんイケメンね)

「う……」

呻いて目を覚ます康之。

「あ、気がついた」

康之が聡美を見る。

「誰だ、あんた？ てか、ここどこだよ？」

「私は工藤 聡美。そしてここは病院だよ」

「工藤？ ああ、あいつの妹か」

「決闘なんかしちやダメよ。決闘は犯罪なのよ？」

「知るか、そんなこと」

康之がベッドから降りようとして崩れる。

「無理しちやダメよ。今、看護師さん呼んできてあげる」

聡美が病室を出てナースステーションへ。

「看護師さん、加村くんが」

看護師が康之の元に急ぐ。

「加村くん、ベッドに戻りましょうね」

「俺はガキか。くそ」

康之はベッドに戻った。

そこへ、刑事が訪ねてくる。

「加村くん、気がついたんだね？」

「あんたは？」

「私はこういうものだよ」

刑事が懐から警察手帳を取り出して提示する。

「サツかよ。くそ」

「君には決闘のことで話を聞きたくてね」

「俺、逮捕されるのか？」

「状況次第だね」

聡美が病室に入ってくる。

「康之くん、私もう帰るね」

聡美はそう言って病室を出た。

「ん？」

入り口の脇に立つコナンに聡美は気づく。

「お兄ちゃん？ 何やってんの？」

「お前に用があつてな」

「私に？」

「お前、キッドに変装と声真似を教わったんだつたな」

「まさか？」

「頼む！ 俺に変装して蘭と会ってくれ！」

コナンが両手を合わせてお辞儀をする。

「いいけど、どうして？」

「蘭のやつ、俺を新一と疑い始めたんだ」

「しょうがないな。後で行くから帰ってて」

「頼んだぜ」

コナンは走り去っていく。

聡美も工藤邸に戻ると、大急ぎで新一に変装し、毛利探偵事務所に向かった。

ガチャ。

事務所の扉を開ける聡美。

「うん？ 依頼か？ ん!？」

小五郎が聡美を見て驚く。

「て、てめえは新一！」

「小五郎さん、蘭は？」

「蘭ならコナンと夕食の買い物に行ってるぞ。つてか、おめえ今まで何してたんだ!?! 蘭のやつすつごく心配してたぞー！」

「そうですか。じゃあ待たせてもらいます」

聡美が小一時間ほど待つと、蘭とコナンが食材を買って帰ってきた。

ぶんどりと食材が蘭の手から落ちる。

「し、新一？」

蘭はコナンと聡美を交互に見る。

「よう、久しぶりだな」

「新一、あなた今まで何してたのよ!？」

「言っただろ？ 厄介な事件抱えてるって」

「事件事件って、私のことはどうでもいいわけ？」

「どうでもって……」

「どうなのよ？ はっきりしなさいよね！ 全く！」

蘭は落とした食材を拾う。

「行こ、コナンくん」

蘭が半泣きしながらコナンと上の部屋へ向かっていく。

(とりあえず、これで疑いは消えたかな)

聡美は事務所を出る。

「どこ行くんだ？」

「まだ片付けてない事件があるので」

聡美はそう言っただけで階段を降りていく。

小五郎は窓越しに聡美を見る。

「厄介な事件ってなんだよ？」

と、その時、喫茶店のポア口にトラックが突っ込んだ。

ガシャーン！

窓ガラスが割れ、トラックの前部が潰れる。

「な、なんだあ!？」

コナンが驚いて外へ飛び出す。

聡美もトラックの方を振り向く。

46. ポア口に突っ込んだトラック

警察官が駆けつけ、捜査が始まる。

制服警官が現場に居合わせた白髪の男性に話を聞いている。

「すると、あなたはたまたま席を外していて、助かったんですか」
「ええ、ちょうどトイレにタバコを探しに行っていました」

男性が警官に名刺を渡す。

「それは命拾いをしましたね。ほお、黒沢企画の社長さんですか」
と、名刺を受け取った警官が言う。

「黒沢企画と言えば、ちょうどこの坂を上がったところの」

話の流れから察するに、白髪男性の知人が亡くなったようである。

「山沢さーん！」

「うん？」

制服警官が振り返る。

坂の上で別の制服警官が手を振っている。

「宅配便の運転手を見つけましたー！」

「よーし、今行くー！」

山沢が制服警官の元へ向かう。

そこで黒沢がにやりとほくそ笑むのを、聡美とコナンは見逃さな
かった。

「あなたはこんな坂の途中に車を止めて配達に行っただんですか？」

山沢の問いに運転手の小山田おやまだ 次郎じろうは答える。

「すいません。いつもは坂の上の平なところに止めるんですが、今日
はあの車が止まっていたので、仕方ないのでその前に止めてしまったん
です。でも！ ちゃんとサイドブレーキは引いておきましたし、念の
ためギアをバックに入れておきました！」

若い制服警官が山沢に言う。

「山沢さん、現場に到着して、すぐに運転席を見ましたが、そんな形跡
はありませんでした」

小山田はムツとした表情で反論した。

「そんなバカな！ もっとよく調べて下さい！ 僕は間違いなく、サ

イドブレーキを引いたんです！」

「嘘に決まってる！」

と、黒沢が口を挟む。

「元山くんは私の大切な右腕だったんだ。その元山くんを亡くしては、会社はもうおしまいだ」

後ずさる小山田。

「そんな！ 人が亡くなってるんですか!?!」

そこに、女性が現れる。

「社長!?!」

「天方くん!?!」

女性が黒沢に近づく。

「こんなところでなにしてるんですか!?! 今日中にお金を振り込まないと、材料の入荷を止められてしまいますよ!?!」

あまがた 天方 としこ 淑子。黒沢企画の社員だ。

「わかってる。しかし、今は、それどころじゃないんだ。元山くんが亡くなっただ。事故の巻き添えをくらって」

「え！ そんな!?!」

驚く天方。

黒沢が左手の人差し指を口にくわえる。

「……!?!」

「……!?!」

だが聡美とコナンはそれを見逃さない。

(ひよつとしたら!?)

聡美とコナンがポア口に飛び込む。

(ここだ!?)

聡美とコナンはトイレのドアを開け、中に入った。

二人は犯人がここから抜け出し、事件を起こしたと考えたのである。

聡美が窓の縁を見た。

「血痕?」

窓を開ける聡美。

「俺にも見せてくれ」

コナンは便器によじ登る。

「これ、外から手をかけた後だ」

聡美とコナンはウィンドウを突き破ったトラックを窓越しに見遣る。

(そうか。この窓から外に出て戻る時に血がついたのね)

聡美とコナンが窓から外に出る。

(そして出かけた先で左手に怪我をした)

聡美とコナンは坂を見上げて登り始めた。

「ん？」

聡美がバス停の時刻表に気づく。

「お兄ちゃん」

「ああ」

事故の起きた時間を思い出す聡美とコナン。

あれは15時10分ごろだった。

時刻表には15時7分の表記があった。

「そういえばここって、終点だよな？」

「うん」

「あ」

聡美とコナンはたった今発車したバスの後方に木片を見つけた。

そこへ別のバスがやってくる。

バスの後部にピアノ線がくっついていていた。

(これは!?)

「そうか。そういうことか」

「これは事故じゃない。殺人事件よ！」

「そして犯人は……」

聡美とコナンはある人物を見つめた。

「あの間に間違いはないわ」

その時、黒沢が警察官に言った。

「あのー、おまわりさん。急用があるので、ちょっと出かけたいのですが」

「それは困ります」

「取引先にお金を振り込まなくてはならないのです。30分、あ……いや、20分でいいんです。お願いします」

山沢が若い警官を見る。

「黒沢さんの事情聴取は？」

「一通り終わりましたが」

「では、よろしいでしょう」

「助かりました」

聡美とコナンは黒沢を見る。

（まずい！ このまま行かせたら、証拠を消されてしまうわ！）

「ちよつと待ってよ、黒沢のおじさん！」

「うん？」

立ち去ろうとした黒沢が振り返る。

「なんだい、坊や？」

「今、あなたに動かれると困るんですよ」

と、新一の声で言う聡美。

その場にいた全員が振り返る。

「なにを言ってるんだ？」

「これは殺人事件なんだ。そうだよ、新一兄ちゃん？」

驚き戸惑う関係者たち。

山沢がこちらを見て訊ねる。

「あなたは？」

「工藤 新一、探偵ですよ」

「ぶ、部外者は邪魔しないで下さい」

と、若い制服警官が言う。

山沢は、「まあ待て。とりあえず聞こうじゃないか」と、若い警官に言う。

「工藤くん、何か手がかりでもあるのかい？」

「手がかりどころか証拠もあるよね」

「そう……黒沢さん、あなたが犯人である証拠がな！」

驚き戸惑う黒沢。

「バカをいうな。これは誰が見ても、そのトラックの運転手の過失による暴走事故じゃないか」

「ち、違う！」

「お聞きしましょう、工藤くん」

「よろしい。では、トリックから話しましょう」

黒沢は「くだらん」と口にする。

「私は忙しいんだ。こんな戯言ざれごとに付き合ってる暇はない」

だが山沢が黒沢を呼び止める。

「まあ、そう言わずに、話を聞くだけですから」

続けて下さい、と聡美に言う山沢。

「黒沢さん、あなたは自分の車を宅配の車がいつも止まる坂の上に駐車させ、元山さんを誘って坂の下のポアロに入った」

「そして元山さんを坂が背になるよう窓側の席に座らせた。そうだよね？」

「違う！ 坂が見えない窓側に座らせたんじゃない！ 座った席がたまたま窓側だったんだ！」

「なるほど。その後、あなたは何らかの話の最中、あなたは席を外しました」

「トイレに行く振りをしたんだよね？」

「振りじゃない！ 本当にトイレに入ったんだよ！」

「いいえ。あなたはその時、トイレの窓から抜け出し、宅配のトラックのところに行きました」

「そして、予め用意しておいた木製のくさびをトラックの前輪の前に置いたんだ」

「ふん。馬鹿馬鹿しい。なんのためにそんなことをしなくてはいけないんだ」

「自分の犯行ではないと思わせるためのトリックですよ」

「おじさんはさ、そのくさびにはピアノ線を結んでおいて、前に止まっている時間待ちのバスの後部にそのピアノ線を結びつけ、宅配のトラックのギアをニュートラルにして、サイドブレーキを外して何食わぬ顔でポアロに戻ったんでしょ？」

「定刻になりバスが発車すれば、くさびが外れる。すると宅配のトラックは、勝手に坂を下り出すという寸法です。後はバスがポアロの前を通過するのを待って、避難すればいいだけ」

「トイレにタバコを探しに行く振りでもしてね」

「そしてこれがそのくさびですよ」

聡美は若い警官にくさびを渡す。

「ただの木片ですね」

「生木のくさびはバスに引きずられ、路上をバウンドする内に、砕けてしまう。その残骸がそれですよ」

「坂道で加速のついた車は、おじさんの計画通りポアロの窓を突き破り、店内に飛び込む」

その場にいた全員がその様子を思い浮かべる。

「元山さんは背後からトラックに直撃されて亡くなりました」

「と、トリックは……トリックはそうだとしよう。だが、私がやったという証拠はあるのか!？」

「証拠ならありますよ」

「おじさんの誤算は、バスにピアノ線を結びつけるとき、誤って指先に傷をつけてしまったことだよ」

「こ、これはトイレのノブに引っ掛けたんだ!」

「宅配のトラックの操作は片手でできるから、血痕は残りませんが、トイレの窓から進入したときは、窓に手をかけて血をつけてしまった」

「トイレの窓の内側に血痕が残ってたよ」

「血が滲んだのか、左手を舐めていたのを、僕たちは見てたんですよ」

「た、確かに指に怪我をしている! でも、それはさっき言ったように、トイレのノブに引っ掛けたんだ! そんなもの証拠とは言えないでしょ! ねえ、おまわりさん?」

「確かに……」

若い警官の言葉に、「お前は黙ってる!」と、山沢が怒鳴る。

「とにかく、私が犯人と言うなら、確固たる証拠を見せてほしいですな!」

「ねえねえ、これなーに？」

と、コナンが坂の上に止まっている車のドアを開けて何かをしている。

振り返った黒沢は焦っている。

「この中になんか変な模様の手袋があるよ」

山沢が血痕のついた手袋を確認する。

「これはどういうことですか、黒沢さん？」

「バスについたピアノ線を調べれば、おじさんの血痕がついていることがわかるんじゃない？」

「さて、トイレでついたはずのあなたの手の傷と、同じ位置に血のついた手袋があなたの車の中にあり、トイレの窓枠には外から手をかけたような血痕がある。更にバスに結び付けられたピアノ線には、あなたの血液が付着しているはずですよ！これをどう説明するんですか!？」

黒沢は観念した様子で話し出した。

「はい、私がやりました」

ほっとする宅配トラックの運転手。

「あいつが……あいつが今まで可愛がってやった恩も忘れ、会社を裏切って辞めると言い出したもので。あいつが辞めてしまったら、会社が潰れてしまうかもしれない。同じ潰れてしまうなら、あいつを事故死に見せかけて殺し、生命保険と損害賠償の金だけ手に入れようと思っただけです。正直、ポアロで打ち合わせするまで、迷っていました。しかし、大きな仕事まで退職金代わりに持っていくと言い出したもので、つい！」

黒沢が崩れ落ちる。

「申し訳ありませんでした」

47. 殺人犯は沖野ヨーコ？

聡美が帰路に就いている。

たまたま通りかかったマンションの前にパトカーが止まる。

パトカーから目暮が降りてきた。

「目暮警部、なにかあったんですか？」

「うん？」

目暮が聡美の方を見る。

「おお！ 聡美くんか！ ちょうどいい、君にも来てもらいたい」

聡美は目暮警部や他の警察官たちと一緒にマンションで5階に上がり、ある部屋の前でインターホンを押す。

扉が開き、沖野ヨーコが出てきた。

「ヨーコさん？」

「あ、聡美さん」

「何だね、二人とも知り合いかね？」

「ヨーコさん、小五郎さんのファンでたまに事務所に行くらしいですよ」

「そうかね。で、我々を呼んだ理由は？」

「仕事から帰ってきたら人が部屋で亡くなってたんです。私の部屋なのに、人が亡くなってること自体もおかしいのですが……」

「ちよつと失礼」

捜査員が中に入り、背中にナイフの刺さった遺体を確認する。

「沖野さん、被害者に見覚えは？」

目暮がヨーコに訊ねる。

聡美は目暮がヨーコと話している間に遺体と部屋を調べた。

(夏だつてのに暖房がついている……)

「それにしても暑い部屋ですな」

「あれのせいですよ、目暮警部」

「暖房がついてるのかね」

「え？」

ヨーコがエアコンを見る。

「冷房の設定にしてたはずなのに」
(ん?)

聡美は床に真新しい傷がついているのに気づく。
(傷?)

「ヨーコさん、被害者に見覚えは？」

「さつき刑事さんに言ったけど、隣の部屋の人よ」

「それだけの関係ですか？」

「いえ。以前、少しの間付き合っていました」

「ということは合鍵を使って侵入した可能性もありますね」

「でもどうしてこんなところで死んでるんですか？」

「詳しい話は署に行つてからにしましょう」

「そんな！ 刑事さん、私を疑ってるんですか!？」

(やばい!)

聡美は焦った。

「待って下さい、目暮警部！」

聡美の言葉に、ヨーコを連行しようとしていた目暮や警察官たちが
振り返る。

「なんだね？」

「この男性は殺されてなどいません」

「どういうことだね？」

「男性が倒れている床を見て下さい。一箇所だけ窪みがありますよね
？」

聡美は床の凹んでいる部分を指差した。

「本当だ！ しかしこれがどうかしたのかね？」

と、目暮が床の窪みを確認する。

「わかりませんか？ この窪みとなぜか暖房になっているエアコンの
設定……」

「聡美くん、説明をしてくれたまえ」

「男性は自殺なんです。水を凍らせる容器にナイフの柄を立てて氷
を作り、床の上に立てて後ろ向きに飛んで自分の背中にナイフを突き
刺した。この傷はそのとき身体の重さでできた窪みです。更に暖房

の設定になっっているエアコン。これは水を速やかに溶かして証拠を隠滅するため。水になっってしまうえば暖房の暖かさで気化しますからね」

「なるほどー！」

「よつて、男性を殺害したのは、ヨーコさんではなく、男性自身だったんですよ！」

「だけど、どうしてこの男性は沖野さんの部屋で自殺したんだね？」

「ああ、それは……」

聡美は棚の上の写真立てを手に取った。

写真にはヨーコの他に彼女と同じ髪型の女性が写っている。

「恐らく、この女性をヨーコさんと勘違いし、シヨックを受けての自殺でしょうが、ただそれでは気が済まず、他殺を偽装したんですよ」

と、聡美の推理通り、監察医の司法解剖により、男性は自殺であることが判明した。

ヨーコは自分の部屋で男性が自殺していたことで気分を悪くし、後日には転居をしたという。

(ていうかこれ、前にもあったような……)

48. 京都八瀬昌撮影所殺人事件!

聡美とコナン、蘭、そして小五郎は、京都の時代劇撮影所にやってきた。

ここ、八瀬昌やせまさ撮影スタジオで、俳優の陣川じんかわ輝あきらの命を狙うという旨の脅迫状が届いたということで、小五郎の元にその差出人を特定する依頼があり、遙々足を運んだのである。

「へー。これ全部、江戸時代の街並みをそっくり再現したものみたいね」

「あれ?」

と、聞き覚えのある声がし、振り返る聡美と蘭。

「あ、和葉ちゃん!」

遠山とやま和葉かずは。

「蘭ちゃん、なしてこないなどこに?」

「和葉ちゃんこそどうして?」

「実は平次が時代劇の撮影をしててん。一緒についてきたんよ」

「そうなんだ。私たちはお父さんが事件の依頼を受けたから一緒に」
和葉が聡美を見る。

「そつちの子は初めてやね」

「工藤 聡美」

「く、工藤やて!」

聡美に和葉が詰め寄る。

「あんたね!? 東京で平次を誑たぶらかかしてる女は!」

「え、なんのこと?」

「とぼけたってアカンで! 平次から全部聞いてんやから!」

傍でコナンが、ヤバイという顔をしている。

「なに言うтонねん、アホ」

と、休憩中の服部はっとり平次へいじが現れて突っ込む。

「俺の言うとする工藤は男や」

「え?」

振り返る和葉。

「でもこの子も工藤で……」

「そいつは工藤の妹やて」

「そうやったの？ ごめんな、聡美はん」

「それよか、なんでみんなこないな場所へ来てんねん？」

「事件の依頼だよ、平次兄ちゃん」

「事件やと？」

「ああ。陣川つつー俳優に脅迫状が届いてな。差出人を特定してほしいらしい」

その時だ。

「きゃああああー！」

どこからともなく、女性の甲高い悲鳴が聞こえた。

「なんだ？」

聡美、コナン、平次が駆け出す。

「どないしたんや姉ちゃん!？」

驚いた男性の隣で腰を抜かす女性が小屋を指差す。

「な!？」

聡美は小屋の中の首吊り遺体を見て驚く。

平次が遺体に駆け寄り、様子を調べる。

「アカン、もう亡くなってるで」

「そんな、芳枝が？」

男性はワナワナと震える。

「なあ、これを発見した時、状況はどうなってたんや？」

「ここ、芳枝の控室に使ってたんだけど、中からかんぬきがかかって、いくら呼んでも返事がないから、突き破って開けたら首を吊ってたんです」

「なんやて!？」

「まさか、芳枝が……」

男性が悲しそうに涙を見せる。

聡美は警察に通報した。

警察が到着し、捜査が行われる。

捜査で死亡した女性の名は、板垣いたがき 芳枝よしえだとわかり、第一発見者は

聡美たちが駆けつけたときにいた男性と女性の二人だった。

男性の名は陣川じんかわ輝あきつら。依頼主だった。

女性は上妻あがつま英子えいこ。板垣のマネージャーだ。

被害者の芳枝は陣川と付き合っていたのだが、彼が上妻に乗り換え
たことにより犬猿の仲になりかけていた。

「こりや自殺だな。中からかぬきがかけられてたんだろ？ 小屋の

構造を見ても外からはかけられねえや」

と、小五郎は言う。

捜査員によつて遺体が下された。

聡美は遺体を確認するが、特に怪しい点は見つからない。

「毛利さん、自殺となると動機はいつたい？」

「そちらの陣川さんが上妻さんに乗り換えたことにより、ショックを
受けてのことでしょう」

「さすが、名探偵」

「ナーハハハハ」

高笑いする小五郎。

「自殺ということなら、私は仕事に戻ります」

「まあ、いいでしょう」

と、刑事。

「陣川さんは、脅迫状のことで話を聞きますので、もう少しお付き合い

下さい」

「はい」

立ち去ろうとする上妻。

「困りますね、勝手に戻られては」

「え？」

立ち止まり様に振り返る上妻。

「お嬢ちゃん、何なんだね？」

刑事が聞く。

「これから自殺に見せかけた巧妙な殺人トリックの全容を解明しよう
というのに。ですよね、板垣さんを殺害した犯人の、上妻 英子さん
!？」

「な……!?!」

驚く上妻。

「ちよつと待ってくれよ。小屋は内側からかんぬきがかけられていたんだよ？　なのにどうやって外に脱出したんだ？」

「簡単ですよ。絞殺した被害者を縄で吊るし、両足の間にかんぬきを挟み、振り子のように振ってすぐに扉を閉める。すると扉側に足が戻ってきたときにぶつかり、衝撃でかんぬきが落下し、かんぬきが扉に挟まるというわけですよ」

「そんなの言いがかりだわ！」

「脅迫状」

「え？」

「脅迫状は板垣さんが陣川さんに出したものじゃないんですか？　板垣さんは陣川さんがあなたに乗り換えたことで、陣川さんを殺そうとしていたんですよ」

「なんですって!?!」

驚く陣川。

上妻の顔に影が差さる。

「ふつ、そうよ。私が殺したのよ。あいつが輝を殺そうと計画してるのを知って、それを止めるためにね。自殺で片付くと思ったのにお嬢ちゃんには負けたわ」

上妻は刑事に両手を差し出した。

手錠をかけた刑事が、上妻を制服警官と共に署へ連行するのであった。

49. 霧天狗伝説殺人事件

聡美は小五郎、蘭、コナンの三人と共に、車のタイヤがパンクして林道で立ち往生していた。

「小五郎さん、パンク直せないんですか？」

「スペアタイヤがないんだ。今時、二回もパンクだなんて、ついてねーや」

小五郎はコナンがいないことに気づく。

「あれ、あいつどこ行つた？」

「さっきまでいたのに、変ね」

蘭がコナンを呼ぶ。

ガサガサと茂みが揺れ、鳥が羽ばたいてどこかへ翔んでいく。

「きゃああああー！」

その悲鳴にコナンが姿を現す。

「蘭姉ちゃん、今の悲鳴なあに？」

「悲鳴？ なんのこと？ それより、一人でどこか行つちやダメじゃない」

「それより、僕あの先でお寺を見つけたんだ。きっと誰かいるかもしれないよ」

四人でコナンが見かけたというお寺まで向かう。

「おお、本当だ。あんなところに寺があるじゃねえか。こいつは助かったぜ。よし、早速行ってみようぜ」

四人は寺に向かう。

山泥寺さんでいじという寺である。

「今夜はここに泊めてもらうしかねえな」

中に入る四人。

「ごめんください！ 誰かいませんか!？」

と、蘭。

すると、住職がやってきて答える。

「うぬら、何用じゃ?」

驚き様に振り返る四人。

「何用でここに來たと聞いておる。さては、貴様ら、新聞社かテレビ局の回者じゃな?」

「んあ?」

「帰れ帰れ! ここは貴様ら賊仏が來るところではないわ!」

小五郎が顔の前で両手を横に振りながら答える。

「いんや、我々は車がパンクして立ち往生していたもので、ただここに泊めてもらえないものかと……」

住職が接近してくる。

「なに? ここに泊まりたいじゃと?」

小五郎は体を後ろに傾けながら答える。

「はい。でもご迷惑なら、あたしたちは直ちに」

住職は笑顔で小五郎の両手を掴んだ。

「なんじゃ。それならそうと早く言つて下され。わしや、てつきり、またアレを取材に來た者かと」

「あれつてなんですか?」

と、蘭。

「は……いや、こつちの話。えー、一泊精進料理つき、拝観料お一人様一万円、お子様は八千円です。この寺は宿坊も兼ねておりますので」

「い、一万円!?!」

「いやならいいんじやよ。麓^{ふもと}まで六時間、歩きなされ」

「い、いや、まだ泊まらないなんて」

「やーい、お前たち! 久しぶりのお客さんじゃぞ!」

住職が奥に向かつて叫ぶ。

「ちよ、ちよつと! まだ泊まるとも!」

住職が小五郎を睨め付ける。

「悪いことは言わん。泊まつていきなされ。この雨の夜、やつはどこで目を光らせてるとも、限らん」

「やつ?」

「クマでも出るんですか?」

不気味に微笑む住職。

「クマ? そんな可愛いものじゃありませんよ。闇を好み、人の魂を

食らう、古いにしえの魔物、霧天狗じゃよ」

「霧天狗？」

雷が部屋を照らす。

「あー、いかんいかん、ここでは禁句じゃった。今のは忘れて下され」
聡美の表情が変わる。

そこへ、修行僧たちが駆けつけてくる。

「おー、来たか。では、この寺で修行を積んでおる、四人の修行僧を紹介しよう」

眉が太い細長い顔の修行僧、寛念かんねん。修行年数が一番長いみんなの兄貴分。

小太りな修行僧、屯念とんねん。大飯ぐらいだが、料理の腕前がよく、力持ち。

眉が細い細長の黒っぽい顔の修行僧、木念もくねん。手先が器用で寺の大工仕事を全て任せている。

小さい体の修行僧、秀念しゅうねん。今年入った新入りで、勉強熱心で頭がキレる。

「——そして、わしがこの寺の住職を務める、天永じゃ」

天永が修行僧を見る。

「では、屯念と木念は夕食の支度を頼む。寛念と秀念はこの方たちに寺の中を案内してさしあげなさい」

四人は寛念と秀念に寺の中を案内してもらおう。

「ん？」

聡美は解錠された錠前が引つかかる部屋に気づく。

(なにかしら？ あの錠のついた部屋は)

聡美は錠のついた部屋を開けた。

(蔵になつてるんだ)

「お嬢さん、そこは！」

蔵に入る聡美。

(なんだ、ただの小さな部屋じゃない)

「お嬢さん！」

聡美は天井を見上げる。

(うひゃー。高い天井！)

「なんです、この部屋は？」

小五郎が入ってくる。

「ねえ、お坊さん？」

小五郎が修行僧を見ると、寛念が俯いて何かに怯えていた。

「修行の間ですよ」

と、秀念がいう。

「昔は戒律を破った僧侶をここに閉じ込め、反省させていたそうです」
「通りで頑丈にできているわけだ」

小五郎が部屋の壁を触る。

「それに、登れないように部屋中に漆が塗られている」

「ねえ、なんでこの辺の壁だけ板の色違うの？」

そう訊ねるのはコナンだ。

「ああ、それはあの事件で壊れた壁をそこだけ木念さんが直した跡だ
そうですよ」

コナンを見ていた秀念が寛念を見る。

「ですよね、寛念さん」

「あの事件で？」

聡美が訊ねる。

「僕がこの寺に入る前に起こった事件です。詳しくは知りませんが、
なんでも霧天狗——」

「よさないか、秀念！ そんなことをお客様にいうべきことではない
だろう！」

と、寛念が怒鳴り散らす。

「すみません」

蘭が上を見上げる。

「なんですか、この音は？」

「滝ですよ。なんなら見に行きますか？ この部屋のすぐ横を流れて
いるんですよ」

滝を見に上へ上がる一行。

「うわあ、すごい。本当に滝が目の前！」

と、蘭が感動している。

「ほら、滝の水が手すりを越えて、こつちまで流れ込んでる」

「気をつけて下さいよ。一応、すのこを敷いてありますが、滑ると危ないですから」

蘭が足元を流れる水を見る。

「これ、桜の花びらじゃありません？」

「山の上にある桜から落ちて、流れてきた花びらですよ」

「風流すなあ」

と、小五郎。

「そろそろ戻りましょう。夕食の支度ができたころだと思います」

一行は食事場へと移動する。

一同が談笑していると、コナンが訊ねた。

「ねえ、さつきから気になってるんだけど、霧天狗ってなに？」

修行僧たちは驚く。

「坊や、その話をどこで？」

「すまん、わしがついとうっかり口を滑らせてしまったんじや」

と、天永が答える。

「なーに、他愛もない昔話じゃ。その天狗は、雨の夜、霧のように村に忍び寄り、仁王の如き剛力で家の壁を破り、人をさらい、あまかけるその足で、木の上へ登り、死体を吊るしてその肉を食らっていたという古の魔物。さらっていったのは肉の柔らかい若い女子ばかり」

怯える蘭。

「そう。ちょうど、娘さん、あんたのようにな」

蘭は小五郎の後ろに隠れた。

「なーに、これは所詮昔話。気にすることではありやせん」

「だよ」

「でも、まんざら昔話でもないんですよ」

そう口にするのは木念だ。

「あったんですよ、二年前に奇妙な事件が」

「木念！」

「その事件、詳しく教えてもらえますか？」

と、聡美が訊ねる。

「聡美お姉ちゃん、有名な探偵の妹なんだよ」

「探偵!? もしかして、工藤 聡美?」

修行僧が聡美を囲む。

修行僧は聡美に二年前の事件を聞かせようとするが、「鎮まれ!」と、天永が怒鳴る。

「あの事件のことは二度と口外せんという約束じゃったのを忘れたか」

「しかし、和尚様!」

「食事はおしまいじゃ。さっさと部屋へ戻って寝支度でもせい!」

天永が立ち上がる。

「探偵さん、あなた方には部屋を貸すが、明朝、寺を出てもらう。悪く思わんでくれ」

天永が食事場から出ていく。

夜更け、聡美とコナンは蘭に付き添ってトイレへやってきた。

「蘭め、こんな夜中に叩き起こすなんて……」

「怖がりなんだから仕方ないでしょ!」

「ねえ、気になるよね、あの事件」

と、コナン。

「知らないよ。言いたくないものは、聞かないのが花だよ。まさか霧天狗が現れたわけじゃないし」

「おや?」

聡美の背後に天狗のお面を被った蘭が現れる。

「どうかしたかね?」

「うわああああ!」

驚く聡美。

「なによ! 自分だって怖がりじゃない!」

「蘭、どうしたのよそのお面?」

「トイレの向こうに飾ってあったのよ」

「あんたね……」

そこへ寛念が駆けつける。

「どうかなさったんですか？」

「ああ、いや、なんでもありませんよ」

三人は部屋に戻る。

「おやすみなさい、寛念さん。ゆっくり休んで下さいね」

蘭は天狗のお面を持ったまま言う。

「これ持ってきちゃった。どうしよう？」

「ったく、被って寝な」

(おかげですつかり目が覚めたわ)

翌朝、秀念が四人の寝室を開ける。

「朝食の支度ができました」

「はい、すぐ行きます」

秀念があくびをする。

「眠そうですね、秀念さん」

「ええ、昨夜、遅くまで読み物をしていましたから。それじゃあ、失礼します」

お辞儀をして去っていく秀念。

食事場に移動する一行。

木念が眠そうな顔をしている。

「眠そうですね。木念さんも夜更かしですか？」

「あなたの叫び声のせいですよ！」

額に青筋を立てた木念が聡美に詰め寄る。

「気になってなかなか寝つけませんでした！」

「すみません」

「私なんてまだいいですよ。屯念なんて、一睡もしてませんから」

「え？」

「あ！」

蘭が和尚と寛念がいないことに気づく。

「和尚さんと寛念さんは？」

「寛念は、和尚様の姿が見えないので、探しに行きましたよ。どうせ

どっかの部屋で酒を食らって——」

刹那、秀念が扉を開けると同時に、寛念の悲鳴が聞こえる。

「うわああああ!」

「今のは、寛念の声?」

「修行の間の方から聞こえてきましたよ」

一同は修行の間へ駆けつける。

「どうしたんですか?」

寛念が修行の間の天井を指差す。

聡美が中に入って上を見上げると、天永が天井の梁から吊るされた縄に首を括って亡くなっていた。

通報で警察が臨場する。

「首を吊って死亡したのは、この寺の住職、天永和尚。死亡推定時刻は昨夜の十時から十二時の間。死体を発見したのは寺の修行僧、寛念さん、あなたですな?」

と、目暮警部が寛念を見て言う。

「はい。朝から和尚様の姿が見えなくて、捜してたんです。そしたら、この修行の間で和尚様が」

「彼の叫び声を聞いて駆けつけたのが、偶然居合わせた聡美くんか」
聡美は目暮警部を無視して寛念に訊く。

「寛念さん、勘が鋭いんですね。和尚さん、あんな高いところで首を吊ってたんですよね? 私だったら見つけられてなかったと思います」

「ん?」

目暮警部が上を見上げる。

「確かに妙ですな、寛念さん」

と、小五郎。

「ひよつとしてあなた、最初から和尚さんが首を吊っているのを知っていたんでしよう?」

「じよ、冗談はよして下さいよ! 私はただ……」

「見つけられて当然ですよ」

と、木念が口を挟む。

「木念？」

「二年前にもこの部屋で全く同じことが起こったんですから」

「二年前？」

「ああ、それも私が担当した事件だ」

と、目暮警部。

「確か、死んだのはチユウネンとかいう修行僧だ。そして発見したが、寛念さんと木念さんのお二人でしたな」

「あれは、雨が降り続いた梅雨のころのことです。修行のため、この部屋にこもっていたチユウネンさんが、壁に大穴を開け、姿を消したのです。その後、三日三晩捜したのですが、見つからず。寺の外へ逃げてしまったのだと諦めかけた四日目の朝、壁を修理しようとしたこの部屋に寛念と入り、上を見上げたら……」

チユウネンが首を括って亡くなっていたという。

「壊されていた壁はこれね？」

と、聡美が割れた壁を見る。

「最初はチユウネンさんがここから逃げ出すために開けたのだと思います。この部屋の扉には鍵がかかっていたし、それに、後で外壁を修復しに来た大工さんが言っていたんです。こんな大穴を一人で開けるのは、一日がかりの大仕事だって。こんなことが容易にできるのは、あの怪力を持つ、古の魔物、き……霧天狗ぐらいだよ！」

「霧天狗!?!」

小五郎と目暮警部が驚く。

険しい表情をする聡美。

「馬鹿馬鹿しい。そんな化け物なんておりやせんよ」

「目暮警部!」

天井から捜査員の声がする。

上を見上げる一同。

「やはり二年前と同じです! 両脇の梁にはほこりが溜まっていて、何かが触れた形跡は全く見られませんし、真ん中の梁は多少埃が落ちてますが、縄がくくりつけられてるだけで、引きずった痕はどこにもありません。やはり、今回も自殺なのではないでしょうか?」

「自殺？」

と、小五郎。

「ああ。登るだけならあの警官のように、梁に縄を渡してなんとか登れるが、人をあそこまで運ぶとなると話は別だ。死んだチュウネン僧侶も和尚も、それなりの体格。彼らを背負って縄をよじ登るのは、まず不可能。首に縄をつけて吊し上げても、梁に引きずった痕が残る。最初に自分が登り、上から引つ張り上げたとも考えられるが、足場がああ細い梁一本では、到底無理だ。となると、自分一人で縄をよじ登り、梁の上でその縄を使って輪を作り、その輪を自分の首にはめて飛び降りたとか考えられん」

目暮警部が床に突き刺さった斧を見る。

「余ったロープと、それを切るために使ったと思われる斧も床に落ちてるし、まず間違いなからう」

目暮警部は大きな穴を見る。

「しかし、気になるのは前回も壊れていた、あの壁だ。どうやって壊したかは知らんが、壁に穴を開けたのも、高い天井で首を吊ったのも、全てはあの昔話に擬える^{みなぞら}ためにやったことだろう。まるで自分があの宙を舞う霧天狗に命を絶たれたと、我々に暗示させるためにな。全く人騒がせな話だ」

「でも、変じゃないですか、この壁？」

と、聡美が何かに気づき、目暮警部と小五郎が覗き込む。

「ここって小窓がついていたところですよ？」

壁から外に出る聡美。

「壁にこんな大きな穴が開いてるのに、壊れた壁や板の破片はほとんど残ってませんよ？」

「うーん、まあ、確かに」

小五郎が手すりの下を見る。

「ふん、どうせ下に落としちまったんだらう。なにしろ霧天狗の犯行に見せかけて自殺するやつだ。何考えてるのか、わからねえよ」

その時だ。

「おじいちゃん！」

と、女性が遺体を見て泣いている。

「おや？ 確か、彼女は……」

「和尚様の孫娘の菊乃さんです」

「おじいちゃん、どうしてこんなことに？」

「二年前、チュウネン僧侶の遺体にすがって泣いていたのも、彼女だったな」

「ええ。前は時折、この寺にも遊びに来られていたのですが、あの事件以来ぱったりと見えなくなっただんです」

そういうのは寛念だ。

遺体にすがる菊乃の肩に手を添える僧侶。

「あの人は？」

聡美の問いに木念が答える。

「菊乃さんの旦那様ですよ。つい先日、結婚されたんです。なんでも、大きなお寺の後継で、二人は小さいころからの許嫁だったそうです。それを二年前に和尚様から聞いた時は、本当に驚きました。菊乃さんはチュウネンさんと一緒になるとばかり思っていましたから」

「チュウネンさん？」

「はい。二人は実の兄弟のように、仲が良かったですから」

屯念も話しに加わる。

「きつとチュウネンさんは、菊乃さんの結婚の話が相当ショックだったんですよ。だから、あんな馬鹿なことを……」

寛念が目暮警部を見る。

「もしかしたら、和尚様はそのことをずっと気に病んでいて！」

木念も目暮警部を見やる。

「だから菊乃さんの結婚を期に、チュウネンさんと同じ死に方を！」

目暮警部が顎に手を当てる。

「うーん、確かに有り得るな。だとしたら、どこかに遺書があるはずだ」

「では、みんなで手分けして探してみましよう」

目暮警部、修行僧、小五郎が遺書の搜索を始める。

「なあ、聡美。この事件、本当に自殺なのかな」

と、コナンが聡美に訊ねる。

「いくら昔話に擬えたからって言ったって、あんなところで首を吊るやつがいるか。しかも、あんな大穴を開けてまで」

聡美とコナンが大穴を見る。

「もしも自殺じゃないとしたら、この大穴が何かのトリックに使われたとしたら、今回の事件と二年前の事件は、同じ手口ね」

「ああ。つまり、チュウネン僧侶と和尚は同一人物に殺されたってことになるけど……」

「何やってんだ、二人とも?」

と、秀念が現れる。

「秀念さん」

(そういえばこの人、一年前にこの寺に来たって言ってたわね)

聡美は秀念の左手を掴み、袖をめくった。

(こんな細い体じゃ、壁にあんな大穴を開けられそうにないわね)

「確か秀念さん、昨夜遅くまで本を読んでいたんですよ?」

「ああ、三時過ぎまで起きてましたよ」

「その間に何か気づいたことありますか? 例えば、誰かがこっそり部屋を抜け出した気配とか」

「いや、何も聞いていないです。昨夜は静かな夜だったから」

「本当ですか?」

「和尚様の部屋は離れています、みんなの寝部屋は隣同士だから、何かあったらすぐにわかると思いますよ。もしかしてお嬢さん、みんなを疑ってるんですか?」

「いや、別に……」

「おい、秀念!」

と、屯念がやってくる。

「ぼやぼやしてないでお前も手伝えよ!」

「あ、はい!」

屯念と秀念が去っていく。

聡美は上の階へ上がり、窓の中を覗く。

(ここから梁に縄をつけて運ぶのは厳しいか)

「ん？」

聡美はすのこの切り口が歪なことに気づく。

(なにこれ？ 歪ね。他はちゃんとしてるのに)

聡美はすのこを持ち上げる。

(切り口は古い。随分前に切られたものか)

すのこの裏に桜の花びらが並んでついている。

(どういうこと?)

下のフロアで、蘭が聡美を捜している。

「聡美、どこ!？」

「あのお嬢さんなら、寺の下に降りる道聞いて降りていったよ」

と、警官が伝える。

聡美は寺の下の草むらで何かを探している。

(現場からなくなっているものといえば、あの壊れた壁と板の破片だけ。もし犯人が本当に、あそこからそれを投げたとしたら、必ずこの辺りに落ちているはず。それを見つけたらわかるかもしれない。犯人がそれを捨てなければいけなかった理由が。そして、そのトリックの謎が)

聡美は暫く草むらを探すが、見つからなかったのか、場所を変えて調べる。

「あー！」

聡美は板の破片を見つけた。

(これは小窓の一部ね。ガムテープがついてる？ これは一体……)

そこへ蘭が現れる。

「聡美、こんなところで何してるの？」

「ああ、蘭。事件の証拠品を探してたのよ」

「なに、その汚い板？」

聡美が現場へと戻ると、警察が引き上げようとしていた。

「ようし、今日のところはそろそろ引き上げるぞー！」

「目暮警部、菊乃さんはどうしたんです？」

「ああ、彼女なら遺体と一緒に警察に向かったよ」

しかし、と続ける目暮警部。

「結局、遺書は見つからずじまいか」

「いいじゃないですか。自殺というのは決まってるし——」

目暮警部と小五郎が現場から出ていく。

（違う。これは殺人。昨夜、この部屋で何かが遭ったんだ。それも、想像を絶する何かが）

強大な力で破壊された壁。

切り口の歪なすのこ。

そして、林の中に捨てられた小窓の破片と、それについたガムテープ。

（これらをつなぐカギは一体……）

聡美が考えていると、上から桜の花びらが落ちてきた。

「桜？」

（そうか。そうだったんだ）

聡美は上を見上げる。

（だとしたら、犯人は恐らく一晩中この部屋の中にいたことになる。そうか、だからあの人はあのことを）

聡美は現場の外で固まってる修行僧四人を見る。

（犯人はあの人で間違いなさそうね）

聡美はコナンに伝えた。

「ああ、わかった」

コナンは滝の流れ込むフロアへと上がっていった。

「目暮警部、事件の真相がわかりましたよ」

「真相って、自殺じゃないのかね？」

「ええ。和尚さんを自殺に見せかけて殺した犯人が、この中にいるんですよ」

「おいおい。和尚はこの高い天井の梁に縄をくくりつけて、首を吊って死んでいたんだぞ？ それを誰かが仕組んだというものなら、一体どうやってやったというんだね？ 釣り上げた痕跡なんぞ、梁にはついていかなかったぞ」

「ふふふ。痕跡なんて残ってなくて当然ですよ、目暮警部。犯人は天井の梁の真下に、和尚さんと共に浮かび上がり、梁に和尚さんを結え

つけたわけですから」

「浮かび上がった?」

聡美の推理に困惑する目暮警部。

「霧天狗じゃあるまいし、人間にそんなことができるわけが」

「聞こえますか、この音?」

「ああ。滝の音だろうか?」

「天窓の横を流れている滝。その滝の水を、天窓に引き入れ、部屋を水でいっぱいにすることができたとしたら、天井まで浮かび上がるのは可能だと思いますよね?」

「この部屋を水でいっぱいにする? そんなことしたら犯人も被害者もずぶ濡れ。死体には濡れた痕なんて残っていないのは君も確認したじゃないか」

「ゴムボートですよ」

「ゴムボートだと?」

「寛念さん、確かこの寺にはゴムボートがあるって言ってましたよね?」

「はい」

「そのゴムボートに死体を乗せ、上にビニールでも被せておけば、天井まで辿り着けますよ」

「だが、その天井と滝とは離れておる。いくらなんでも都合よく水の中に引き入れることなんて」

コナンがすのこを使って水を天窓から引き入れると、その水が目暮警部にかかって水浸しになってしまう。

「犯人はすのこの隙間をガムテープで止めて裏返し、滝から天窓へ渡したんですよ。その証拠に、すのこの切り口が歪になっていました。これは長さを合わせるために切られた痕。それに、ガムテープが貼られていたと思われる部分には、桜の花びらが並んで張り付いていた。山の上から滝によって運ばれる、山桜の花びらが。それに、桜が張り付いているのはすのこだけじゃない。そろそろ乾いて落ちてきますよ」

上から花びらが落下してくる。

「あ？」

「犯人が水を抜いた時に、壁に張り付いてしまった桜の花びらが」

目暮警部が桜の花びらを拾って見つめる。

「つまり、犯人は、和尚さんを殺害した後、この部屋に運び、ゴムボートに乗せて扉を内側からガムテープで目貼りし、小窓からいったん、外へ出た。そして、二階の天窓から今の方法で水を引き入れ、急いで一階に戻って小窓から入って小窓も目貼りする。内側から目貼りしないと、小窓から水が外へ漏れてしまいますからね。後は死体に水がかからないように、注意を払いながら、溜まるのを部屋の中で待つだけです。水が溜まり、梁の真下に到達した犯人は、死体を梁にくくりつけ、まんまと天窓から外に脱出したというわけですよ」

「だが、どうやって水を抜いたんだね？」

「現場に残っていたあの斧で小窓を破ったんですよ。そう、この部屋の容積は、四畳半くらいで、高さが十メートルくらいだから、二点七メートルかける二点七メートルかける十メートルで、七十二点九立方メートル。水の比重は一なので、部屋に溜まった水の重量は、七十二点九トン。そんな水の入った底の小窓に、斧を入れれば、どうなるかわかりですよ？ 亀裂が入ってもろくなっていた小窓は、およそ九点八かける十の四乗パスカルもの圧力で吹っ飛び、吹き出す水の勢いで、壁はみるみるうちに碎け、大穴が開く」

「九点八かける十の四乗パスカル？」

「トラックに轢かれたくらいの力ですよ」

「そうか。それでこんな大穴が開いているのに、破片が残っていないかったのか」

「飛んだ破片は、下の林で見つけましたよ」

聡美は袋に入れた破片を目暮警部に渡した。

「なるほど。ガムテープ付きの小窓の破片か。だが、一体誰がそんなことを？」

「水が部屋から抜けるのは十秒もかからないが、貯めるとなれば話は別です。すのこから入る水量は、水道の蛇口の五、六倍。一時間辺りの水量を十立方メートル前後だとすると、この七十二点九立方メート

ルの部屋をいっぱいにするには、七時間にかかる計算。和尚さんの死亡推定時刻は、昨夜の十時から十二時の間。そして、死体が発見されたのは、朝八時ごろ。トリックの準備をする時間と、水を抜いた後、部屋を吹いたりする後始末の時間を差し引いても、犯人は昨夜の十二時から六時の間、確実にこの部屋の中にいたことになるんです」

「それが一体、犯人とどういう関係が？」

「秀念さん、あなた確か、昨夜の三時ごろまで、自分の寝部屋で本を読んでいたと言いましたよね？ だったら、あなたも聞いていたはずですよ。昨夜の二時ごろ、トイレの天狗の面に驚いて、ある人物が悲鳴を上げたのを。それは一体誰だったのか、答えて下さい」

「も、もちろん聞いたよ。蘭さんが上げた大きな悲鳴を」

驚く三人の修行僧。

「驚いちやったよ。蘭さんは怖がりだから仕方ないけど」

「し、秀念、お前……？」

屯念が疑問符を浮かべた。

「秀念さん、あの時悲鳴を上げたのは、蘭じゃなくて私なんですよ」

「……………」

「まあ、あなたに聞こえなかったのも無理はありません。轟々たる水の音がするこの部屋に、一晩中いたんですからね」

「だが、そんな証言、証拠にはならんぞ、聡美くん」

「明確な証拠なら、警部が持つてるじゃないですか」

「え、この破片？」

「水を抜いた後、部屋に残った犯行の痕跡は消せますが、吹っ飛んだその小窓の破片はそうはいかない。そう、それは犯人が回収しそこねた、唯一の忘れ物。私の探偵生命をかけてもいい。絶対にその破片についた、ガムテープに残っているはずですよ。秀念さん、あなたの指紋がね」

冷や汗をかく秀念。

だが寛念が訊ねる。

「でも、秀念は一年前にこの寺に来たんですよ？」

続いて木念が。

「二年前と同じトリックなら、同一犯」

屯念も口を開く。

「秀念には無理だ！」

「二年前の事件は、和尚さんの犯行でしょう。今回と全く同じトリックを使つて。すのこの切り口は古かつたし、前の事件の解明を一番恐れていたのは、和尚さんでしたから。そして、私の勘が正しければ、二年前に殺されたチュウネンさんと秀念さんは、兄弟です！」

修行僧が秀念を見る。

「ああ。そうだよ。チュウネン僧侶は真正正銘、血を分けた僕の兄。みんなが気づかないのも当然だよ。僕は素性を隠すため遠縁の寺を通して、修行僧としてこの寺にやってきたんだから」

秀念は語つた。

この寺に来た目的は、兄が死んだ不可解な事件の解明と、真犯人を見つけることだと。

半年間、必死で寺中を調べ回つて、トリックは見当はついたが、犯人はわからなかつた。

「みんな、事件のことは話したがらないから。でも、昨日、探偵さんが来てわかつたよ。和尚のあの妙な態度を見て、はつきりとね！あの後、和尚の部屋へ行き、寝酒を飲んで酔つた和尚を問い詰めたら、ペラペラといろんなことを話してくれたよ。僕が弟だとも知らずに。兄を殺した理由は、大きな寺の跡取りと縁談の決まっていた菊乃さんを、兄に取られたくなかつたから。兄は菊乃さんと駆け落ちの約束していたらしいけど、そんなことはどうでもいいよ。とにかく、自首してくれと頼んだら、『どうせ二年前のこと。もう証拠はなにも残っておりやせんよ。それにあの事件のおかげでこの寺にも白がついたからよしとせい。霧天狗が出没する寺じゃとのおう』その言葉に僕は我を忘れ、部屋にあつた帯で和尚の首を絞めて、殺してしまつたんだ！そう、二年前に和尚が兄の首を絞めた時と同じように、首吊り自殺と同じ痕が残るように、背負つてね。死体を前にした僕にはもう、道は残されていなかつた。二年前、和尚が使つたトリックで、犯行を隠す道しか。残念だよ、探偵のお嬢さん。もしもあなたが、二年前にもこ

の寺を訪れていてくれてれば。恐らく僕は、僕は……」
「秀念は間もなく逮捕された。」

50. 映画館殺人事件

日曜の朝。

聡美は加村の家を訪ねた。

「なんだ、お前か」

「刑事さんから康之くんが執行猶予になったって聞かされてね」

「あ、聡美お姉さん！」

「義男くん、元気そうだね」

義男の頭を撫でる聡美。

「で？ 何のようだよ？」

「夏休みの宿題を持ってきてあげたのよ」

聡美は康之に荷物を渡す。

「そうか。わざわざありがとな」

荷物を受け取った康之が中へとひっこむ。

「義男くんはもう宿題はやったのかな？」

「うん」

「偉いじゃん」

「工藤、義男をどこか遊びに連れてってやってくれないか？ 俺は宿

題やるから相手にできねえし」

「わかった」

行こうか——と、聡美は準備をした義男と共に出かける。

「義男くん、映画でも見に行く？」

「オデ、今やってるゴメラの映画が見たいな」

「いいよ」

聡美は義男を映画館へと連れていく。

スクリーン室に入り、座って映画が始まるのを待つ。

映画が始まり、しばらくしたところで、映像に不審な影が映り始める。

聡美は映写機の方を見る。

「……………」

暗くてはつきりしないが、映写窓の前に何かが吊るされており、そ

れが振り子のように左右に揺れていた。

明かりが点き、振り子が首吊り遺体であることが判明した。

「きゃああああー！」

映画を見ていた客が悲鳴を上げる。

「なに、どうしたの？」

「みちやダメー！」

聡美は義男の目を塞いだ。

スタッフの通報で警察が到着し、捜査が始まる。

「目暮警部、どうも」

「おお、聡美くんか。毎度毎度行く先々で事件に巻き込まれるなんて、君もついていないなあ」

それで——と、目暮は高木刑事を見る。

「死亡したのは、山崎 やまざき 孝明 たかあき さん、四十三歳。この近くの不動産会社の社長で、閉館するこの映画館を買い取っていたそうです」

目暮が館長であるご老人の方を向く。

「山崎さんはよくここに来ていたんですか？」

「ええ、最近は毎日のように。目的は映画ではなく、ここの解体作業の経過を視察をするために来られているようじゃった」

「ただの冷やかしよ」

そう口にするのは、女性スタッフだ。

「なにかムシャクシャすることが、あったのかどうかは知らないけど」
「営業妨害もいとこだよ」

と、映写室の責任者。

「何度も注意してるのに、館内でタバコを吸っちゃ、お客様を冷やかして。おまけに、座る席はいつも一番後ろの映写室の真前」

「おかげでタバコの煙で映像に影ができて、こっちは偉い迷惑をしてみました」

「今日も吸っておられたようじゃな」

「というのは館長だ。」

「時々映像に影ができとったから」

目暮が言う。

「しかし、本当なんですか？ 上映中に首を吊ったというのは」

「ええ、間違い無いですよ。ちょうど、映写している窓の真前で首を吊られましたから。画面に彼とロープの影が出てしまいましたから」

「その時間、いつでしようか？」

「えーと……」

「エメラのシーンの時だよ！」

義男が言う。

「エメラがゴメラの高ぶった気を沈めているシーンなんだ。エメラのアップにでつかい影がゆらゆらと揺れて入ってきたんだ」

「そのシーンなら中盤ちよい前だから、時間は大体十二時四十四分くらいです」

「目暮警部！」

千葉刑事がやってくる。

「千葉くん、なにかわかったかね？」

「チケット売り場のおばさんの話によると、死亡推定時刻に館内にいたのは、聡美さんと子どもを除けば、あの三人のようです」

三人とは、館長、女性スタッフ、映写室責任者だ。

「その証言は確かかね？」

「問題の上映が始まってから、そのおばさん、入り口で近所の方と話していたそうです」

「なるほど」

目暮が三人を見る。

「つまり、これが殺人だとすると、犯行が可能なのは、あなた方三人だけだということになりますな」

疑問符を浮かべる三人。

「警部さん、これは自殺なんですよね？ 大の男をロープで吊り上げるなんて芸当、年寄りや女には無理ですよ。まあ、できるのは俺ぐらいだけど、俺は映写室にいましたから」

女性スタッフは言う。

「映写室にいた彼に、ちようどお弁当を持って行って、お茶を入れてた時だから、間違いありません」

「では、館長さんはその時、どこに？」

「客席で映画を見ておったが？」

「うーむ……、やはり自殺なのだろうか……？」

「映写室に案内していただけますか？」

聡美の問いに責任者は構わないと言う。

一同はいったん上映室を出て、立ち入り禁止の張り紙がされた扉を
抜け、階段を上がって映写室へ。

「うん？ 映写機はどこにあるんだね？」

「ここは控え室。映写機はこつちです」

責任者が扉を開け、映写室に入る。

「ほおう、二台もあるのか」

「片方で上映している間に、上映し終わったフィルムをもう片方で巻
き取るんですよ」

「一台ではできないのかね？」

「巻き取るには時間がかかって、次の上映には間に合いませんので」
責任者が窓を指差す。

「そして、この窓が、映像がちゃんと映っているか、確認する覗き窓。
左のは映写機からの映像を投影する窓です。この窓の前である男が、
首を吊って映像に出てしまったわけです」

目暮が映写窓を見る。

「この窓は開きはしないだろうね？」

「ガラスはびつちりはまっていますので。影が出た時、俺はここにいた
し、隣の部屋には彼女がいてお茶を煎れていた」

「これ以上のアリバイはないですよね」

「うーん、となるとこれはやはり自殺か」

「お言葉ですが、目暮警部。二台の映写機を使って、前半と後半にわけ
てフィルムを回すというのは？」

「そうか！ そうすれば前半に遺体は映らず、後半にだけ現れるって
ことか！ つまり、あらかじめ遺体を吊るしておくことができるって
ことか！」

「それはいいですよ。そんなことすれば、フィルムにつなぎ合わせた

痕が残ってしまいますよ。なんなら、このフィルムを調べて下さいよ。あのシーンにそんな痕なんか、なにもありませんよ」

女性スタッフが付け加える。

「お弁当を買ってきた時、映写室を覗きましたが、動いていたのは手前の映写機のみでした」

「弁当を買ってきた時間は？」

「確か、画面に影が出てみんなが騒ぎ出す五分くらい前でした。十二時四十分くらいかな」

控え室に移動する。

「ほら、みんなで次の休憩時間に食べようと、買ってきたんだけど、コンビニが混んでて、戻ってきた時にチケット売り場のおばちゃんに時間を聞いたから。おばちゃんに聞いてみて下さいよ。間違いないわ」
「じゃあ、あなたはあの弁当を買ってきたあと、みんなが騒ぎ出すまでずっとこの部屋に？」

「俺がお茶を煎れるよう頼んだから。湯を沸かしてたんですよ」

「本当ですか？」

「ええ。そのコンロで」

コンロを指差す女性スタッフ。

「とりあえず、あのフィルムは警察で預かります」

「どうぞ。お役に立つのであれば」

「警部！」

高木刑事がやってくる。

「死亡した山崎さんは、賭博による借金をかなり抱えていたようで、ここ売って出る儲けを全額、返済につき込んでも、ままならない状態で。近所の人の話では、遅かれ早かれ、山崎さんの不動産会社は潰れていただろうということですよ」

「なるほど。自殺の動機はありますか」

「全く。迷惑な話ですよ。自殺するなら、よそでやればいいのに」

女性の不謹慎な発言に館長が「これこれ」と。

聡美は考える。

（自殺か。確かにあの状況なら、脚立を使って自分で首を吊ったと考

えても問題はないが。そういえば、問題のシーンの時、空調が強かった気がするわね。それで遺体が揺れてたのか)

聡美は上映室に移動し、山崎が座っていたであろう席の前を調べる。

いくつかの吸い殻が落ちている。

そして、前の席についた靴の痕。

(間違いない。犯人はあの人。あの人を被害者を殺したんだ)

聡美は目暮に話し、上映室にみんなを集め、部屋の照明を落としたり「みなさん、今回の事件は殺人事件です。今から、犯人の使ったトリックと真犯人を暴きたいと思います」

「ええ!?」 山崎は自殺なんだろう!?

「上映中の闇に包まれた客席で山崎さんを絞殺し、映写機を使って自分のアリバイを立証した。そう、犯人はあなたですよ」

聡美が映写責任者を指差した。

一同が驚く。

「ちよつと待ってよお嬢さん。彼はあの山崎が首を吊った時、映写室にいたのよ? あの男の影が出た時、彼は映写室にいたわ」

「それは、こんな風にですか?」

聡美が映写機を操作する。

すると、スクリーンに映った映像に、影が出現する。その正体は義男だ。

「これのどこがトリックなのよ? 子どもが映写の途中でぶら下がっただけでしょう?」

「オデはずつとぶら下がってたよ」

「気づかなかったのは、この窓に本でふたをして、映写室の明かりを遮断していたからです。こうしておけば、あらかじめ遺体を吊るしておいても、気づかれないということですよ」

「いや、しかしね聡美くん? みんなの証言によると、遺体は揺れていたらだよ? いくらなんでも吊っておいた遺体が勝手に揺れるなんて」

「空調ですよ。場内は大きな密閉空間。あらかじめ、風の方向と強さ

を調整しておけば、風を回して多少遺体を揺らすことができるということですよ」

「お嬢さんよ。吊った遺体を気づかせないように揺らす方法はわかったが、肝心なことを忘れちゃいねえか？ 投影してたのは、その子どもがぶら下がってる窓。最初からぶら下がっていたんなら、影が出ちまう。窓の明かりを本で遮断していたなら、投影はできねえ。一体、どうやって俺は映画を上映していたんだ？」

「こうしたんですよね？」

聡美は映像に影を出したり消したりを繰り返す。

「嘘？ いったいどうやって？」

よく見ると、二つの映写窓から交互にスクリーンに投影されていた。

一同が映写室に飛び込む。

「フィルムを切り刻むなんて赦さないわよ！」

「うん？ 手前の映写機しか動いておらんな」

女性が奥の映写機を確認する。

「こっちの映写機にフィルムはセットされてないわ」

「じゃあ一体どうやって？」

「映写機の前に回ってよく見て下さい」

目暮が映写機の前を確認すると、鏡が取り付けられていた。

「この鏡をひねると、映像が反射し、覗き窓に固定しておいたもう一つの鏡に当たり、光が反射して吊った遺体を避けて投影させることができる。こうすることで、フィルムを切らずとも、一台で投影する窓を変えられるということですよ。それに、ここにつけておけば、そのドアから覗かれても、映写機の影になって鏡は見えませんよ。亡くなった山崎さんが、上映中に吸っていたタバコの吸い殻が、この覗き窓の真前の席に落ちていたのが、何よりの証拠です。彼はいつも上映の邪魔をするために、投影される窓の真前に座っていたそうですからね」

館長が責任者を見て「そうなのか？」と聞く。

「あなたが取った行動はこうですよ。まず、彼女に買い物頼んだあ

あなたは、犯行時に売店を空にして、上映開始とともに空調室へ行き、風の強さと方向を変えた。もちろん、映像は鏡を使って投影窓を変えておく。そして劇場内に入り、用意しておいた縄で山崎さんの首を絞めて殺し、映像が投影される窓の前に釣り上げれば、準備は完了。あとは映写室に戻り、彼女が来るのを待って、投影される窓を塞いであったものを取り除き、映写機のレンズに取り付けられていた鏡を外す。そうすれば、映像に首を吊った遺体の影が出て、それを彼女と一緒に目撃することで、アリバイは成立するということです」

「で、でも私が買い物に行ったのは、たまたまお弁当を買い忘れたからで」

「買い忘れなかったとしても、彼はあなたにお茶っ葉を買いに行かせるはずですよ」

「そんなの、ただの想像でしょ?」

「もういいよ」

と、責任者。

「お騒がせして、すみませんでした」

「続きは署で聞こう」

責任者は警視庁へと連行される。

51. インターネット殺人事件

高校からの帰り道、聡美は蘭とコナンの三人で歩いている。

「え？ 加村くんの弟と？」

「そうなのよ。妙に懐かれちゃって。しまいにはプロポーズされたわ」

「へ、へえ……」

その時だ。

サイレンを鳴らした複数台のパトカーが三人を追い抜く。

「……!?!」

コナンが駆け出した。

「コナンくん!?!」

と、追いかける蘭。

聡美も走り出した。

パトカーが止まっている現場へと辿り着く。

「ねえ、お巡りさん？」

と、コナンが見張りの警察官に訊ねる。

「ああ、君たちか」

警察官は一瞬考え込んで答える。

「実はこの家の住人が今日の未明に撲殺されてね」

「撲殺？」

「こちらに気づいた目暮警部がやってくる。」

「おお！ 聡美くんたちか」

「いったい何があったんです、目暮警部？」

「まあ、中で話そうか」

三人は目暮警部に案内されて現場に入る。

「ご覧の通りだ」

「被害者は野中^{のなか}孝^{たかし}、三十二歳。プログラマーです」

遺体が机に伏せている。

パソコンの電源がオンになっており、画面にはとあるサイトの掲示板が表示されている。

「死亡推定時刻は昨夜十一時から午前二時ごろ。被害者が掲示板に投稿していたのが、午前一時半なので、それ以降に殺害されたものと我々は見ている」

遺体のそばにスマホが落ちている。

聡美はスマホに手を伸ばした。

スマホを操作しようとするが、ロックがかかっていた。

「後で鑑識に見てもらおうよ」

目暮警部がスマホを預かる。

聡美はパソコンを操作した。

確かに目暮警部の言う通り、午前一時半に掲示板へ投稿した履歴があった。

「うん？」

投稿を遡ってみると、同じIPアドレスの人物が自作自演をしている箇所が見られた。その証拠に他者がそれを指摘している。

「高木刑事、至急このIPアドレスを調べてもらえますか？」

「IPアドレスですか？ ちよつと待って下さい」

高木刑事がIPアドレスをメモした。

「ではー！」

高木刑事は大急ぎで駆けつけていった。

「目暮警部！ 被害者が亡くなる前に電話していた相手が判明しましたー！」

「本当かね？」

「副島 彰あきつという人物です」

「その人物のアリバイは？」

「被害者が死亡する直前に自宅アパートの防犯カメラの映像に帰宅する様子が映っていました」

そこへ高木刑事がふくよかな男性を連れてきた。

「こちら、IPアドレスの持ち主の副島さんです」

「……!？」

聡美は驚いた。

「副島？ 下の名は彰さんですか？」

「はい。刑事さん、これは一体？」

「実はあなたのご友人の野中さんがお亡くなりなられましたな」

「亡くなった？ 一体、誰に殴られたんですか？」

「それはこれから……」

聡美は鑑識のトメに訊く。

「トメさん、被害者のスマホに……の痕跡ありました？」

「ああ、あったよ！ けど、よくわかったね!？」

聡美は副島を見つめる。

(間違いない。犯人はこの人だ)

「その顔、犯人がわかったみたいだな」

と、コナンが聡美に言う。

「まあ、とりあえずあなたのアリバイは確認できてるので、お引き止めする必要もないでしょう」

目暮警部が副島を帰らせようとする。

「困りますね、勝手に帰られては」

「え？」

帰ろうとした副島が立ち止まって聡美を見る。

「これからあなたがどうやって、被害者を殺害してアリバイを作ったのか、それを明らかにしようとしたのに」

「何を言うんだね、聡美くん。彼には犯行は無理だろう?？」

「それができるんですよ。パソコンとスマホがあればね」

「なんだって?？」

「ほう? じゃあ、聞かせてくれ。僕がどうやって野中を殺したのか」

聡美の説明はこうだ。

掲示板のフォームに文章を打ち込み、投稿せずにそのままにし、マウスポインタを投稿ボタンの上に合わせ、スマホのアラームをバイブレーションに設定してマウスに立てかけ、タイマーをセットしてその時刻、つまり午前一時半に起動するようにし、現場を離れる。後は何食わぬ顔で帰宅し、防犯カメラに映り込めば、犯行は完成だ。

「……と、いうわけですよ」

「……!」

「確かにその方法ならできる。だが証拠が、俺がやった証拠がないじゃないか」

「証拠ですと？ それはあなたがさつき自分で口にしていたじゃないですか。『一体、誰に殴られたんですか？』とね」

「……!？」

「あなたが来た時はすでに遺体は運ばれた後。どうして被害者が撲殺されたこと、あなたは知っているんですか。説明、できますか？」

「……くっ！」

副島は膝をついた。

「あいつが悪いんだ。あいつが俺のサイトを掲示板に載せたから。それで俺のサイトは荒らしの被害にあつてな……」

副島は制服警官に連行された。

「いやあ、また君の世話になったな、聡美くん」

(本当はあまり関わりたくないんだけど……)

と、聡美は頭の中で思うのだった。

52. 女子プロレスラー死亡事件 前編

その朝、聡美は自宅のリビングで朝食を食べながらニュースを見ていた。

ニュースでは先日亡くなったプロレスラーの本村もとむら 花はなの事件を取り上げていた。

局の取材した内容によると、本村は自宅のベッドの上で遺体となって発見され、リビングには手書きの遺書があったことなどから自殺と断定されていた。また、現場の部屋からは、硫化水素を発生させた薬剤の容器が見つかった。

「本村が自殺ねえ……」

ピンポン、とインターホンが鳴る。

聡美は玄関に移動し、扉を開けた。

「娘の死の真相を調べて下さいー!」

見知らぬ中年の女性が聡美にしがみつく。

「どうしたんですか?」

女性は聡美から離れる。

「ああ、私、本村もとむら 洋子ようこです」

「本村さん?」

「自殺した花の母です。花が自殺するとは思えないんです。調べてくれますか?」

「毛利探偵ではなく、どうして私に?」

「聞いてますよ。最近、名を馳せてる女子高生探偵の工藤 聡美さん。工藤 新一の妹さんなんですよってね」

聡美は困ったような表情をする。

「お願いです。調べて下さい」

「警察には?」

「お願いしましたが、すでに自殺として処理されているとしか……」
「うーん……、わかりました。やってみます」

「ありがとうございます! よろしくお願いします!」

本村はそう言って去っていく。

聡美は携帯を取り出すと、警視庁の捜査一課に電話をかけた。

「捜査一課の目暮だが？」

「工藤です」

「おお、聡美くんか！」

「目暮警部に折り入って相談があるのですが」

「なんだね？ 君にはいつも助けてもらってばかりだからな。わしらにできることならなんでもするぞ」

「最近亡くなったプロレスラーの本村 花について話が聞きたいのですが」

「本村 花だと？」

「はい。今し方、ご遺族がお見えになって、何者かに殺されたんじゃないかって」

「おお、そうか。実はわしらの方でも硫化水素の入手経路を洗ったんだがね、特定できていないんだ。だが、捜査本部は遺書の存在から自殺と判断してね、それ以上の捜査はされてないんだ」

「警部、いったんそちらへお伺いします」

「待っておるよ」

聡美は電話を切ったあと、警視庁へ向かった。

捜査一課に入る聡美。

「聡美くん、待っておったよ」

と、目暮が出迎える。

「これが本村 花の捜査資料だ。捜査本部の江東警察署から取り寄せたんだ」

「拝見します」

聡美は本村 花の捜査資料を読み込む。

捜査資料によると、三日前の未明に、連絡が取れないことを不審に思った母親の洋子が江東区の自宅マンションに訪ねたところ、ベッドに心肺停止の状態で倒れているのを発見。午前三時過ぎに病院へ救急搬送されたが、死亡が確認された。自宅リビングに手書きの遺書と見られるものが見つかったことや硫化水素を発生させたとみられる薬剤の容器が見つかったことから自殺を凶つたと見られているとの

ことだった。

以前から本村が出演する番組での言動などをめぐりSNS上で誹謗中傷を受けていたとされており、批判が激化していた。またプロレス関係者によると最近では精神状態が不安定でリストカットを繰り返し返していたとされ、自身のSNSに「愛されたかった人生でした」の言葉とともにリストカットした血だらけの腕の写真も添えていたこともあったが、その後には削除されていた。

(状況的に自殺としか思えないんだけどなあ)

「目暮警部、本村さんのご自宅にパソコンは？」

「パソコンはなかったよ」

「Wi-Fiはあったかしら？」

「ワイ？」

「ああ、インターネット環境のことですよ」

「どうもワシにはインフラのことは……」

「目暮警部、通信会社を調べてもらえますか？」

「そうか、インターネットを使って硫化水素を手に入れたんじゃない？」

目暮が高木と佐藤を呼び出した。

「お前たち、江東区であった本村の捜査を命じる」

「お言葉ですが目暮警部、その捜査は自殺でケリがついたはずですが？」

と、高木。

「聡美くんが不審に思っておってな」

「そうですか」

「行くわよ、高木くん」

「はい」

二人の刑事が通信会社を調べに出かけた。

53. 女子プロレスラー死亡事件 後編

高木と佐藤の調査で、本村 花の本人による硫化水素の入手経路は存在しないことがわかった。その代わりに、本村のスマホで「確実に人を殺す方法」というワードが検索されているのが判明した。

「——ということですが、目暮警部」

(花さんは誰かを殺そうとしていたのか)

高木の言葉に聡美はそう推察した。

「高木、佐藤、本村が殺害しようとした人物を捜し出せ。亡くなってる可能性もあるからな」

目暮の指示に、高木と佐藤が駆けつけていった。

その後、高木と佐藤の迅速な捜索により、大林 おおばやし 快 かい という男が浮上した。

聡美と目暮も、大林の自宅へ急行した。

「え、花が俺を殺そうとしてたって?」

「ええ。これまでの聞き込みの結果、そうとしか思えなくて」

佐藤が大林の通信履歴の写しを取り出しながら言った。

「大林さん、あなた、インターネットからこのサイトにアクセスしてますね」

続いて高木が口を開く。

「大林さん、あなたはこのサイトで、硫化水素を購入した」

「硫化水素?」

疑問符を浮かべる大林。

「あなたはその硫化水素を使って、本村 花さんを殺害したのではないですか?」

そう訊ねるのは聡美だ。

「なんで俺が花を殺さなきゃならないんだよ?」

「大林さん、本村さんとの京都旅行でお金払ってませんでしたよね?」

「だからなんだよ? それが犯罪だとしても言うのか?」

「本村さんはそのことで不満を溜め込んでいました」

「それだけで俺が殺されるの?」

「だけではありません。あなた、乾燥機能付きの洗濯機に本村さんのプロレス用の衣装が入ってることに気づかず、洗濯乾燥を行なって損壊させていますね」

「まさか？」

「ええ、それで本村さんの中で何かが切れて殺意になった。そのことに気づいたあなたは、やられる前に殺そうと思い、硫化水素を購入したんですね？」

「ちよつと待ってくれよ。俺が殺しだなんて……」

「実は硫化水素の薬剤の容器から誰のかわからない指紋が検出されているんだ」

と、目暮が容器の写真を取り出す。

「大林さん、あなたの指紋と称号させてもらえんかね？」

「……………」

大林は床に両手をついた。

「すみませんでした」

「お認めになるんですね？」

「はい。俺が、俺が花を殺しました。硫化水素を使って。遺書は花が書いた手紙などを拝借して、文字を複写したものです」

「署までご同行を」

と、高木と佐藤が大林を警視庁に連行した。

聡美は本村 洋子の元を訪ね、ことの真相を説明した。

「花は、花は自殺じゃなかったんですね！」

「ええ」

「ありがとうございますー！」

洋子が報酬の金一封を渡した。

「これはせめてものお礼です」

「そんな、いいですよ。受け取れません」

「どうかお納め下さい」

「……わかりました」

聡美は報酬金をしまった。